裏をかゝせてぞ立ちたりける　裏ま　で通りて、立ちたるをいふ。「かゝせて」といふ、詞の使ひ樣は、「射させて」の所を見よ。

鄉保　一鄉一保なり。保は庄と同じく、中古以後に、出來たる地の稱なり。

鄉長　鄉の長をいふ。鄉とは、むかし、村を總括して、他と、區別する時に、用ひし名にして、郡の下の稱なり。○**感覺**　すべて、身にうくる感じを、心に知るをいふ。

殿上人　四位、五位の人の、昇殿をゆるされたる者をいふ。○**遣戸**　鴨居　と、數居とに溝ありて、あちこちに、おしやりあくる戸をいふ。引戸に同じ。

聖人の道　儒道にして、詩書、六藝に、載する所の道をいふ。乃ち、堯、舜、禹、湯、文武、周公、孔、孟の敎きし所なり。○**雅致**　俗ならぬ、風情あるをいふ。

辟易　勢におされ、驚きて、道をさくるをいふ。○**搔い連ね**　うちつれてなり。○**萬戸侯**　萬軒も、家數のある、大邑を領分として居る、大名をいふ。

塗籠の弓　藤を、緊く卷きたる上を、漆にて、塗りこめたる弓をいふ。

新陳代謝　新しき物と、古き物と、入り代はるをいふ。

豊なる年の貢　豐は、豊年の、しるしなりといふ俚言あり。蓋し、これによりていへるならん。○**累代の餘業**　先祖代々より、傳へ來る事業をいふ。

落英繽紛　落花の、散り亂るゝ狀をいふ。

解脫幢相の法衣　釋迦の此の世を逃がれて、着給ひし袈裟衣をいふ。解脫と、幢相とは、其の義別なり。解脫は、梵語、目帝羅にして、目帝羅は、飜譯名義集に、「此云二解脫一」と見えて、諸煩惱を解脫して、知見を得る法衣の義なり。幢相は、釋氏要覽に、「如幻三昧經に曰ふ、無垢衣、又名二忍辱鎧一、又名二蓮華衣一、謂不レ爲二欲泥一染。故又名二幢相一、謂不レ爲二邪所一倒故云々」とあり。されば、解脫の衣、幢相の衣と、別々にいふべきを、一つに連れたるなり。

罪なくして配所の月を見ん　配所とは、罪

を得て、流されたる所をいふ。實際の配所の月を、見んことを、願ふものは、世にあらじ。されば配所の如く、浮世離れて、閑靜なる地に、長閑に、月を見んといふ意なり。

當意即妙　其の場において、うまく、歌を作るをいふ。○**董巨**　董源と、巨然との二人をいふ。共に、支那宋の代の畫家なり。

落花の雪云々　櫻の花の雪の如くに散り亂るゝなめで、錦しげるが如き紅葉ばを心のかぎりながむるさへも、旅といへば、關分つらきものなるを、まして、妻子の成行きもわからぬまゝに殘しおき、ひとり敵にさらへられて拘致せらるゝは如何程つらかりしならんといふ一節の大意なり。

聖衷　天子のおぼしめしをいふ。○**率由**　より從ふことをいふ。

細き管もて大空を云々　細き管を以て天を望めば天は廣しと雖も其の見ゆる所は極めて狹く、食物の味は種々あれども、鼎の一切を味ひしのみにては、其の味ふ所僅に一味に過ぎずといふ意にて、其の所見の狹をいひしなり。莊子に「是直用レ管闚レ天用レ錐指レ地也、不二亦少一乎」とあり。又左傳に「以レ指探レ鼎、鑿未レ嘗二其全味一、亦足二以得一其一臠一」とあり。

新發意　「入道」の所を見よ。

焰硝肴でだご申さう　「だご」は蒟合の約せられたるにて、こゝは接待といふ程の意なり。○**圓通堂**　觀音經をよむ所をいふ。蓋し觀音の功力の圓通自在なるよりいふならん。○**聖靈會の百韻**　陰曆七月十九日に行ふ佛事の席にて、連歌の百韻を供養せしをいふ。而して百韻とは、上句五十、下句五十、合せて百首となるをいふ。○**碁所**　德川氏の時、圍碁の技術を以て代々幕府に仕へたる家をいふ。

傳奇雜劇　演劇の事を、支那にては、傳奇、又は雜劇といふ。

誠者天之道也、誠之者人之道也　誠は眞實無妄の謂にして天理の本然をいひ、之を誠にするとは、未だ、眞實無妄ならざるを、眞實無妄ならしめんと欲するは、則ち人の當然のことであるといふ意なり。○**塔擦**　塔の中心の柱をいふ。

和名抄に「摩羅鉢切、俗云心乃波之真、佛塔中心柱也」とあり。

董生を學ぶ　漢書董仲舒傳に「下レ帷讀誦、蓋三年不レ窺レ園」とあり。乃ち。專ら學問を勤む。○**豊浦の宮の御代**　仲哀天皇の御宇をいふ。○**覓**（カヤロ）　懸樋ともかき、地をはなれたる所にかけて、水をやる樋をいふ。

葵かけわたし　賀茂の祭には、御簾、柱、香物、諸道具などに葵をかくるなり。○**溶々たり**　盛に水の流るゝ狀をいふ。

裏をかく矢　裏まで通る矢をいふ。

虜馬の蹄塵に汚されしことなし　虜とは、外國より攻め來る敵をいふ。乃ち、外敵の國内を横行して、馬の足の蹴立てたる塵に、けがされたることはないとなり。○**福原の新都**　平清盛の意見にて、山城の京より、攝津の福原に都を遷し、之を新都といひたり。然れども、幾程もなく藤原長方の建議によりて、再び山城の京に都を復せり。

源氏の大將の昔の路を云々　源氏物語にあるゝ、源氏の大將の事にして、須磨に遊びしこと、須磨の卷に委し。○**殿原**（トノバラ）　殿傳ともかき、數多の男子を呼ぶ語なり。○**業風**（ゴフフウ）　劫風ともかき、佛語にして迅猛風と譯する風なり。佛説に、世界の破滅に至るに三時期あり。乃ち、之を天の三災といひ、第一は劫火、第二は劫水、第三はこの劫風なり。○**鉄鉞の誅**　天皇の諸侯を殺し玉ふをいふ。禮王制に「諸侯賜二鈇鉞一然後殺」とあり。○**源准公**　源親房公の三宮に准ぜられしを以ていふ。

腹赤（ハラカ）　魚の名にして、實物未詳なり。或は鱈ならんか。○**亂舞**　古、五節の舞の後、殿上人等が今樣類の短歌をうたひて、舞ふことをいふ。○**腹卷**　鎧の一種にして、腹より卷きて背にて合せ、袖のなきものなり。○**奥城**（オクツキ）　墓のことなり。

煙嵐を捲きて押し寄す　煙嵐は馬煙を強くいひたる

にて、馬が、塵ほこりをけたてゝ、急ぎ奔りて押し寄せ來るをいふ。

暗然として　おだやかにといふに同じ。○**遠攻**　近づかずして遠くより攻めり圍むをいふ。○**萬仭の青壁云々**　和漢朗詠集に「山復山何工削二成青巖之形一、水復水誰家染二出碧潭之色一」とあり。これによりて書かれたり。

腰輿　腰の高さまで、手にて持ち行く輿なり。○**紺叢濃**　白地に濃き紺にて、むら雲の如きものを染めたるなり。

裏返してぞ立つ　袖の裏りたる所に射付けたるをいふ。

率分堂（リツブンダウ）　拾芥抄に「大藏省納物數十分之二爲二別納一」とありて、その別納をおさめおく藏なり。

裾（キヨ）　袍のすそにして、束帶の時、後に長くひくものなり。官位によりて、種々制度ありき。攝政關白は、一丈二尺、四位五位は、四尺位をひくといふ。○**萩の戸**　清涼殿の中の室の名なり。

紺くゝり　紺のくゝり染めをいふ。今の紺しぼりのことなり。

葵だにも云々　左傳に「鮑莊子之智不レ如レ葵、猶能衛二其足一」とあり。又分類故事に「鮑莊子は、鮑叔牙の曾孫なり。その亂に居て行を危くし、以て正に從ふこと能はざること、例へば葵の葉を傾けて日に向ひ、其の根を蔽ひて日を遮るが如く、心を用ふることの足らざることを、そしりたまふなり」とあり。

猿皮靫鹿矢（サルガハノエビカゴヤ）**あまた指して**　猿の毛皮にて作りたる靫に、鹿を射る矢を數多さしたるなり。○**圓居**（マドヰ）　「まどゐ」の所を見よ。

腹ふくるゝわざ　思ふことを言はざれば、胸中に鬱し滯りて腹のふくるゝ心地がするとなり。大鏡に、「むかしの人は、物いはまほしくなれば、穴をほりてはいひいれ侍りけめとおぼえ侍る」とあり。

殿もりの伴のみやつこよそにして云々　主殿寮の下役のみやつこ等が、上皇の御所をよそにして、掃除もせぬこの庭に、花が

一面ちりしきて、誠に心ほそくてたまらぬとの意なり。「さのもりのさものみやつこ心あらば云々」の所を參照せよ。○幽玄の道　幽靈玄妙の道といふ義にして、詩歌管弦の深く妙なることをいふ。○愛樂せられずして　人に愛せられ好まれずしてなり。○瑞相　前兆といふに同じ。

細川のながれもゆるなく云々　細川は、播磨國美嚢郡にありて、和歌所の靠邑なり。○董狐が筆　正直にかきて、憚る所なきをいふ。左傳に、「趙穿攻二靈公於桃園一、宣子未レ出レ山而復、太史書曰、趙盾、弑二其君一、以示二於朝一、宣子曰不レ然、對曰、子爲二正卿一、亡不レ越レ竟、反不レ討レ賊、弑レ子誰、孔子曰、董狐古之良史也書法不レ隱」とあり。

電光朝露　真命は電の光り、朝の露の如くに、はかなきものなりとの意なり。

蕓　鱗の轉じたるにて、屋根の瓦をふきたる狀の鱗の如くなるよりいふ。

愛鷹の思ひあがれる　「思ひあがる」とはけだかきにて、われこそと自慢する意なり。乃ち、國境に富士の聳ゆるはあれど、唐漢たる浮島が原に、物を望みて立てる狀の實に思ひあがれる樣なるべし。○萬乘の君　天皇をいふ。「天子有二兵車一萬乘」「兵車萬乘謂二天子一」などあり。

萩を秋といひはやし云々　萬葉集に、「人皆萩を秋といふいなわれは尾花のうれを秋とはいはん」とあり。又、「白露をさらばけぬべしいざこども露にきほひてはぎの遊びせん」とあり。これらによれり。○葱花輦　頂に、葱の花の如きぎぼしの附きたる輦なり。○極樂寺高良など　共に、八幡の讃にあり。「極樂寺」は、安宗といふ僧の開基にして、「高良」は、上下二社ありて、高良大明神といふ。

聖人のいましめにかなへり　易經に、「君子安而不レ忘レ危」とあるをいへり。

落つと侍るやらむ　鞠は、蹴上げて之を足にうけ、地に落さざるによれり。海上は極めてだやかなるを好みて忌みおそるべき波を立てんなどいふは、例のおどけたる筆づかひなり。

萬物の靈　靈はたましひにして、人は、百物にすぐれて、明なるたましひありといふ義なり。書經に、「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」とあり。

聖人の智も學をすてず　聖人といはるゝ程の人でも學事をやめぬとの意なり。○楣間　のきづけなり。又なげしといふ。

極を立つ　極とは、位といふ程の意なり。

腹鼓をうちてうみをさへ云々　腹鼓をうつとは、あくまで食ひ滿ちたる腹を、叩きて戲れ遊ぶさまなり。莊子に、「含レ哺而熙鼓腹而遊」とあるより書かゝれたるなり。うみをさへぐるかすは、文選に、「於レ是鼓怒溶溟揚浮更相觸搏飛レ沫起レ濤」云々とあり。

十四畫の部

照る月の流るゝ見れば云々　空も海も、一つにふりて、照りわたる月の、四へと流れ行くを考へ見れば、天の川の水の源は、海にてぞあるわいといふ意なり。○聞きさしにきける　きゝかゝりにきゝ傳へるといふ意なり。

策を帷幄の中にめぐらし　「策を帷幄の中にめぐらす」と同じ。立所を見よ。○萬の道々の工　大工、左官、鍛冶、石工、其の他種々の工作にかゝはりたる、職人をいふ。

臺聽　貴人のきくことなり。「將軍の臺聽に達す」など。

臺鼎の高き位　三公の位をいふ。前漢書に「三台の星、兩々居る、人に在りては、三公となり、天に在りては、三台となる」とあり。これよりかくはいふ。

絡繹　引きつゞきて、と切れぬをいふ。

○結緣　佛語にして、佛道に、緣を結ぶをいふ。

○領家　土地を、領し居る人、乃ち、庄園の所有主なり。

紫絞理　紫色を帶びたる、絞り雫あるもの、縠きて、細線をなしたるものをいふ。

薨ず　貴顯の人の、死ぬるをいふ。

○腹ぐろ　心ねぢけて、ひがゝしきをいふ。

○翠松老杉　青松と、年老いたる杉とをいふ。

鼓吹　絲竹、管絃にて、唱歌をたすくる義にして、物を、鼓舞加勢するをいふ。世說に、「三都二京五經鼓吹」とあり。

○瑣事　小事といふに同じ。

○墓表　墓にるしをいふ。又、死せる人の、履歷のあらましを、墓にほりつけたるをもいふ。

蓊鬱　樹木の、鬱々さ、しげりあひたるをいふ。

慘虐を免る　ひどいめを、のがるゝなり。

○精力　こんきをいふ。

○演劇　芝居のこと。

○賑す　施してやるをいふ。

鄙吝　いやしく、けちなるをいふ。

○鄙狹　心の鄙しく、胸のせまきをいふ、

聞ける所を貴ぶ　未だ、一度も、見たことのなきものを、人にきゝて、大事がるをいふ。

○聞召す　貴人のきくことを、貴びていふなり。

與す　仲間に入るをいふ。

○閧　昔、戰爭の時、兩軍より發する、相圖の聲をいふ。乃ち、大將、えいゝ〳〵といへば、軍勢一同おうと聲を合するなり。其の之を三度行ふを、さきの聲を作るといふ。

○複眼　瞳多く重りて、多數の視神經を有す眼をいふ。蜻蛉を捕へて之を見れば、明に知り得べし。

○寥々　さびしきさまをいふ。

○摘培　蔡摘み、之を培ずることをいふ。

榕樹　「あこう」ともいひ、枝より根を出して土中に入り、恰も、群林の連綴せるものゝ如し。

壽を以て終る　長いきをして、死ぬることなり。

豪俊　大勢にすぐれたるをいふ。

○漕務所　運漕に關する事務を、取り扱ふ所なり。

○絕えにたる公事云々　內裏、相撲の節など、久しく絕えたるを、再興し、詩歌、管絃の遊など、折りにふれて、催せしことあり。これらをさしていへり。

○精細　物事に精しく、細かなることをいふ。

尋中　ねどこの中なり。

○嶋津日新齊　薩久のこをいふ。

算を亂す　數の多きことをいふ。

○慷慨　世の中の事、或は、身の上の事につき、なげきいきどほるをいふ。

毀譽得喪を以て意に介せず　そしられやうが、ほめられやうが、又、損をしやうが、得をしやうが、それらの事が、少しも、心にかけぬをいふ。

寧所するに遑あらず　靜に、おちつきてなる、ひまのなきをいふ。

○膏油を焚きて晷を繼ぐ　火をともして、夜を日に繼ぐをいふ。

○黎民　天下の萬民をいふ。

聚感園といへるもしるく　心に感ずへき事を、聚めたる園といふ名を、つけたることのわけも、明白に、わかるといふことなり。

壽福をうく　いのちの長きさ、さいはひさを得るをいふ。

箕子　殷の紂王の賢臣なりしが、紂王の驕奢を諫めし、墨戾を極むるを見て、大に嘆息し、殷の運命定れりとして、之を諫めて國へられしが、佯り發狂して、辛くも虎口を免れ、周の武王の世となりて、武王に天道を說き、洪範を作り、後、朝鮮に封ぜられたり。

○幔を隔つ　幕をへだつなり。

○碑　石碑に同じく、いしぶみにして、或る事がらを、後の世に殘さんがため、石にほりつけおくなり。

○歌枕　歌によみ入るべき種の、雅致ある地名をいふ。

蒙衣する　女の外出する時、衣服を、頭にかぶるをいふ。

壽藏　生前に、碑をたてゝ、死して後、葬むるべき墳墓となすべきものをいふ。唐書に、「陳崇、自ら、壽藏を、萬安山の麓につくる」とあり。註に、壽藏は、墳墓なりと。○**碑陰**　石碑の裏なり。○**蒲の穗**　蒲は、水草の名にして、夏の頃、七八寸の、蠟燭形の、茶色めきたる穗の、花を開く。熟する時は、柔く、ほくちを製するに用ふ。

鳴りはためく　鳴動することなり。○**幕下**　將軍を尊びていふ。又、大將の配下、乃ち、附き從ふものをもいふ。○**餌取**　驛多のことをいふ。

箏　箏の誤にして、筍に同じく、竹の子なり。○**寡婦孤兒**　寡婦とは老いて、夫なき婦人をいひ、孤兒とは幼にして、親なき子をいふ。○**墨跡**　手跡に同じく、書きたる文字をいふ。○**蓮宗**　日蓮宗のことなり。僧日蓮、之をばしめ、法華經を唱ふ。南無妙法蓮華經を、高々と唱へ居る宗は、この宗旨なり。○**結搆**　下構をいふに同じ。

慘烈　むごくして、すさまじきをいふ。○**赫々**　さかんに、きらめくさまを、形容していふ。○**精華**　精は、物のこりて、雜りなきをいひ、華は、光彩の美しく、外に顯るゝをいふ。乃ち、精神の、外にあらはれて、花ともなり、實ともなれるが如きをいふ。

豪壯　がうぎにして、さかんなるをいふ。乃ち、目ざましきことなり。

墨守　事を一づに、守るをいふ。○**蒼生**　百人草に同じ。

嶋つ鳥　島に居る、鳥の義にして、鴛の枕詞なり。

蜻蛉の臀呫　さんぼうの、輪になりて、尾をくはへ、飛ぶさまをいふ。

蓬が杣　よもぎの繁りて、くさむらとなりたるをいふ。

語部の民　延喜式に、「凡物部、門部、語部者、左右衛門府、九月上旬申レ官、預令二登レ程參集一物部、左右京各二十人、門部、左右京各二十人、大和國八人、山城三人、伊勢二人、紀伊一人、語部、美濃八人、丹波二人、丹後二人、因幡三人、但馬七人、出雲四人、淡路二人」とあり。これらの語部の民ば、大嘗會の時、上古の故事を語るなり。○**管絃**　管は、笛などの義にして、絃は、琴などの義なり。

筵　酒席をいふ。○**裳裾**　「もすそ」の所を見よ。

碧蹄館　朝鮮の地名なり。○**瑤盃**　たまの盃をいふ。

漫々　水のかぎりなき狀をいふ。○**歌仙**　歌を作る名人をいふ。

廓清　廓は、小を張りて、大ならしむることにて、國土を弘め、奸佞の徒を、しりぞくるなどをいふ。○**稗史野乘**　稗は細なり、小說、雜史、軍記の類をいふ。漢書藝文志に「小說者二之稗說一」とあり。○**蒼仙**　梅樹の異名なり。

種樹家　植木屋をいふ。○**榜文**　たてふだの文をいふ。

愼德公　德川十二代將軍家慶公なり。○**紝織**　糸をつむぎ、機をおることなり。○**結髮**　十五六歲の小兒をいふ。崇神紀に、「古俗、小兒年十五六間、束二髮於額一」とあり。○**彰考館**　左傳に、「若夫制作之文、所以章往考來」とある二の句をとりて、名づけしなり。○**敷島の道**　和歌の道をいふ。

漫なる言の葉　言の葉は、ことばをいひ、漫は、「そゞろ」の所を見よ。

幘　冠と同じ。○**鳳輦**　屋形の上に、金の鳳凰をつけたる輦にして、天子の御用に供するもの。○**紫震殿**　京都、禁中の正殿にして、南殿ともいひ、大禮を行はるゝ時の御殿なり。○**與力**　舊幕時代、加勢の兵士をいふ。

蚋のい　くものすをいふ。○**髣髴**　似てたるさまをいふ。

厮養　飯たき小僧や、小使、人足の如き、下賤の人をいふ。史記に、「取レ薪者曰レ厮、炊烹者曰レ養」とあり。○**種姓に拘らず**　氏すゝやうによらぬなり。「氏種姓」の所を參照せよ。

滿目の彩錦華繡深紅淺黃の綾綺を織出す　彩錦、華繡は、花の美麗なる狀を形容し、深紅淺黃は、花の色合を形容し綾

綺を織出すは、花の咲き出でたる狀を形容したるなり。乃ち、眼の眉く限りは、綾綿を織り出せるが如くに、一面、爛漫と花が咲き亂れたりといふ意なり。○漁夫の利　兩者相爭ひ、他人、この爭によりて、利を得るをいふ。其故事は、蘇氏が、越王に、「鷸蚌の相爭ふは、漁者の利なり」と說きたるより出づ。蚌、水を出で、肉を日にさらしに、鷸來りて、其の肉を喙しけるを、蚌は、貝を合せて、其の嘴をはさみたり。鷸は、之を拔かんとすれども、貝は、放たず、其の間に、漁夫來りて、鷸と、蚌とを得たりといふ。○葦手をかけるやうなり　草文字を、書けるが如くあるといふ意なり。葦手とは、文字をくづして、葦ゐどの、生へ亂れたるやうに書けるをいふ。○截生の矢　「うすきりぶ」の所を見よ。

粹然　完全といふに同じ。○墨染に咲きし櫻　古今集に、「深草の野邊の櫻し心あらば、ことしばかりは墨染にさけ」とあり。喪中に、墨染の衣を着るより、櫻の花までも、墨染めにさきしやう、いひなしたるにて、喪中にさきし櫻といふ義なり。

蒙塵　天皇の、難に合ひて、漂泊し給ふをいふ。○蒔繪　漆と、金銀の粉とを以て、器物に、模樣を畫きたるをいふ。○斡旋　周旋といふに同じく、かけ廻りて、世話をするを、いふ。○滿潮　海水の、一ぱいに、滿ちたる時をいふ。

嘔氣　胸わるく、はく氣味のあるをいふ。○蒸籠　釜の上にかけて、物をむす道具なり。○豪農　身代のよき、百性をいふ。○誘掖　さそひたつるをいふ。○穀を避けざる仙境　仙人は、すべて、五穀を絕ちて、草木を食ひ、以て、生命をつなげり、こゝの里は、五穀を、絕たず食すれども、其の境遇、恰も、仙人の住む、仙境の如くなれば、穀を避けざる、仙境といひしなり。

壽盃　いはひの酒宴をいふ。○壽詞　言言の義にして、ほめたゝへ、いはふ詞なり。○寤寐　ねてもさめてもなり。○臺の竹　うてなは、屋根のなき、高殿の臺にして、之を作りたる竹をいふ。○塵事　世の中の俗事をいふ。

塵の外なる世界　浮世の外の國にして、仙境といはんが如し。

酴醾　夏生の灌木にして、さきんいばらともいふ。枝に、とげ多く、夏のはじめ、ばらに似たる形の、青白き花を開く。○寢殿　貴人の表座敷をいふ。「三間の寢殿」を參照せよ。

管玉　玉の一種にして、圓柱管なり。心に紐を通して、頸、手などに帶ぶ。○赫奕　かがやきて、明に目立つをいふ。○葦毛　白き毛色に、黑きさし毛あるをいふ。

裳　「も」の所を見よ。○銀閣寺　慈照寺といひ、初は、足利義政の別莊にして、北山殿といひたり。薨後、遺命によりて寺となし、觀世音を本尊とす。金閣寺に對して、銀閣寺といへども、飾めしにはあらず。○翠黛　敎へて、銀箔を、翠は綠にして、黛は、眉をかく墨なり。乃ち、眉をそりおとし、黛を以て、眉を畫くをいふ。○蓮府槐門　共に、大臣の異稱なり。其の故事は、晉の王儉といふ人、大臣となりて、家に、蓮を植ゑ、之を愛して、相府蓮といふ樂あり。之より大臣を、蓮府といふ、又、周の世に、三槐を外朝に植ゑて、三公、其の下に班列したり。蓋し、槐は懷と、其の音通じて、遠人を懷くる義なりと、依りて、之より三公を槐門といふ。後、宋の世に至り、王祐といふ人、手づから、三本の槐を、庭に植ゑ、我が子孫、必ず、三公たらんといひしが、其の子、且王といへる人、眞宗に相たり。○魁偉　身體の大きなるをいふ。○翠鬟　山の青々とした狀をいふ。○蒙衝　敵艦を、つき破るために作りたる、小さき軍艦なり。

銜枚　馬の嘶きを、防がんため、其の舌をしばるをいふ。○說破　議論なして、說きつくるをいふ。○槎牙瘦古　木葉の、殘らずちりはてゝ、幹のみ、やせながら立ちなるをいふ。○皷濤　松吹く風の音をいふ。

輔車　耳の下の、曲り頰の端なり。字書に、「輔車は、頰輔なり。車は牙車なり」とあり。むとがひ、ほゝ骨などいふに同じ。○碧疇　青々としたる、田畠をいふ。

蒼潤ならず　つやのないことをいふ。○歌聖　歌にすぐれたる人をいふ。○銀河九天より落つ　銀河とは、天の川を

いひ、九天とは、最も高き天をいふ。乃ち、其の狀の、天の川が、九天の空より、どつと、落ち來るやうだとなり。李太白の詩に「日照二香爐一生二紫煙一、遥看二瀑布一掛二長川一、飛流直下三千丈、疑是銀河落二九天一」とあり。

漠々　どんよりと、曇りたる、狀をいふ。○**嘖々として**　評判高く四方になりわたる狀をいふ。○**蒿萊**　蒿はよもぎの類にして、萊は香草の名なれども。蒿萊とつゞく時は、くさむらの義なり。○**端書**　序文、又は緒言などいふと同じく、書物の前の端に、其の書の大要、或は評論などを記したる文をいふ。

臺灣の役　明治四年琉球人五十四人、仝六年小田縣人四人、前後臺灣に漂着せしを、土藩の島に殺されたり。明治七年、朝廷問罪の師を起し、四鄉從道を都督として、番地を悉く平げしかば。清朝償金五十万兩を出し、事乃ちやむことを得たり。

輕舟既過萬重山　輕き小舟にて、早や既に、幾重もかさなりたる山を過ぎさりたりとなり。唐詩選に「朝辭白帝彩二雲間一、千江陵一日還、兩岸猿聲啼不レ住、輕舟已過二萬重山一」とあり。

蒲柳の質　身体の柔弱なるをいふ。世說に「顧愷之、緊の簡文帝と同年なり。而して髮早白なりければ、帝其の故を問ひしに、答へて曰はく、松柏の姿は霜を經て愈繁り、蒲柳の質は、秋を望んで先づ零む」とあるより出でたり。○**管鮑の交**　親密なる朋友の交りをいふ。管は管仲、鮑は鮑叔にして、共に齊の桓公に仕へ、仲は後に宰相となりたり。其の交りの深かりし事を擧げんに、史記に「管仲、嘗て、鮑叔と與に賈す、利を分つに、自ら多く與ふ、鮑叔以て貪るとなさず、仲が貧なるを知ればなり。嘗て事を謀りて究困す。鮑叔以て愚となさず、時に、利不和のあるを知ればなり。嘗て、三たび戰ひ、三たび走れども、鮑叔以て怯となさず、仲が老母あるを知ればなり。仲の曰はく、我れを生むものは父母なり。我れを知るものは鮑叔なり」と、これより、親密なる交りを稱するに至れり。

精衛が海を塡む　山海經に、「發鳩之山有鳥名二精衛一、是炎帝之女瘞遊二於東海一溺而不レ返常取二西山之木石一以塡二東海一」とあり。俗に、蜆貝にて海水を汲むといふに同じく、到底其の効なく、力の及ばざるをいふ。○**歌の詞書**　歌をよくきこゆさせんが爲

に、歌をよみし心を詞にてかく故にいふ。○**紫苑**　秋、七八尺の莖を出して、淡紫の花を出す。其の形菊の如くして、野花群り開く。「しをに」「十五夜花」などいふ。

滔々たる　水の廣く大なる狀をいふ。

養由をも耻ぢざれば　養由は有名の弓ひきなり。「命ん養由が矢さきにかけ云々」の所を見よ。○**榮花**　花々しく、時めき榮ゆるをいふ。

精靈　佛家にて、死人の靈魂をいふ。○**瑤輿**　玉の輿にして、天子の御物なり。

褊衫の袖　ひとへぎぬをいひて、僧侶の衣なり。○**榻**　車の轅をもたする臺にして、机の如きものなり。○**蓬萊山**　佛語にして、神山の名なり。不老不死の境として、目出度きことにいへり。○**壽碑**　「壽祺」に同じ。同所を見よ。

僭踰　分際以上の事をなすをいふ。

輕島のあきらの宮の大御代　第十六代應神天皇は、大和の輕島豐明宮に在したり。故に、この御代をかくはいふなり。

漢の道は下より根はへ云々　漢學は下流の社會より、次第に世に廣まりといふ意なり。

葦どものしげりさやれる處々を云々　葦などの生ひ茂れるをよくきれる鎌にて、きりひらき、きりひらき、水底をさぐり尋ねて、眞珠や白玉をとり得たりとの表面の意にて、裏面にはすたれる皇國の學問を、ふたゝび榮ゆる御代にもりかへして、古事記や、萬葉集の如き、遠き昔の事を書き記しある書物を、讀み明むるやうになりたりとたとへたるなり。契沖は涙華に居たれば、かく葦をとり出で、之を皇學に、敏鎌を契沖に、眞珠白玉を、古事記萬葉集などにたとへたり。○**隱形の咒**　すがたをかくして、人に見えなくなるまゝなり。○**颯と**　颯に、急に、なに、ごいふに同じ。○**颪と**　颪に同じ。○**隱階**　寢殿の樣に上る階段の前に、二本の柱を立て、屋根を作りて、車を

寄する料とし
たる所をいふ。

歌のやうにもあらずかきなし云々　歌を書くは、文章と、其の体異るを、然かせずして、普通の文章と書きつゞけにして、歌とも文章とも思はれざるやうにかきしなり。○**歌の口なれば**　歌をよむに得意の口づきなればといふ意なり。○**嗔物造の太刀**　銀輪なは め、虎の皮の尻鞘をかけて、足は兵庫鎌に七星にていかめしく作りたる太刀をいふ。

瑠璃光如來　藥師如來のことなり。○**閣道**　閣は樓といふに同ト、樓の通り、乃ち、廊下をいふ。○**敷瓦地**　土間に瓦をしきたるをいふ。

聚歛　寄醵に、稅をとりたつるをいふ。○**漸醺**　少しばかり醉へるをいふ。ほろ醉といふに同ト。○**語りつぐべく**　語りつぐやうになり。萬葉集に、「ますらをは名をしたつべし後の世にきいつぐ人もかたりつぐがれ」とあるによれり。

增賀聖　慈惠僧正の弟子にして、叡山の座主なり。○**銀手形**　商人より取引ある兩替店、又は甲兩替店より、乙兩替店にあて、渡し先きの人名を記入したる振出手形をいふ。大阪一般の取引は、薪炭より、米鹽に至るまで、皆この銀手形を以て、節季の拂ひにあてしなり。

十五畫の部

經濟　すべて、費用をはぶき、富を增す手段、方法を講ずるをいふ。

蔓陀羅　淨土眞相の圖をいへり。○**經書**　支那の、古の聖賢の、作りたる書物にして、哲學書、歷史學書、文學書等あり。其の中に、五經、六經、七經、十三經等あり。各其の條下に之を說く。○**澆漓**　澆は薄にして、漓は水の滲りて地に入るをいひ、人の輕薄なることを

をいふに用ふ。○**經學**　經書の學問をいふ。○**經典**　聖人賢人の、事をかきたる書物をいふ。○**經藝**　經典と技藝となり。○**醇厚**　醇は專にして、純淸なり。乃ち、すなほにして、人情の厚きをいふ。○**經國**　國を治むることなり。○**絹座**　「七座」の所を見よ。○**節會**　古、朝廷にて、一定の公事ありし時の、集會にして、群臣に、酒食を賜ふをいふ。其の大節會は、白馬節會、豐明節會にして、小節會は、元日節會、踏歌節會なり。○**節度**　きまりといふに同ト。○**節に臨む**　みさほを、たつべき時になるなり。○**輦**　輪なくして、人のかつぐ、屋形車をいふ。昔、行幸の時に用ひ、其の屋根に、鳳凰のあるを、鳳輦といひ、其のなきものは、親王、大臣などにも、許されたり。○**節度を受く**　命令をうくといふに同ト。○**輓近**　近年、近頃などいふに同ト。○**默許**　知らぬふりして、見許すをいふ。○**標木**　しるしとして、建つる木をいふ。

賤の篠屋　篠屋は、篠などを以て、葺きたる小家にして、賤しきものゝ、住める家をいふ。○**憫然**　あはれに、かはゆさうなる狀をいふ。○**諄々**　いてれい親切に、教ふる狀をいふ。○**稿本**　草稿といふに同ト。○**憂世**　現在のこの世をいふ。○**窯**　陶器、瓦などをやくかまをいふ。○**播栽**　種子をまき、苗を植うるをいふ。○**餘毒**　殘りのわざはひをいふ。○**實學**　實地につきて、學ぶ學問なり。○**霄壤の差**　天と地程の、ちがひをいふ。○**餘贏金**　餘金、殘金などいふに同ト。○**調度**　手廻り道具をいふ。○**德者本也財者末也**　「財散則人聚」の所を參照せよ。○**廉潔**　潔白にして、正直なるをいふ。○**遷幸**　天皇の引きうつり給ふをいふ。○**蓼虫不知辛**　蓼は、元來、辛き草なれども、之に寄生して、生活する蓼虫は、其の辛きを、少しも感ぜぬこと同じく、京都に住む人は、京都なる名

所古跡を、左程、名所古跡らしく見らぬにたとへたるなり。王粲の詩に、「鑿蟲不レ知レ辛、去來莫二興歎一」とあり。又、鮑林玉露に、「氷蠶不レ知レ冬、火鼠不レ知レ熱、鑿虫*レ知レ苦、蜈蚣不レ知レ臭」とあり。

雍州府志　漢土の雍州に、長安の都あるより、京都を長安に比して、かくは名づけたるなり。里川道祐の著、漢文にして十卷あり。○**實にかなふ**　實際に合ふをいふ。○**癸地**（ワイヂ）「つゐひぢ」の所を見よ。○**輓今**　末の世の義にして、近年、近頃などいふに同じ。○**遽然**　にはかといふに同じ。きを卑めていひたる語なり。

赭黑　黑みを帶びたる赤色をいふ。○**踏察**　實地をふみて、見ることなり。

駑下　おろかといふことなり。○**駕籠**（カゴ）　人をのせ、二人して前後よりかきて、行く道具なり。○**憤然**　おこりたる體をいふ。○**稼穡**　五穀を、植ゑつけ取り入るゝなどをいふ。○**劍客**　劍術つかひをいふ。

實記散佚す　實際の事を、記したる書き物が、ちり失せたるをいふ。

慾　望みむさぼる心をいふ。○**磚茶**（ヂンチヤ）　玉になれるを削りて呑むなりさぐ。

蔚山（ウルサン）　朝鮮の地名にして、加藤清正の苦戰せし所なり。○**餘烈**　殘し傳へられたる、功業をいふ。○**餘薰**　餘勳といふに同じく、殘りのいさををいふ。

熱鬧（ネツナウ）　雜沓といふに同じく、多く、人の入込むをいふ。○**摹刻**　うつしきざむをいふ。○**談義**　物事の理をとくをいふ。淨土宗にて、說法のことをもいふ。

榴散彈（リウサンダン）　ざくろだまとて、中に、數多の、小丸の入り居りて、先方にて、破裂するやう作りたる大砲のたまなり。○**潮煙**　汐のくだけて、飛びちるしぶきをいふ。

賣代　賣物といふに同じ。○**趣致**（おもむき）　きなり。

翫弄の珍　もてあそびとすべき、珍重のものをいふ。○**該通**　劉通に同じく、よく適合して、通達したるをいふ。○**慶筵**　よろこびの酒席をいふ。

劍太刀かみつる息の風にこそ云々　護良親王の、害せられたるを、いきどほり、慷慨悲憤の士は、霧の如くに起り立ちて、天皇の軍に御方せしことなり。「劍太刀かみつる」は、親王、淵邊伊賀守義博に、害せられし時、頸をちゞめて、さゝれし太刀を、かみ折りしをいふ。「風にこそ」は、親王を、神にたとへ、風は、神の息より起るといへば、かくはいふ。「なげき」は、慷慨悲憤の士をいひ、霧に、*志士の、多く起り立つを含ませたり。

鞍の四方手（クラ　ホデ）　鞍の前輪、後輪、共に、二個所づゝ、付くる紐ありて、むながひ、しりがひを止むるに用ふ、之を四方手といふ。蓋し、四方より出づればなり。

諸職　中宮職、大膳職、左右京職、などの役所をいふ。○**諸寮**　圖書寮、大學寮、雅樂寮、主殿寮、などの役所をいふ。○**諸司**　藏司、造兵司、典獄司、防人司、などの役所をいふ。○**潤色**　文章などを飾りて、色つやを添ふるをいふ。

齒牙にかけず　口の端にかけぬといふことなり。

經營漫費ニ人間力一、大業全依ニ造化功一、事業を經營するには、大に力を費さねばならぬ。而して、十分勉めたる所で、造化の力によりて、大業を成就するのであるとの意なり。漫は、おほいにとよむべし。○**調庸**　「租庸調」の所を見よ。○**踐祚**　先帝、崩御の後、皇太子の、位をつぐを踐祚といひ、後、更に、大禮を行ひて、皇帝と名のらるゝか、即位といふ。○**盤根錯節**　盤根とは、根のうねり曲りたるをいひ、錯節とは、節の入り組みたるをいふ。乃ち、困難の場所をさしていへるなり。

駕輿丁（カヨチヤウ）　輿丁と同じく、みこしをかつぐ、人をいふ。○**澆季**　衰へたる世、なごいふに同じ。○**腸をたつ**　非常に、かなしき體をいふ。

諸越（モロコシ）　支那のことなり。山や川や、諸を越して、行く故にいふ。

憤の心を起す　論語より出でたり。乃ち、奮發心を起すをいふ。

論ふ（アゲツラフ）　「あげつらふ」の所に出づ。○**斷馬の聲**　馬のいなゝく聲をいふ。○**震天撼地の聲**　天地を、ふるひうごかす程の、聲をいふ。

磊珂として　數多き體なり。

醉生夢死の者　徒に生れて、なすことなく、又、徒に死ぬるをいふ。

德廟　德川二代將軍秀忠公を、台德院といふ。故に、德廟ともいへり。

駒ひきわたる望月の頃　昔、陰曆八月十五日より、廿日まで、諸方の牧場より、馬をひき來りて、相坂、又は、禁中に引き參るをいふ。「望月の駒」といへば、信濃の望月といふ牧より、逢坂山を經て、京都、禁庭へ參るをいふ。續後撰集に「あふさかの關たち出づるかげみれはこよひそ秋の望月の駒」紀貫之の歌に「逢坂の關の清水にかげみえて今やひくらん望月の駒」とあり。照し見るべし。○**彈正尹**　彈正臺の長官なり。多くは、親王、或は、大納言以上の兼官にして、勅任なり。「彈正忠」の所を參照せよ。○**課役**　夫役を申し付くるをいふ。

儀衛　儀仗兵といふに同じく、儀式に用ふる兵隊なり。○**叡藻**　天皇の詩文をいふ。○**鄭玄**　字は康成、後漢の北海高密の人なり。馬融の門下にありて、三年見ゆることを能はず。融乃ち、高樂の弟子をして、玄に傳授せしむ。融、諸生を集め、圖緯を考論することあり、玄の能く答へて誤る所なし。融これより、玄を敬ひ、高密縣に告げて、一鄉を立て、鄭公鄉といはしむ。玄、縣に赴く、黃巾の賊、數萬人に遇ふ、皆、玄を見て拜し、相約して、縣に入らず。玄、周易、尚書、毛詩、儀禮、禮記、論語等を註し、又、天文、七星論等を著し、臨孝存の周禮難に答ふ百萬餘言ありといふ。

舞謠　能に合せてうたふ、謠曲をいふ。

賜はりて某男に張らせ候はむ　おさげになりて、下男にはらせんといふことなり。○**彈正忠**　彈正臺の長官を、尹といひ、次官を、弼といひ、其の次の判官を、忠といふ。彈正臺とは、古、上等の法官の稱にして、非法の事を檢する官なり。○**隨身**　古、攝政關白、大臣大將などに、賜はりなる、護衛の近衛の武士にして、外出の時從ふ。攝政關白には十人、大臣大將には八人、納言參議には六人なり。

調度掛　弓矢を以て行く人をいふ。○**導師**　よく衆生を、導く僧をいふ。又、佛葬の時、儀式の主となる僧をいふ。○**鄭成公**　明の姓、朱を賜はりしを以て、國姓爺ともいひ、明の亡びて、清の興るや、兵を擧げて、恢復をはかりしかども、克たず、遂に、退きて、臺灣に據り、其の孫、奏舍に至りて、遂に清朝に降れり。○**餓莩**　うゑ死にのことなり。

劍花を散らす　劍と、劍とを、きりむすぶことにて、戰爭の開くるをいふ。

僻鄉　片田舍をいふ。

劍にいまだ錆をおびず　劍は、武士の魂といへり。其の劍に、錆をつけざるは、士人の心がけ、想ひやらるゝなり。○**麾**　采配とも書き、古、戰爭の時、大將のもちて、士兵をさしずする具なり。其の製、厚紙を細く斷ち、之を束ねて、柄をつけたれば、其の形、恰も、ちりはたきの如し。○**德澤**　おかげといふに同じ。○**簏**　「えびら」の所を見よ。○**駟も及ばず**　駟も、舌に及ばずの略にして、言舌に出づれば、則ち、駟馬も、之を追ふこと能はずと、其の失言を惜しみたるにて、論語より出でたる語なり。

節刀　黃髮牛の尾を以て、之を作り、大將之を以て、帝下の首都を進退す。日本にては、刀劍を以て、之に代へ、破敵といへる實劍を、出征の大將に授受し、事やめば、返上す。

廟堂　「大學察」に同じ。同所を見よ。○**鄭衛の音**　みだりがはしき歌をいふ。鄭衛は、共に、みだりがはしき歌の、流行せし國なり。

衝動の功　つきはげまして、然らしめたる、功をいふ。

暮色蒼然　くれ方のけしきの、うすぐらきをいふ。○**磊落**　小事にかゝはらず、物事に活潑にして、かくす所なきをいふ。○**滿淸**　今の淸國皇帝愛親覺羅氏ば滿州より起りしを以て、かくはいふ。○**碾茶**　挽茶ともかき、製茶を、白にてひき、粉にしたるものを、熱湯にかきまぜて飲む。又、抹茶ともいふ。○**鴟張**　暴威をはるをいふ。○**腸を洗ふ**　心を、快くすることなり。

暴虎馮河（バウコ ヘウカ）　暴虎とは、荒れ廻る虎を、徒手にてうち、馮河とは、大河をかちわたりすといふことにて、極めて無謀なる、命知らずといふことなり。論語に「暴虎馮河、死而無レ悔者吾不レ與也」とあり。

○澌盡（シジン）　水のかれつくるといふ。

○樞軸　地球の中心を、たてに貫きたる假定の軸といふ。

○輩出　ぞろ〳〵と、引きつゞきて、世に出づるといふ。

遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看（シベダテ カ、ケテ）　唐の白樂天といふ詩人の作りし、詩の内の一部にして、其の意は明なり。

隨筆　浸筆といふに同じく、得るに從ひ、筆にまかせて、書き付けたる文書をいふ。

經世の識　世を治むるにつきての、見識をいふ。

凜として　威儀ある狀をいふ。

○凜烈、凜然　寒さのきびしきをいふ。又、すさまゝき狀をもいふ。

○漢灣（テンワン）　淀川をいふ。

黔黎（ケンレイ）　下民のことなり。

○翩々　落花などの、ひら〳〵と散る狀をいふ。

皚々（ガイ〳〵）　すべて、白きものを、形容していふ詞なり。

遺烈　「餘烈」といふに同じ。全所を見よ。

○質（チ）　人質のことなり。乃ち、約束に背かぬため、妻子などを質として遣しおくをいふ。

○賤の苧だまき繰り返し　靜の歌に「賤やしづ賤の苧だまき繰り返し昔を今になすよしもがな」とあり。この意をとりしならむ。「苧だまき」とは、うみたる苧をまくわくなれども、こゝは、繰り返しの枕詞として用ひたるなり。

諸共に苔の下に朽ちず　死せし嫁と共に、其の名は埋れて仕事ひはせずに、尚ほ殘りなれば、思ひの種となりて、悲しくてたまらぬとなり。「苔の下」とは、墓の下といふに同じ。

○鄭芝龍（テイシリウ）　明朝の遺臣にして、清朝を滅ぼし、再び明朝を興さんと欲し、我が肥前の平戸に來りて田川氏の女を妻とし、男子二人を生めり。長を成功。次を七左衛門といふ。芝龍は、頻りに其の徒を招集し、勢稍勢なりしも、終に其の志を達する能はずして清朝に降服せり。

實業　理論のみにあらずして、實地に行ふ、農、工、商などの如きものをいふ。

碼頭　丁字形に海中に突き出したる船をつなぐ場所をいふ。

論語讀みの論語知らず　程子の語に「今人不レ會レ讀レ書、如レ讀二論語一、未レ讀時、是此等人、讀了後、又只是此等人、便是不二曾讀一」とあり。蓋しこれに基きしなり。

○經書史類　十三經二十一史の類をいふ。十三經とは、周易、毛詩、尚書、禮記、周禮、儀禮、左氏傳、公羊傳、穀梁傳、孝經、爾雅、論語、孟子をいひ、二十一史とは、史記、前後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、後魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史（以上十七史）遼史、宋史、元史をいふ。

○敵愾（テキガイ）　左傳に「諸侯敵二王所レ愾而獻二其功一」とあり、愾は憤怒の義にして、若し王者の憤怒すべき内患外寇あらば、直に敵して、之を打ち碎くをいふ。

○輪鼓（リウコ）　鼓をうちて舞ふわざをいふ。

餘業に學ぶ者云々　小を學げて大をあらはし、冒外に卒業者をほのめかせり。乃ち、專修者は勿論なる意を含めり。

憂をも忘る　東方朔の傳に「錦レ憂者莫レ若レ酒」とあり。又古樂府に「何以忘レ憂、唯有二杜康一」とあり。杜康は酒の一名なり。又、陶淵明の詩に「汎二此忘憂物一、遠二我遺世情一」とあり。忘憂とは酒をいひたるなり。

○撰集の御沙汰　撰集とは、天皇より勅をうけて、諸人の歌を撰びあつむるをいふ。乃ち撰集せよとの御仰なり。

樊噲もかくやと覺えて　樊噲は、漢の高祖の臣にして、勇猛の聞え高し。高祖の項羽に欺かれて、其の陣に至り、甚だ危くなりたる所に、樊噲馳せ付け、門を破りて殿中に入り、項羽を呪め付けて大に讃を挫き、遂に高祖の命を救ひたりとぞ。

德つく　福分のつくことにて、まうけたるをいふ。

摩利支天（マリシテン）　梵語にて陽炎の義なり。天竺にて火星の女神といへり。後世軍神をいふ。

諸口　「樂口」の所を見よ。

諸院諸宮の隨身火長云々　續聚三代格式に「諸

院諸宮諸家使等、隨身火長各三四人、或載注牒中或徒然相從、即其所行非注云々」とあるを引けるにて、諸院諸宮とは、上皇親王ふごを申し奉り其の御使の庄園などに、下向する時、火長と稱して、三四人の從僕を召具せらるゝ事と見えたり。○霞且　支那の異名なり。

鞍をおき替へさす　この馬は、狂暴なる馬なればとて、他のものとなしき馬に鞍おきかへさするなり。

導師に請ぜられむ　導師は、戒教師といふに同じ。

蔦かへでしぐれぬ ひまもうつの山云々　宇都の山の蔦かへでにしぐれぬひまも、我が袖は、涙にふりつゞけられて、その袖に色がこがるゝといふ意なり。しぐるゝ時は、すべての色がこがれて、赤黑くなるもの故に、かくいひたり。

實方の中將の云々　實方は、行成の冠を、殿中にて打ち落したる暴暴ありて、陸奥守に貶せられたり。其の途中、此の逢に滯りしなるべし。

罷申の儀あり　天皇に拜謁して、赴任の暇乞をなす儀式なり。

駒とめて云々　新古今集に、「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」とあり。

寢覺してきかぬをきゝてわびしきは云々　あかつき方に、夢をさまして見るとき、是れ迄、一度もきゝしことのなき、荒磯波のうちしきる音高く、實に、わびしくてたゞられぬさなり。

醉翁亭　古文眞寶醉翁亭記に、「太守與レ客來飲二于茲一、飲少輒醉、而年又最高、故自號曰二醉翁一也、醉翁之意不レ在レ酒、在二山水之間一也、山水之樂得二之心一而寓二之酒一也云々」とあるによれり。

鴟尾　靴履の形したるものにして、宮殿の棟に付くるものなり。又、鴟の尾の如くにも見ゆるを以て、かくは、鴟尾の字を用ふ。○諸司の一分　諸司の下官、乃ち史生なり。

○儀形せり　令義解に「儀者善也、形亦法也、四海者九夷八狄七戎六蠻也」とありて、標註令義解校本に、「釋曰儀威儀也、形容也、後漢書云李膺風格儀形皆可二師範一也師範儀形文異義同也」とあり。○論理法　志想の法則、乃ち、辯證の方法を正しく述ぶる手段方法を研究する學をいふ。○篇つかせ　篇つくさは、唐文學の詩句などのうちより、篇をかくして、勞のみを見せ、其の何篇なるかを、あてさするをいふ。

實生　實より出たるものをいふ。○監本四書　唐本の四書なり。支那の版に、監本といふがあり。○輪違　輪を二つ、打ち違へたるものにして、擔谷、及び、高の紋所なり。

影みれば涙の底なる久かたの云々　うち仰ぎ見るべき月かげの、かく波の底に沈んで居るを見て思へば、その上を漕ぎわたる我が、大空を行く心地がして、實に危く、おそろしさなり。○諒闇　まことにくらいといふ義にして、天皇の崩ずるを、いふ。日本にては、十三ヶ月、支那にては、滿二ヶ年なり。○輪奐　安壯にしてうるはしき狀をいふ。

十六畫の部

錙銖　共に、斤量の名目にして、錙は八兩、銖は、二十四分の一兩なり。乃ち、最も、輕きものをいふ。又、少しばかりといふにも用ふ。○幾そばく　「いくそばく」の所を見よ。○維新　萬事、すべて、新しくなることを言へども、主として、明治初年の、幕政の變ずて、王政となりたるをいふ。○髭の塵を拂ふ　むべつかなずることなり。○墾泊　舟の泊る所をいふ。○墾田　田地をひらくことにして、これに、山野を、新に開くものと、あれはてたる地を、更に、開くものとあり。墾田は、租

稅を官に納む。○學びの塲　學校のことなり。

賴む木蔭に雨漏る　雨をさけんと、賴みに思うて、立ち寄りし木かちも、雨がもり來るといふことにて、賴みに思うて、だより來りし人の、居なくなりて、賴みを喪なくなりたるにたとへていへり。○磨墨　賴朝の愛せし馬にして、梶原景季に與へしものなり。

閾　戸口に、横たへたる木にして、俗に、しきゐといふ。○橄欖　熱帶の方の、植物にして、實は、櫞に似て、稍肥大、食物、又は、藥用とす。おれえふゆは、この木より採りたり。

龍眼　熱帶の方の植物にして、葉は、むくろじに似、實は、南天に似たり。之を葉乾にして、舶來し、藥用に供ず。○擔石の貯　いさゝかの貯をいふ。前漢書に、「家產不レ過二十金一、乏無二儲石之儲一、憂如也」とあり。○儒者　支那の學問したる、學者をいふ。

儒官　儒學を以て、仕へたる官をいふ。○篤實　親切にして、正直なるをいふ。

濟度　佛語にして、人の罪業に迷へるを救ふことなり。

鴨毛の御屏風　屏風の文字を、鴨の毛を以て表したるものなり。

盧舍那佛　大日如來のことなり。○確執　互に我意をはりて、譲り合はぬをいふ。○戰亂の巷　戰爭の塲所をいふ。

概稱　廣き名稱をいふことなり。○輸出入　內國の品物を、外國に積み出すを、輸出といひ、外國の品物を、內國に積み入るゝを、輸入といふ。

鹽漱　手をあらひ、口をそゝぐをいふ。○濃茶　ひき茶のことにして、分量を多くして、湯にたて飲むものなり。其の量を、少くして飲むを薄茶といふ。

激湍　荒瀨のことなり。○親信近幸　最も君に信ぜられて、傍近く奉仕する人をいふ。○辨口　べんぜつに同じ。○櫓　寒國にて、雪の中を行くに、用ふる乘り物なり。○禪宗の門徒　禪宗の、僧侶の門弟をいふ。禪宗とは、臨濟宗、曹洞宗、黃檗宗などの總稱なり。○衛士　古、禁庭を守る

る兵人にして、每年交代に、京都に召す。

簑かさをよろひかためし雄心は云々　在昔朝臣は、有名の勤勉の士なるが、昔て大風雨の時、今日は、如何、在衙なりとて、出動はせざらんと、冒雨し居りしに、簑笠に身をよろひて、出動したりとか。かく、勇ましく、簑笠をきかためて、風雨を冒して、出動するは、只、自分の身の爲にするのみでは、なく、國家の爲な、思ひてのことであるといふ意なり。○邂逅　思はず知らずに、出遇ふをいふ。

○錢貨　ぜにのことなり。○肅然　嚴然といふに同じく、つゝしみてなる體なり。○諾ふ　承諾といふに同じ。

篠をつくが如し　雨の甚しくふるをいふ。

歷山王　マセドニア王、ヒリツプの子にして露國の王なり。幼より、天下を併呑するの器量ありけるが。位につくに及び、東を征し南を伐ち、一擧して、希臘を征服し、波斯を滅し、印度を服して、元帥となれりしが、不幸にして、三十三歲を以て、バビロンに死したり。其の統治の間は、政令甚だ寬裕なりしが、これ佛國の革命を監みて其の變亂を恐れてなりけりとか。

歷々　貴き家柄をいふ。○曆理　曆學の理をいふ。

曆博士　古、陰陽寮の官名にして、曆の事、一切を司りたり。

學監　學校の監督をいふ。○龍の宮　俗にいふ龍宮のことなり。

寫生　實物を、そのまゝに、寫しとるをいふ。○蕪辭　入り亂れたる詞の義なり。○齋部　忌部とも書き、神を祭る時に用ふる、品々を作り、又、ものいみして、神事にあづかる職をもいふ。○撿挍　「檢校」の所を見よ。

篝火　かゞりに火をたきて、夜を守るなり。○鴨脚　銀杏のことにして、其の葉、鴨の脚に似たるより。鴨脚とも書く。其の實をぎんなんといふ。

鼠さへ皮あり　時經に「相レ鼠有レ皮、人而無レ儀、人而無レ儀不レ死何爲。相レ

鼠有レ齒、人而無レ止、人而無レ止、不レ死何俟。相レ鼠有レ體、人而無レ禮、胡不二遄死一」とあり。乃ち、鼠にも皮あり、人にも皮あり、されば禮なければ、人と雖も、鼠に異る事なきないふ。

篤恭 行ひに篤く、人をう やまふないふ。

○器量 物の用に立つべき、才能をいふ。

○綵色 彩色に同じく、いろどりないふ。

檜垣舟 大坂廻りの大船ないふ。

○蕃薯 薩摩國より、ひろまりしを以て、この名あり。

○踰等 身分をこえたるないふ。

黛粉臙粧を事とす 紅、白粉をつけて、おつくりする事を、朝夕の、仕事としてなるないふ。

○點心 食事と、食事との間に、物を食ふないふ。轉じては、茶請の菓子、乃ち茶の子ないふ。經濟錄に「今以二早飯前及飯後、午前午後、晡前小食一爲二點心一」とあり。

維摩居士 天竺の人にして、すぐれて、道を行ひし聖なり。淨名居士ともいひ、常に、方丈の室にありて、說法せしといふ。

衛府の官を買ふ 衛府とは、古の、左右近衛府、左右兵衛府、左右衛門府ないふ。官は、左右近衛府は長を大將、次官を中將、少將、次の判官を、將監、次の主典を將曹といひ、左右兵衛府衛門府の長を督、次官を佐、判官を尉、主典を志といふ。これらの官を、金を納むるものに授けしなり。これ、朝廷の金庫、欠乏して、其の費用の足らざればなり。

○綸命 勅命といふに同じ、

○賢所 內侍所と同じ。宮中の神器を、祭り給ひし御殿ないふ。內侍は、常に之に供奉せり。

○操を作りあへむ 操は、「たしなみ」といふ程の意なり。乃ち、左迄は、たしなみおふすること能はずして、遂に、大切なる寶物をも、かたはしより、賣りはらふに至るないふなり。これは、民貧しければ、禮節を守ることは、成り難きないふ。

積極的消極的 積極的とは、集合的、增大的にして、消極的とは、分解的、減小的なり。例すれば、增加、發動、前進などは積極的にして、減少、抑制、後退などは消極的なり。

滋籐の弓 大將の拂ふる弓にして、籐を以て、一寸ばかりの間を、五分づゝへだてゝ、しげく卷きたるものないふ。其の卷ける籐の數は、三十六、三十三、二十八等、人々の好みなり。「村滋藤」の所を參照せよ。

○緇流 僧侶をいふ。

○練貫 たては生糸にして、ぬきにねり糸を、おりたる絹ないふ。

燈籠にてをありなむ をは助辭にして、意なし。燈籠ばかりにて、よろしからんなり。

○曆數 年代といふに同じ。

翰林院 支那にて我國の大學に、相當する學校なり。

○興宴 遊び の酒宴なり。

○閼伽棚 閼伽は、佛に奉ずる水ないへども、轉じて、閼伽棚は、佛に供ずるすべての供物を置く棚ないふ。

○綸言 勅語といふに同じ。

頭の中將 殿人の頭にして、近衛中將をかねたるないふ。

練色のきぬ 薄黃色のきぬないふ。

齋宮、齋院 天皇、御即位の後、未婚の女王を伊勢の神宮と、加茂の神社とに、仕へしむる人にして、神宮のを齋宮、加茂のを齋院といひたり。轉じては、其の居所ないふ。こは、垂仁天皇の皇女、豐鍬入姬に始りて、後、鳥羽天皇の皇女、眞子內親王に至りて絕え、其の間四十二人ありき。

還幸となくやよしの丶山がらす云々 還幸に、山鳥の鳴聲なかれ、かしらもしろしに、天皇が、復位のため、御還りになることの意を含み、おもしろに面白と尾も白とをかれ、よに夜と世とをかれたり。其の一首の意は明なり。

頹然 くづるゝ狀ないふ。

禦冠が世を諷してこそかくはいひつらめ 禦冠とは、列禦寇なり。常に、寓言を以て世を諷したり。「列禦寇」の所を見よ。

貔貅を養ふ 强兵を養ふことないふ。貔も、貅も、共に、豹の屬にて、猛き獸なり。故に、强兵にたとふ。

○齋明盛服して 身を清め、立派の服を着直してなり。中庸に、「使二天下之人一、齋明盛服以來祭祀」とあり。

○澤瀉 水草の名

にして、蕙は、慈姑の如くにて夏の始めに、白花の、三瓣の花を開き、俗に、はなぐわゐともいふ。又、紋所にもあり、源氏の館の名にもあり。○儒道の二教　孔子の說ける儒教と、老子の說ける道教との二教なり。○龍骨　四洋形の、船底の首尾に、通り居る、太き梁骨をいふ。○齋庭　まつりを行ふ場所をいふ。

潁川の水云々　「許由」の所を見よ。○親子は一世　佛說に、親子の緣は、この世がだけなり。○澤瀉縅　「おもだかおどし」の所を見よ。

きりにして、未來になく、夫婦は、二世にして、未來にも緣あり、又、君臣は、過去と、現世と、未來との三世に緣あり。○撿非違使　非違の行爲なるものを、撿するの意にして、盜賊を捕へ、法に違ふものを糺し訴訟を決する等の、事をなす役なり。この役人の、會する役所を、撿非違使廳といふ。○儒釋の徒　儒教、佛教を信ずる人をいふ。

龍頭鷁首　天子の御座船の艏にして、二艘を一對とし、一艘には、其の軸に、龍の首を付け、一艘には、鷁の首を付く。蓋し、龍は、能く水を涉り、鷁は、能く、風に堪ふるといふ意なりとされるなり。而して、二艘共に、屋形ありて、雨露を凌ぐ。○龍田の錦　龍田川の紅葉をいふ。紅葉は、常に錦にたとへていふ。能因法師の歌に一風吹く三室の山の紅葉ばは龍田の川の錦なりけりとあり。○蹂躪　ふみあちすことなり。

暦の軸現はる　年の盡くるをいふ。當時の暦は卷物となり、軸に卷き付けたればいふなり。○綠蘋　綠色の艸木をいふ。

頽墮委靡　失敗して、おちぶるゝをいふ。○檜扇　檜の、薄き板を骨とし、糸にて、綴りたる扇にして、其の骨締人のは三十九、公卿のは、二十五、殿上人は、二十三なりとぞ。

激雷雪を噴く　水がはげしく、石にあたりて、雷の如き大なる音を發し、同時に雪の如き、眞白なる、泡を飛ばするをいふ。○諦觀　こまかにものを見るをいふ。

錦着て晝行く心地す　心のせいゝするをいふ。後漢書に

「景丹封二傑候一丹之故鄉也、帝謂レ丹曰、夫富貴不レ歸二故鄉一如二錦衣夜行一、故以封レ卿耳」とあり。蓋しこの意を反對に取りしならん。○鴨綠之江鞭可レ絕　鴨綠江は支那國の境にありて、朝鮮より支那に至るには、必ずこの江を渡らざるべからず。乃ち鴨綠江の流は、たとひ水勢猛烈なればとて、秀吉の威を以てすれば、能く一本の鞭を以て之を絕ち止むることを得べしとなり。蓋し、險のたのむに足らざるをいひしなり。秦の苻堅の句に「以二吾衆一投二鞭於江一可レ斷二其流一」とあり。

牖戶　窓と戶とをいふ。○龍馬　馬の長け、八尺、以上なるものをほめ、龍にたとへていへるなり。

螢の節も過ぎ積むべき云々　普書に車胤字は武子といひ、幼にして學を好み、赤貧にして油を買ふこと能はざりしかば、螢を集めて、燈火の代りとして書を讀み、普の孫康は、同じく家貧しく油を得ることを能はざりしを以て常に雪を集めて書を讀めりといふ故事によれり。○稻富　伊賀入道一夢とて、砲術の師範家なり。

練緯　「練貫」に同じ。全所を見よ。

潁川に耳を洗ひ　「許由」の所を見よ。

還俗　僧をやめて、再び、俗人にかへるをいふ。

橫縫のちぎれたる　橫縫とは札の綴ぢ方の名なり。

衛士　軍團の中より撰ばれて、禁裏を守衛せしものなり。而して、其の期限は一ヶ月にして、毎年交番したるものなりとぞ。○網代の輿　網代は編席にして、竹を薄く細くして、縱橫に斜にあみし席なり。之にて外を張り黑塗の押緣を打ちたる輿なり。

檜皮葺　檜皮とは、檜の皮を薄くはがしたるものにして、之を以て葺きたる家をいふ。

餛飩　うどんのこなり。○橫さまの死　橫死なり。乃ち、非命の死をさすこと。○濃き指貫　當時にお

にて、變死といふに同じ。いて、濃き薄きといふは、大方、紫色をさしていひしなり。○鞘卷　つばなき短刀

ないふ。これ、腰にさしたる時、さげ緒をまきつけおくを以ていふなり。

稻麻竹葦（ハウマチクヰ）　すべて、群り入り亂れたるにたとへいふ。

綿がみ　「わたがみ」の所を見よ。

頭巾眉半に責め（トキンマユナカメ）　頭巾は、又兜巾とも書き、山伏などの被るづきんなり。小さく布にて作り、十二因緣に象りて、十二の襞をつく。乃ち、頭巾を深く、眉のあたりまでひきむろして被る。○**鍬**（シコロ）　兜の左右より後にさがりて、頸すぢを包むものなり。其の札の五枚なるを五枚兜七枚なるを七枚兜といふ。

穆王八匹の天馬の駒も　古、周の穆王、神智明敏にして、遠く謀りて近く知る。こゝを以て、帝德の感ずる所、駿馬自ら來、遂に、名馬八匹を得て天下を遍歷し、四方の州國至らざるなく、天下普く治りたりと。

綾小路の宮　龜山天皇の御子、性眞法親王なり。

壁の中よりもとめいでたりけむ云々　古文孝經のことなり。全所孔安國の序に「魯恭王、使人壞孔子講堂、於壁中得古文孝經二十三章」とあり。○**點あひぬる**　點合とは、合格といふに同じく、點をかけて、よしと定むる法に合へるといふ。

頭高におひなし　背に高く、さし出して頭へるなり。

頭殿（カンドン）　左馬頭義朝をいふ。○**龍蹄**（リウテイ）　天皇の御馬をいふ。天皇の御馬は、月毛の外は用ひぬことなりとか。○**龍樓鳳闕**　皇太子の御殿と、天皇の御殿とをいふ。○**練鐔**　練り鍛ひたる鐔をいふ。

稽古の君　稽古とは、古を稽へ知るといふことにて、古典に通じたまへる君といふ意なり。○**絲櫻**　彼岸ざくらの、柳の如く枝の垂るゝものをいふ。

賢き人えたるためし　周文王將に田せんとす、曰はく、渭陽に獵せば、大に得物あるべし。但し、其の得物は、虎にあらず、羆にあらず、公侯なり。これ天汝に、師を求むるなりといふ。文王乃ち、渭陽に行けるに、大公望釣を垂れたり。依りて載せかへりて師となすと即ち之をいへるなり。

龍に乘るらん山人にや　莊子に、「藐姑射之山有二神人一云々、乘二雲氣一御二飛龍一而遊二乎四海之外一」とありて、龍に乘るといふ仙人に賴まう、然すれば、自由に、こんな風景の所を、見られてよからんといふ意なり。○**禪定**　心の靜に定まるをいふ。

綾なし　「あやなし」の所を見よ。○**蕃籬**（まがき）　まがき、かきれ、などいふに同じ。○**樽酒餘春を樂む**　蘇子瞻の觴樂園の記に、「樽酒餘春、碁局消二長晝一」とあり。○**頭も皆しらけぬ**　心醒して頭髮の白くなりしなり。○**綱手ひきて行く**　綱に綱をつけて、陸より之をひくをいふ。○**錯**（キカヒ）　大殿祭の詞にある語にして、行き合ひを省き通ばしたるにて、木交、乃ち木の交る所をいふ。

篦中過ぎ射通す（ノナカ）　篦は矢がら竹をいふ。乃ち矢がら竹を半分過ぎ射通すなり。○**篦ため形**　矢がら竹の曲りを矯めんとて、弓なりにする形をいふ。乃ち、一直線にわたし得さるを以て、流れ渡りに、弓なりにわたすなり。

十七畫の部

襖障子　「あかり障子」の所を見よ。○**鍛冶の工**（カヂ）　かぢやのこと なり。工は、工人、職工などいふに同じ。十二人の内、則宗、延房、宗吉、助宗、行國、助成、助延の七

人は、備前の劍工にして、貞次、恒次、夫家の三人は、備中の劍工、國安、國友の二人は、京都粟田口の劍工なり。○慈み（イツクシ）　親の子をかはゆがるをいふ。

隱見せり　かくれたり、見えたりして、居るをいふ。○磽确　土地のやせたるをいふ、○鴻書　手紙といふに同じ。○薄茶　「濃茶」の所を見よ。○嬰兒　五六歲までの子供をいふ。

磚石製　かはら石にて、製したるものをいふ。○曙（アケボノ）　「あけぼの」の所を見よ。

壕塹　城の內外のほり。○優に　氣樂に、などいふに同じ。

鴻臚館　賓客の接待所にして、大坂及び太宰府におきたり。

墻に鬩ぐ（カキ　ヒメ）　兄弟り、相爭ふをいふ。詩經に、「兄弟牆に鬩げども、外侮りを禦ぐ」とあり。

薙髮　髮をそるをいふ。○穉苗　若き苗なり。○糞培（ヤ）　肥をしを施して、作り立つることなり。○邊防　國境のふせぎをいふ。

硯水　たにみづ。○禮記　五經の一なり。

隱所　雪隱といふに同じく、大便所なり。○遐として（ほんやりとして）　なり。○糟糖の妻　貧賤中に、共に、苦勞せし妻をいふ。後漢の宋弘といへる人、太尉と爲れり。時に、光武皇帝、其の姉、湖陽公主の、新に、寡婦となりしを以て、其の夫たる人物を問ひしに、公主は、宋弘の容貌を悅びたり。光武帝、宋弘を召し、公主を、屏後に坐せしめ、試に、宋弘に問ひて曰はく、貴くして、交りを易へ、富みて、妻を易ふるは、人情かと、宋弘曰はく、貧賤の交りは忘るべからず、糟糠の妻は、堂より下さず」と。これよりして、かくはいふ。

隱居士　山林などにかくれて、世にあらはれぬ、德ある人をいふ。

駸々として　早く進む體を、形容していふ詞なり。

優雅（やさしく）　風雅なるをいふ。○編戶（アミド）　木、又は、竹をあみて、作りたる戶を。○豁達　くわらりと遠くまで、うちひらきなるをいふ。

聳然（シヨウゼン）として　おどろきたる體を、形容したる詞なり。

贅居（チヅキヨ）　人の中に出ず、退きて、こもり居るをいふ。

衡斜に度をもる　平かなる所と、傾きたる所とに、きざみ目を入るゝなり。然れども、如何なる仕組みなりしか知りがたし。○緊帶　帶を、引きしめたるが如き、しまりの部分をいふ。

雖ㇾ不ㇾ父父子不ㇾ可ㇾ不ㇾ以ㇾ子ㇾ　父は、親たるの道を以てせず、よし非道なりとも、子たるものは、必ず、子たる本分を、盡さればならわとなり

緣坐　まきぞへとなり。○鞠躬盡力　心を盡し力を盡すをいふ。○禮曹　兵曹、刑曹など、共に、諸政府に屬する役所なり。

蟇目の役（ヒキメ　ヤク）　四方に向ひて弓を引き、妖魔を伏する儀式を執行する役なり。

應天門　大極殿の正門なり。○嚆矢　事物の始めをいふ。鏑し、嚆矢は、響矢にして、すべて、戰の始らんとするや、兩軍先づ、嚆矢をはなちて、其の合圖をなすよりいふ。莊子在宥篇に「爲ん矢樂跖が嚆矢たらざるを知らんや」とあり。

綺縟艶麗（キヨクヨクエンレイ）　種々に色どりたるをいふ。

駿河大納言　德川二代將軍秀忠の二子源忠長のことなり。

檀那、檀越　梵語にして、佛法の施主たる人を、僧よりいふ語なり。布施、又は、施主の義なり。○聰穎　人にすぐれて居るをいふ。○膾炙　膾はなまずにして、炙は、あぶりたる肉なり、乃ち、一般人の口に、上るものなるが故に、遍く、世人に知られて、談話せらるゝをいふ、禮記の曲禮に「膾炙處ㇾ外」とあり。○擬授　誰には、何の役を申し付け、誰には、何所の地を與ふべしと、前以て、先々の事を、下定めするをいふ。○覬覦（キユ）　人の臣たる者の、君の位をねらひ、又他國より、我が國を取らんと、ねらふことをいふ。

臍を噬む　後悔の意にして、其の及ばざるをいふ。左傳に「噬ㇾ臍」とあり。

薙鎌（ナヤカマ）　鎌の如き形したる刀を、長き柄のさきにつけて、敵を、なぎ倒す武器をいふ。

嚇得趙家老寡婦（オドシエフ　チヨウカノ　ラウクワフ）　趙家は、宋朝の天子の姓にして、老寡婦とは、宋の太皇太后謝氏の事なり。乃ち、宋朝の太皇太后をおどしつけてなり。

屨人にも女子の履小なることはなし　屨人は、履を作る人をいふ。乃ち、履屋にも、女子のはく履に、小なるものは、ないといふ意なり。

○鍬形打つたる兜　兜の額に、鍬形といふものを、附けたるものをいふ。鍬形には、種々の形あれども、概して、其の形、鍬の柄元の形に似たるを以てかくいふ。

○慈鎮和尚　法性寺關白、忠通公の御子にして、名を慈圓といふ、天台宗、六十二代の座主にして、吉水和尚ともいひしが、後に、慈鎮といふ。

謠曲　能狂言に合せて、歌ふ「うたひ」のことにして、内外各百曲、別に、十番の曲などあり。上古、聖德太子などの、うたはれたりといへるものとは、別にして、中古以來のものなり。各、既を異にして、流派を分てり。

○優婆塞の宮（ウバソク）　源氏物語にいふ、桐壺の帝の皇女なり。

綺語　面白き詞ないひ、轉ドては、小說ないふ。

○謝座（ザ）　席に着くあいさつ。

○謝酒　造酒をもらひたる御禮の式ないふ。

○餽餬（キクコ）　汕にてあげたる餅の類なり。

○儲君（チヨ）　皇太子の御事なり。

濱ゆふ　伊勢などの海邊に多く生ずる草にして、葉は芭蕉の如く、葉はもとに似たり。

擬議せず　ためらふことなきをいふ。

○彌勒の世（ミロク）　彌勒は梵語慈氏の義にして、菩薩の一なり。宿德圓滿、無能勝などともいひ、過去に王となりて、國民を慈育せり。又、この世には、世間災患なく、衣服自然に化生して、勞苦を須ひず、安樂なる世なりとか。

醜（シコ）**のしれ法師**　しれは痴の字にして、賤めていふ詞なり。「しこのみたて」の所を參照せよ。

○氈　毛氈なり。

○繩床　座禪工夫の座にして、繩をはりたる床なり。

○邊地粟散　邊地は、我が國の東方に片よれるをいひ、

「粟散」は、粟粒を散らせるが如く、小さき國の所々に散在するをいふ。

鞠のせい　せいは、勢の字にして、鞠を蹴る勢の如くに、輕々しき狀をいふなり。

十八畫の部

縉紳　大帶をしめ、手に笏を持つ、公卿をいへども、轉ドては、身の高き人をいふ。

鎖鑰（ヤク）　鎖と、鑰との事なれども、轉ドては大切なるかための地をさしていふ。

瞽者　めくらのことなり。

○舊りたり（フ）　古くなりたるをいふ。

雙六局　すごろくばんをいふ。

○闕損　かけそんドたるをいふ。

額田縣　維新の際、三河國におかれたる縣なり。後、愛知縣に合併せらる。

瀦澤　沼澤の如き、水たまりをいふ。

○襟帶　襟にし、帶にしたるをいふ。

壘壁　とりで、乃ち小城をいふ。

○藏屋敷　書、大小名の米を藏する、倉の有る地をいふ。

○覆手　琵琶の胴に、弦を張る爲め覆ひ看せしものをいふ。

轉機　轉倒する機械をいふ。

○瞿粟（クシ）　草の名にして、美しき花を開き、花の中に器の如きものありて、上に、菊花の如きもやうある、蓋を著ひ、其の中に、細かき殼子數多あり。これより、阿片を取るといふ。

○闖出す（チンシユツ）　かけ出すをいふ。

○釐革（リカク）　改めむることをいふ。

○濫觴　事物の始りをいふ。家語に曰はく、「其の源は、以て觴を濫ふべし。其の江津に、至るに及んでは、舟に方らず、風を避けざれば、則ち、以て渉るべからず」とあり。蓋し、これより出でしなり。

○懺悔（ザンゲ）　梵語にして、後悔といふに同じ、過ぎにし惡事をのべて

全く、悔い改むるをいふ。○**額づく**　頭を地につけて、禮拜するなり。

瞿曇の教　佛教のこと。

瓊の林に折りつる枝を栞として　瓊の林は、の闘鶏の林といふに同じ。身に修め得たる文學を、たのみとしてといふ程意なり。

雜兵　古の賤しき兵をいふ。○**簡古**　かんりやくに、要領を得たるをいふ。

簡潔　簡古に同じ。○**館**　國守、大名などの如き、高貴の邸宅をいふ。

曠達不拘　廣く行きわたり居て、小事に拘はらぬをいふ。

謫地　罪にあてられ、流されたる地をいふ。○**轉輪藏**　經藏の中、經文を、收むる書棚をいふ。多く、八角に作り、軸を押せば、廻はるやうに作られたり。

朦朧　おぼろに、暗き狀をいふ。

額に墨入れたる　額に、入れずみをしたるをいふ。

簠簋豆　共に、祭時に用ふる禮器なり。簠は、外四角にして、内は圓く、足の高さ二寸にして中に稻の粱を盛る。簋は、内も四角にして、外圓は圓く、中に黍稷を盛る。豆は、鼓の形を成し、上部物を盛る部分は、六角にして、菹醢を盛るものなり。○**闕所**　所有主の、闕けたる土地をいふ。乃ち、領主など、罪ありて、其の地を取りあげられたる時は、闕所の地なり。多く、之を、功臣などの賞に賜ひたり。○**雙眸**　兩眼といふに同じ。○**鵜飼**　鵜をかひならして、之を水中に放ち、以て、魚をとらしむるをいふ。○**魍魎**　「魑魅魍魎」の所を見よ。

職事　古、五位、六位の藏人をさしてしふ。

醫は意なり　意精しければ、能く、醫道に通じて、病を治することを得るとの意にして、後漢書郭玉傳に「醫之爲レ言意也」とあり。これに依れり。

醫陰陰　古、醫には、巫術、產科、按摩術、呪禁術などあり、陰陽道とは、陰陽を推し、吉凶を判ずるものにして、天文、曆、數の事をかねたり。○**謳歌**　世の治りたる時、歌にうた

ひて、泰平の御代を仰ぐをいふ。○**韓柳歐蘇**　韓柳は、支那唐の代の文章家、韓退之と、柳宗元となり。共に、博學宏才にして、當時の文章の、衰へたるを慨き、大に、古文を起して、隆盛を致せり。歐蘇は、宋の代の文章家歐陽修と、三蘇乃ち蘇老泉及び其の子蘇東坡、蘇穎濱とにして、何れも、韓歐に次きて、古文に力を用ひたり。○**擁護の種**　龍種は皇族にして、親王を擁護の種といふ。○**鯨鮪**　海豚とも書き、海に住む獸類なり。

雜色　古の藏人所の附屬にして、種々の役務に服す。又、走り使ひの、中間の類をもいふ。

謬舉　其の任にたえざる人を、みだりにあげ用ふるをいふ。○**簡約**　手がるなるをいふ。○**攢蹙**　集りそばだつをいふ。

襟元に付く　はぶりのよき人の方に付き從ふをいふ。

韓非　韓の公子にして、又韓非子ともいひ、其の著書に「韓非子」あり。刑名、法術の學に精しく、黃、老を土臺とせしたる派の政治學者、哲學者にして其の名著しく、其の主張とする所嚴峻なりしが、遂に、自殺したりき。○**鎗**　槍の字の誤りなり。○**韓歐が文**　「韓柳歐蘇」の所を見よ。○**鎧直垂**　大將が鎧の下に着る直垂をいふ。

闕官　其の官にあつべき人の闕けたるをいふ。○**職事**　五位六位の藏人をいふ。

鐸鑼　鐸鑼の誤字が、誤にて作り、あんを包みたる餅の類にして、古の食物なり。

類火　他の火災の延燒して、我が家をやくをいふ。○**礑と**　物と物とが、俄に相擊つ音の形容にいふ。○**霞の洞**　上皇の御所を申し奉る。蓋し、霞の洞は、仙人の住所なるを、上皇を、不老不死の仙人にたとへ、以て、かくはいふに至るなるべし。

檳榔毛に乘り云々　高尙にして上品なる狀をいふ。檳榔毛とは、牛車の屋形の榻に、檳榔の葉をさきて、垂れたるものにして、院、親王、攝政關白、大臣などの料としたるものなり。○**醫術を習ふべし**　程伊川曰、「病臥二於床一、委二之醫一、比二之不慈不孝一、事レ親者、亦不レ可レ不レ知レ醫」とあるによれり。

鞭ざしまでも　鞭ざしとは厩の舎人をいふ。乃ち、馬丁までもなり。

闕の官　「闕官」のこと。なり。

○餼羊　生きたる羊なり。論語に、「子貢欲レ去二告朔之餼羊一。子曰、賜也、爾愛二其羊一、我愛二其禮一。」とあり。子貢は、告朔之禮の久しく絶えたるに、生羊のみを廟に奉るも無益なれば、之を止むべしといへるを、孔子は、爾は羊を惜しみて然いへども、我は、其の禮の長くすたれんことを惜しむが故に、せめて羊なりとも、昔のまゝに殘しおきたしとの意にて、古禮の再興を希望したるなり。

○顏回も不幸なりき　孔子の弟子にして、第一流に位し、其の德高かりしも、不幸にして早く死にたり。魯の哀公、孔子に向ひて、弟子の中において、最も學を好むものは、誰なるかと問ひしに、孔子答へて、「顏回といふものあり、學を好み、怒りを遷さず、過ちを貳せず、不幸短命にして死し、今は既に亡し」といひたり。

○鵜舟　鵜を飼ひならして、紐をつけ、水中にはなち、鮎などをとらしむる舟をいふ。

○鏹役　材木などにのみよりて、生活すればなるべし。

○類推　似よりのものによりて、他を推察するなり。

○顏を干して　面をむかひ合せて、直接に、其のあしき所を諫むるなり。

○臨時客　定れる公務の外、政關白の家に、巻のはゞめ、大臣以下の上達部を招きて、遊び給ふことあり。これを、臨時客といふ。

磷磷　水面に、石の井べる狀をいふ。

十九畫の部

鏌鋣　「干將鏌邪」の所に出づ。

○譜代、譜第　舊來の家臣をいふ。乃ち、德川氏にたける、井伊、榊原、本多、酒井などの如きものなり。

○樂府　詩の一体にして、三五などの如き、普通のものと異り、一種の格を以て作る。賴山陽などは、最も、この作に巧なりきと。

○總髮　昔、男子が額を剃らずして、其の全頭の髮を延ばして、束ね結ぶをいふ。

辭む　辭退、不承知などいふに同じ。

○辭ふ　辭むの反對にして、承知、承諾などいふに同じ。

○懷古情　昔の事を、考へ出す心をいふ。

總錄　盲人の總取締にして、第一等の檢校に、命ずる官なり。

螺鈿　やく貝、てふ貝、あうむ貝、あはび貝、などの、からの裏を、種々の形に作りなして、器物の面の、漆にはめこみ、飾とするものなり。

○縹の裏　縹は、露草といふ、草の花を以て、染むるが故にこの名あり、そらいろ、はないろ、などいふに同じく、淡き藍色なり。

總追捕使　賴朝の、鎌倉に幕府を開くや、守護、地頭と共に、追捕使をおき、自らは、六十六國の、追捕使を統べ居れり。之を總追捕使といふ。追捕使とは、盛々にありて、非違のものを追捕するの官にして、檢非違使の左右少尉、之に當れり。

○櫛形　出入口を、櫛形にあけたるをいふ。櫛形とは、古代の櫛の形にして、富士山の頂の如し。

藤房龍馬の諫　後醍醐天皇の鎌倉中興の時、雄治高貞千里の馬を獻じたりしを、天皇大に喜びて祥瑞とせり。藤房諫めて曰はく、天馬は平生に用ふる所なし。近日賞罰信なく、工役繁く起り、文臣内に謗ひ、武臣外に怨む。而して奸雄豪を其の間に窺ふ。天馬の出づるは、亂兆に非らざらんや。知らんやと、天皇色を變じて入りたり。

○曝涼中　虫のくはぬやう、さらしあるる時、乃ち、土用乾の時をいふ。

○鏤版　はんぎのこと。

藩制　藩中の規則をいふ。藩とは、諸侯の土地を鎮め、朝廷の護衛となるものをいふ。

獺　水邊に住む獸にして、能く、水を潜り、常に魚をとりて食ふ。

○懶し　物憂しの義にして氣のすゝまぬをいふ。

○謙德　謙遜する德あるをいふ。

藝を格す　武藝をくらぶるをいふ。

藍綬褒賞　實業家の、功勞ありたる者に、授くる勳賞をいふ。

懷舊の種子　昔の事を、思ひ出す、思ひ出しぐさをいふ。

騎虎の勢　虎に騎して、むちうつたるが如き、勇しき勢をいふ。

鏤む　細くきざみ付くるをいふ。○**蹼**　水鳥の足の指の間に連る膜をいふ。之を以て水をかき、水中を自由に游泳す。○**醱酵**　酒など作る時もさより泡の立つをいふ。

鯨鬚　脊美鯨などの、口中の上下に、櫛の齒の如き體をなして齒の用をなし、其の廣さ、五六寸、長さ五六尺、厚さ五六分、極めて、柔軟にして彈力あり、諸種の器具を作る、くぢらさいふは、乃ち是れなり。

襪子　したぐつの轉下たるに、○**識見**　見識といふに同下、て、今の足袋と同下。

瀟湘　支那の瀟湘八景なり。乃ち、山市晴嵐、漁村夕照、江天暮雪、煙寺晚鐘、平沙落雁、遠浦歸帆、瀟湘夜雨、洞庭秋月これなり。○**鏑矢**　矢下りを、蕪の根の形に、作りたるものなり。多く、水にて、中空に作り、穴をあけたれば、之をはなつ時、空氣をきりて、一種の音を發す。故に、なりかぶらと、もいふ。○**縣主**　古、縣を、支配する地方官にして、國造の小なるものなり。

艷なる女房　あだめきたる、女房をいふ。○**盧舍**　家をいふに同下。○**蟹歩蚓蟠**　蟹の、横に歩むが如く、みゝづの、ぬたくりて行くが如きをいふ。横文の形を形容したるなり。○**總門**　門がまへの、表門をいふ。

盧舍那佛　盧舍那佛に同下。○**鯨波**　鬨に同下。

願車馬衣輕裘、與朋友共敝之而無憾　車馬衣輕裘、其の有する所のものは、朋友と共にして、之を敝ぶるも、互に憾むことなく、財を通下、交を篤くすることを欲すとの意にして、論語より出でたり。

證歌　證據にひく歌をいふ。○**鎭衛**　しづめ又は守りをいふ。

藩屏　まがきとなり、へいとなりて、朝廷の守護となるものをいふ。

韻致　雅なる、おもむきあるをいふ。○**藤波**　藤の穗花の、動くを波に見立てゝいへる詞なり。單に、藤といふに同下。

爆火を子に拂ふ　火のはれたる時には、傍に、子の居るにもかゝはらず、あわてゝ、其の方に打ちはらふといふ義にして、乃ち、繁劇なる職を、子に讓りたるを、たとへていひたるなり。○**瀧口**　古、藏人所に屬し、禁中を守る、武士にして、武勇の士を撰びて、之に充つ。相當は六位なり。禁中、御行水の水の、落る瀧口に、勤番せるを以て、かくはいふ。

鏁　鎖、鏈などゝも書き、鐵などの環と環とを、つなぎ合せたるをいふ。

藝樹家　「藝樹家」に同下。○**麗藻**　よき詩歌を、ほめていふこと。○**藏人**　宮中に侍候して、秘密の文書、訴訟を司る役なり。この役人の會する所を、藏人所といひ、校書殿の中にあり。○**繁藤**　「滋藤の弓」の所を見よ。

檻　「なり」の所に出づ。○**簸す**　篩といふものにて、殼と、米とを、ふるひわくるをいふ。○**竈突蕭然**　かまどの烟の、細くたちて、物さびしき狀をいふ。

槀を肱き　旅ごうりを開くことなり。

難將蓋世英雄骨云々　蓋世英雄とは、威武の、一世をおほひかぶする程の、えらき人をいふ。彈丸孤島とは、鐵砲の彈丸見たやうなる、小さき、只一つの離島をいふ。乃ち、蓋世英雄の骨を以て、何時までも、かくの如き、一孤島の中に、葬りておくは、殘念の至りなれば、よろしく、速に、改葬せよとなり。

盧山の瀧云々　李大白の盧山の瀧を望んでよめる詩に「四登香爐峰、南見溪布水、桂流三百丈、噴壑數十里、歇如飛雷來、隱若白虹起、初疑河漢落、半灑雲天裏、仰觀勢轉雄、壯哉造化功、海風吹下斷、江月照還空、空中亂濺射、左右洗清壁、飛珠散輕霞、流沫拂穿石、而我樂名山、對之心蕭閒、無論濊瓊液、還得洗塵顏、且諧夙所好、永願辭人間」とあり。この詩によりて、其の狀の如何は察知せらるべし。○**藤公の碑**　藤原藤房の碑にして、山家の後まし〳〵たる寺に、紀念のため建てたるなり。○**鏡の四方手**　四方手に鏡の如き金具のつきたるなり。○**繪服荒服**　にぎたへは、かぢの木の皮にておりたるをいふ。

布にして、あらたへは、麻のおりめの荒きものをいふ。

藤原の四家　南家（武智麿）、北家（房前）、式家（宇合）、京家（麻呂）の四家をいふ。

難行の云々　憑陀太子が修業のため、二仙に仕へて、霜水の勞を採りたるをいふ。

藤戸を渡りしは云々　藤水三年、佐々木三郎、藤戸に至りしも、渡ること能はざりしかば、三郎竊に、近邊の漁者につきて問ひ、淺瀬を知りて渡ることを得たり。乃ち其の事柄を指していひたり。

瀧のみかど　池に瀧ある方の御門をいふ。

二十畫の部

嚴有院殿　德川四代將軍家綱公のことなり。○**機警**　きてんのきくをいふ。○**臙脂**　べにのことなり。生臙脂といふ紅具の一種にして、支那より舶來す。

○**廬生が見し夢**　異聞集に、「呂翁經二邯鄲一、直上二邸舍中一、有二少年盧生一、自嘆二貧困一、旨訖思レ睡、主方炊二黄粱一、翁探二夢中一、枕二授レ生曰、枕レ是則榮遇如レ意、生枕レ之夢自枕竅入二其家一、身歷二富貴一五十年」とあり。

藤のおぼつかなきさま　藤の花の色は、遠方より見わけがたく、おぼつかなく、はつきりせぬをいふ。○**願文**　二世安樂などを、佛、菩薩に願ふ文をいふ。○**瀨踏せさせて**　淺瀨をふみ試みさせてなり。

織物の名品　乃ち、西陣織をいふ。○**機**　今のおさしといふものに同じ。○**嚴瓮**　嚴は、威の義にして、祭事に用ふる陶器をいふ。

臘纈　蠟を以て、はじめ、繪に、花文を畫き、染めて後、蠟を脫ずれば、模樣を成したる染物なり。

勸學院　嵯峨天皇の御代に、藤原冬嗣の創立して、子弟を教へし學校なり。

鬪爭の衢　戰爭の場所をいふ。○**鐘螺**　つりがねや、ほらがひをいふ。

釋菜　孔子の祭りをいふ。○**飄然**　たゞよひ定まらぬをいふ。

齟齬　ことのくひちがふをいふ。○**蘆葦の場**　あしの生えて居る、場所をいふ。○**勸修を積む**　修業をつむことをいふに同じ。

鐘を鳴し鼎に食ふ豪商多し　鼎に食ふは、公なるを豪商とはいへ鼎に食ふとは、論爭の所作なり。且つ鐘を鳴らして家人を食堂に集むるは其の邸宅の廣大なるを知る。乃ち、家富みて、分際以上のぜいたくするもの多きをいふ。

寶祚　天皇の御位の事なり。○**機軸**　これらと、別に基として、すべて物の生すべきをいふ。乃ち一派をいへるが如し。○**勸請**　遠方なる神佛の靈を、移して祭るをいふ。○**機務**　大事のつとめをいふ。○**勸賞**　手がらの褒美をいふに同じ。○**蕭墻の內**　かきれの內にして、國內をいふに同じ。

騷人墨客　詩文などを、弄ぶ人をいふ。

籌を帷幄の中にめぐらす　はかりごとを將軍の居る幕の中においてなすことにて、今の參謀官の、陣中に居て、策戰計畫をなすと同じ。

勸進能　奉納の爲に興行する能狂言をいふ。○**艨艟**　古の軍艦をいふ。

韜鈐家　兵法にくはしき人をいふ。○**釋門**　佛門に同じく、佛の道をいふ。

醵集　こしらへ集むることなり。○**魑魅魍魎**　魑魅とは、山林の氣より生ずる、鬼のたぐひのばけものにして、水の精、山の神などに同じく、山獸の形に似たり。又すだまともいふ。魍魎とは、水の神にして、みづはともいひ、其の狀、三歲の小兒の如しと。乃ち、山川に居る怪物をさしていへるなり。○**寶庫**　秀倉の義にして、社寺の寶物を入るゝ倉をいふ。

寶劍も鉈となる　賢良の才あるものも、用ひられずして、世にかくれなるなり。○**飄々**　ひらひらと飛ぶなり。

黯澹たる妖雲を披く　薄暗くくもりあひたる、あやしき雲なり。○**機變**　僅の間合ひの、變化をいふ。○**蘇東坡**　支那宋の世の、文章家にして、名は軾、字は子瞻、黄州に貶せられ、東坡に宅を築き以て、號となす。○**蘇甘栗**　蘇は牛乳にして、甘栗は、栗を甘く煮たるものなりと。

簾疊もとり拂ふ　樓閣のすだれたゝみなどをとりはらふなり。

蕭何　漢の高祖に從ひ、張良等と、漢の大業を成就せしめし人にして、後、漢の宰相となりしが、人となり、温柔なりしを以て、人望一身に集り、軍備出納の事を掌りて、名相の名を轟かしぬ。

寶相花　寒國の夏草にして、葉間より莖を出して小花を開く。

寶とも鎭ともいふべし　萬葉集に「なまよみの甲斐の國云々日のもとの日本の國の鎭ともいます神かも寶とも成れる山かも駿河なる富士の高根はみれどあかぬかも」とあるによれり。○**寶の國とこそ**　栗の花の、黄金色したるを以てかくはいふ。○**機張廣き**　巾廣き錦といふ意なり。拾遺集に、「みづうみに秋の山邊をうつしてはたばり廣き錦とぞ見る」とあり。○**機用**　用ひやうなり。

議政府　日本に所謂太政官なり。○**機を詰め**　息をつめて、見守りて居るなり。○**櫨の匂の鎧**　櫨の紅葉したる色、乃ち、樺色の濃き色に染め、其の上は濃く、下の方を次第に薄くぼかしたるが如くおどしたる鎧なり。

織物　綾の如きものにして、地と、紋と、其の色の異るものをいふ。

織物に髪みだる　よき織物を着たる時には、髪筋も亂れて見ゆるといふ諺あり。○**鯢波**　「鯨波」と同じ。○**蘭若**　梵語にして、寺院をいふ。

欄間　天井と、長押との中間をいふ。**鰒も奏せず**　鰒は蝮の中間をいふ。赤の貴とて、筑紫より之を奉り、節會などに之を供ぜり。これも、氷の様につぎて、奏するの例となれり。

二十一畫の部

露の下折れ　露の爲めに、下枝の折れふすをいふ。

龜鑑　手本といふに同じ。○**蘊奥**　「奥秘」といふに同じ。○**攝津職**　大寶の制、攝津には、國守をおかず、職をおく。桓武天皇以來國の列に入る。

灌煦水を與ふ　あたゝめたる水を、そゝぎかくるをいふ。

薛苔　岩石に生ずる、こけの類なり。○**露路**　門内、又は、庭上の通路をいふ。○**蠢爾**　虫の動く狀をいふ。○**蠢愚**　虫の動くが如く、おろかなるを。○**灌腸**　大便の通ぜざる時、肛門より、藥をさきたる水を、注ぎ入るゝをいふ。○**聯鎖**　くさりのことなり。○**禰の臙脂**　禰は、被縫の背後に、帶の襟に着くる、横幅の帛をいへども、こゝにては、齒のかさのへりをいふ。

護身符　一身を守る札をいふ。○**躊躇**　物事に思案して、直にふみ出さず、ためらふこと。○**磯輪上秀眞國**　磯は、磯堅城、輪は、廓、の意にして、上と、秀と、眞とは、共に美稱なり。蓋し、我が國の青山四周して、其の自然と、堅くなれる狀、恰も、城廓の如くにして、眞に、他國に秀でたる上國なるを以て、名づけしなり。

鰥寡孤獨　老いて妻なきものを、鰥といひ、夫なきものを、寡といひ、五十にして、父なきを、孤といひ、老いて子なきを、獨といふ。○**攝政**　古、天皇を補けて、政事を後見する職をいふ。○**攝籙**　攝政に同じ。○**攝關**　攝政

と、關白とを云ふなり。關白は其の職、攝政と大差なく大臣の上、官吏の最高等なり。

羅殼 羅は、輕羅ともいひて、うすものなり。殼は穀の誤にして、絹紗ともいひ、こめおりなり。

露臺 禁中にありて、舞を行ふ所なり。高さ三尺ばかりにして、家根なく、四方に勾欄あり。

驛を此に駐む 天皇の御車を、こゝに止めて、御滯在にならせらるゝをいふ。

櫻狩 櫻を尋ねて、賞するをいふ。

○櫻花晴輝樓 宣長のふ、「歌島の日本心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花」の意をとりて名づけしなり。

露盤 「空輪」の所を見よ。

○磯城の宮の御代 崇神天皇の御宇をいふ。

○護持院 もとの知足院にして、元錄八年に改稱せり。僧某は、慶光にして、名は曼春、和州の人なり。

○聯句 律詩の對句をいふ。五言にても、七言にても、八句を以て一律とし、第三句と、第四句と、又第五句と、第六句とを、語格相似たるものを相對せしむ。之を對句と也も聯句ともいふ。

○磯ぶり 磯觸にして、涙の岸に荒くうちあたるものをいふ。

羅漢 阿羅漢の略にしてあは非、「らかん」は、生の義なり。乃ち佛をいひたるにて「十六羅漢」「五百羅漢」などあり。

磯城島の金刺宮の大御代 第三十代欽明天皇は、大和の磯城島の金刺宮に在りたり。故に、この御代をかくいふ。

○驀直に 急にはげしく、進みかゝる体をいふ。いつさんといふに同じ。

灌佛のころ 陰暦四月八日に、佛生會とて、釋迦誕生の像に、水をそゝぐことあり、之を灌佛といふ。

龜の鏡にうつさば云々 龜のかゞみは龜鑑なり。鏡といひしより、又うつすといひ、くもらぬかげといひたるなり。意は、京都にて裁判つかぬ故、鎌倉の政事を仰ぎて、龜狀の確實なることを證せんとなり。

羅浮のをとめ 龍城錄に「隋趙師雄遊二羅浮一、一日天寒日暮、於二松林酒肆旁舍一、見二美人一淡粧素服出迎、師雄與語、言極清麗、芳香襲レ人、因與叩二酒家一共飲、師雄醉臥、及レ覺起視在二大梅樹下一、翠羽嘈囋、相顧月落、參橫惆悵不レ已」とあるによれり。

露霜の秋こそまされ 露も霜もおくものなれば、おくの枕詞として用ひ、露霜のおく秋といひかけたるなり。

櫻川の波の花 櫻川は、筑波山の麓を流る。後撰集に、「常よりも春べになれば櫻川花の波こそまなくよすらめ」とあり。

櫻ばなさきにけらしもあしびきの云々 櫻の花も、もう咲いたやうに見ゆる、如何となれば、あの山の間より、白い雲の見ゆるのは、あれは雲ではなくて、櫻の花であるとの意なり。あし引は山の枕詞にして、かひは、山と山との間をいふ。櫻の花は、雪或は雲にたとふるが常なり。

二十二畫の部

辮髮 清國人の頭髮を、くみ下げたるをいふ。

○權衡 物事のつり合ひをいふ。

○驕費 ぜいたくのために費すをいふ。

○驕慢 おほへいにすることなり。

○鑄造 いて作ることにて鑄物を云ふ。

權貴 家がらをいふ。

○氍毹 毛織りの敷物をいふ。

躑躅 美しき花咲く灌木にして、其の色の紫なるを、淀川といふ。

○籜 竹の幹を包む、一種のあまかはをいふ。

○攢簇 あつまりむらがるをいふ。

籠絡　人を、我が手の中に、まろめこむといふ。○體認　しかとのみこむを入れて河水を塞ぎ、一時に之を決潰するの策なり。

鶴唳を耳にしても驚怖す　鶴の鳴き聲をきゝて、敵の晉軍、來りしかと疑ひたりこれよりかくもたとへにとれり。

權化の神聖にまします　凡人にてはあらで、神佛の御方にて、あるといふ義なり。○蠹毒　蠹は、木を食む虫にして、わざはひの事をいふ。

體はあるに似て用はたえてなし　體裁は、うなはりてあるけれども、其の役に立つことは、少しもないといふ意なり

饗宴　酒食を設けて、宴をはるといふ。○囊沙の策　沙を囊に入れて河水を塞ぎ、一時に之を決潰するの策なり。

體のおきて　文體の規則にして、文章に設けるものゝ如きをいふ。

權義　權利と、義務となり。○懿德良能　よき德行と、天然に受けたる才能とをいふ。○權輿　事物のはじめをいふ、詩經の秦風權輿篇に「於我乎、夏屋渠渠、今也每食無餘、于嗟乎、不承權輿」云々とあり。蓋し、權はかりのおもりにして、はかりを作るには、おもりを始めに作る、又、輿は車のこしなり、車を作るには、先づ輿よりはじむ、共に、作るのはじめなれば、權輿とつゞけて、事物の始めといふ意に用ふるなり、○疊紙　「たゝうがみの」所を見よ。○鶴の毛衣云々　古今集に、「いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣をかへしてがきる」とある歌により、さては、後赤壁賦の「適ゝ有二孤鶴横レ江東來一翅如二車輪一玄裳縞衣、翩然長鳴、掠二予舟一而西也。」の意をとりしならむ。○鶴膝　鶴膝風にて、兩膝、水ぶくれとなり、腿の細くなる病なり。

二十三畫の部

關東　古くは、足柄の碓氷關より、東の諸國をいひ、近くは、箱根の關より東をいふ。

藥園　藥となるべき草を、植ゑたる園をいふ。○續松　「松さもして」の所を見よ。

纍々　「累々」と同ト、同所を見よ。○纖少　小さきをいふ。

關廟　支那三國の時の、關羽を祭りし、社をいふ。○關白　其の職、略、攝政に同ト、「攝關」の所を見よ。○纖維　すぢをいふ。○藥草　藥となるべき、芍藥、茯苓牡丹、烏頭、蠶豆などの如き草をいふ。○攫虫草　其の葉に、昆虫などの觸るゝことあれば、葉面を二つにたゝみて、之を捕獲し、其の液を吸ひて、養となす草なり。

鹽戶　食鹽製造に、從事する家をいふ。○驛路の鈴　驛鈴ともいひ、朝廷より、官使に渡し、之を以て、驛馬を徵發する、證據とするなり。

纈纈　今いふ絞り染めなり。○鹽虀　鹽は、鹽といふに同ト、日々の食物をいふ。○關の清水　貫之の歌に「逢坂の關の清水にかけ見えて今や引くらん望月の駒」とあり。この意によれり。○鰹木　神社の屋上に井べたる鰹の形したる木をいふ。これをおくは、古の家の作り方なり。○鑣をならべて　口食の義にして、轡の原語なり。○懸塲　駈け塲に同ト。

襲柳　下襲の柳なるをいふ。柳とは、表白、裏青なり。○鷲峰山　金胎寺のことをいふ。

驛長無レ驚時變改云々　驛長よ、驚くことなかれ、これ、時の變改にして、如何ともすること能はず。春風に芳をきそひし草木も、なほ、秋風に枯凋すると同ト、榮

枯盛衰は、人生の常なりとの意なり。○鹽梅の臣　塩と梅と、程能く和して、始めて食物は食ふべきなり。人君奚賈なりとも、輔佐其の人を得ざれば、能く其の德をなすこと能はざることを奚の鹽梅におけるが如し。故に、朝廷の宰相を、鹽梅の臣とはいふ。書經に「若作和羹爾惟鹽梅」とあり。

二十四畫の部

靈代（タマシロ）　神、又は、人の靈の代りに、しるしとするものをいふ。○靈驗　神佛の、不思議なるしるしをいふ。○靈顯　みたまのしるしをいふ。

靈時（マヽリンニヘ）　土を高くもりて、作りたる、神を祭る場所をいふ。司馬相如の封禪文に、「濯々之靈淵ニ彼靈時ニ」とあり。

二十五畫の部

纓　古、冠の、下より、後の方に垂るゝ尾の如きものをいふ。これ群臣一般のものにて、垂纓といひ、天子の御冠は、上に向ひて立てり。之を立纓といふ。又武官のは、内方に卷けり。之を卷纓といふ。

鹽土の老翁　伊尹諸尊の御子、彦火々出見尊の釣せし鉤を失ひ給ひし時、之を得しめたる神なり。

靈明の德　不思議に時ことあり。註に「時は神靈の止まる所」かあり。世の中を照す德をいふ。○靈覺　不思議の感覺をいふ。

皸然（クワンセン）　齒のぬけたる狀をいふ。○纏枝（カヲクシ）　蔓草のうづまきたるもやうをいふ、

觀念のたより　觀念は、佛經の語にして、目を閉ぢ、心を靜めて、佛道を念ずるをいふ、乃ち、四の方開きたれば、四方極樂淨土に向ひて、觀念の便宜あるなり。

鞨（ホダ）**されず**　つなぎとめられぬなり。○鑿空（サウクウ）　ことさらに造る意なり、釋文に「鑿猶ニ造意ニ也」とあり。○廳の御下文　上島の政務を扱かはせらる、院廳より發する、文書をいふ、○觀心寺　河内國錦部郡觀心寺にあり、○觀修寺（クワンシユウジ）内大臣　大政大臣良門公の子高藤公をいふ。

觀無量壽經　觀經といふものなり。無量壽は、阿彌陀の本義にして、觀經には、阿彌陀の身相を說きて、「光明遍照十萬世界念佛衆生攝取不捨」といへり。而して、其の衆生を攝取する慈悲の心の開け出でたる姿を觀音菩薩といふなり。

二十六畫の部

顰蹙（ヒンシク）　顔をしかめることにて、西施に倣ふといふに同じ。吳王夫差の寵姫に、西施といふ屈指の美人あり。或時、胸を痛みて顔に皺よせたるに、一層の美を呈したるを見、里の一醜婦、自分の美ならざるをも知らで、之に倣ひ、顔をしかめたるより、起れる語なり。

驥を學ぶは驥のたぐひ　驥は、千里をも走るといふ名馬なり。乃ち、尋常の馬にても、驥にならひて千里を行かんとすれば、則ち、驥の類なりといふ意なり。揚氏法言に「希驥之馬、亦驥之乘也、希ヽ顏之人、亦顏之徒也」とあり。又、字彙に「騏驥千里馬也」とあり。

蔚葱（うつ〳〵）　草木のおひしげりたるをいふ。

斷金の交　最も中よき交りをいふ、易經に、「二人心を同じくすれば、其の利き事金を斷

ち、同心の言は、其の臭蘭の如し」○蠻薄（ヤナグロ）「やなぐひ」と、蠻じこれより出でしならん。

の所を見よ。○變化機に應ず　機會に應じて、うまくかげひきなすこと。

二十七畫の部

顯心（ウツシ）もなし　この世にある心地のせぬにて、死んだ思ひのするをいふ。

顯仁　第七十五代、崇德天皇の御諱なり。

二十八畫の部

鑊鑠（クワクシヤク）　老年に至りて、勇ましく元氣よきをいふ。

二十九畫の部

變幻態（ヘンゲンタイ）を作（ナ）す　種々樣々に、形の變化するなり、○變幻態を作す

顯密の高僧　眞言宗は、密法を行ふを以て、密教、密宗などいひ、之に對して、他を顯宗などいふ。されば、顯密の高僧とは、各宗の高僧といはんが如し。

蠻貊（バク）にふるひ　征韓ないへるなり、中庸に、「聲名洋溢乎中國施及蠻貊」とあり、又、論語に、「言忠信、行篤敬、雖蠻貊之行矣」とあり。

三十畫の部

繼體の君　御世つぎ、乃ち、皇太子を申し奉る。

國文通釋　漢字之部　終

國文通釋　假字の部

いの部

いと　最の字にして、きはめて、甚しく、最も、などいふに同じ。

いさ　副詞にして、どうであらうかの意なり。この詞の下には、必ず、知らずといふ詞を附くるを法とす。「人はいさ心は知らず」の如し。○**いざ**　人を誘ふ時に發する感嘆詞にして、さあ、どれ、どりや、などいふに同じ。乃ち、いざなふのいざなり。

いかばかり　副詞にして、どの位、どれ程、などいふに同じ。

いやひろまりにひろまりて　句にして、いよ〳〵段々に廣まりてなり。いやはいよ〳〵にして、ひろまりを二つ重れたるは、強くいはんが爲めなり。

いかで　副詞にして、どうかして、なにとか、などいふに同じ。

いたく　きはめて、甚しく、などいふに同じ。

いぶせし　鬱悒の字にして、おぼつかなし、きがふさぐ、うるさい、しんきな、などいふに同じ。○**いかめし**　威儀のさゝのひて嚴重なるかたちなり。おごそか、たどいそう、などに同じ。○**いよ〳〵**　愈の字にしていよ〳〵の書かれたるなり。

いら　蒯の字にして草の名なり。いらぐさ、むにあさ、ひささしぐさ、まむしさう、などいふ。高さ三四尺位にして、葉はからむしに似、葉莖等一面にとげありて、花は四角なり。

いにし　去の字にして、過ぎ去りし時をいふ。むかし、古代、古昔、さんぬる、などいふに同じ。

いはむろ　窟の字にして、岩をうがちて作りたる古の人の住みかなり。

いそしむ　勤の字にしてつとめはげむをいふ。

いうにやさし　柔和にして品ふきをいふ。

いやしげりにしげる　いよ〳〵しげり行くなり。前の「いやひろまりにひろまりて、」と同ト書き方なり。

○いさはず　不詞の字にして、しかりさがめぬなり。

○いたらぬ沙汰　十分ならぬいわけがちなり。

○いたりをきはむ　物の極度までならふなり。

いなみがたし　ことばりにくいなり。

いとはし　愛の字にしてあはれ、ふびん、きのどく、いたはし、などいふに同ト。

いひくろむ　いひくちます　ことなり。

○いで　人をうながしたつる時、又は、氣のつきたる時、などに發する感嘆詞にして、どりや、いやさ、いやもう、などいふに同ト。

いやはて　愈果の字にして、一番の末なり。

○いたや　古事記には痛矢串、日本書紀には流矢とあり。身に通りて重傷を負はしめたる矢をいふ。

いみじく、いみじう　「いみじう」は「いみじく」の音便にして、甚だ、ひどく、きつう、などいふに同ト。

○いくそ　幾十の字にして、何程、どの位、などいふに同ト。

○いはひもとほる　はひ廻るなり。いは接詞にして意なく、單にはふといふに同ト。もとほるは、めぐる、廻る、などいふに同ト。

いゆき守らひ　行きて守るなり。いは前のいゆきと同ト。接詞にして、守らひのらひは、りを延べていへるなり。

○いたけ高になり　威勢をあらはす高くする　ことなり。

○いきまく　息巻の字にしていきせき荒くなりたるをいふ。

○いらゝか　苛なはたらかしたるにて、腹立つることなり。

いふかし　不審、不分明などいふに同ト。

いたはし　勞の字にして親切にいたはり大事に思ふ樣なり。

いつく　齋の字にして、けがれを去りつゝしみて仕へまつることなり。

いちはやく　迅速の字にして最も速なるをいふ。

いとゞ　いとを重れたる詞にして、甚しく、愈ゝ、尙ほ、ささらに、などいふに同ト。

いさご　石子の義にして、小石、砂、などをいふ。

いざよふ　止りて動かぬなり。猶豫する、躊躇する、やすむ、などいふに同ト。

いざよひ　陰暦の十六夜なり。夕方より少し後れて月の出づるを以ていふ。乃ち、猶豫して月が出づるといふ意なり。

○いさりび　漁火の字なり。いさりをするとき、魚をよせんがためにたく火をいふ。

いひをもかしぐ　飯をもたくなり。

いたづく　勞の字にして勤勞すること、又、親切にもてなすことをいふ。轉ト ては、疾病、なやむ、などにいふ。

○いくさぶみ　軍書の字にして、いくさのことを書きてある書物なり。

○いそしさ　勤の字にして、よくつとむる狀をいふ。乃ち、骨なりなり。

○いはけたるわざ　子供らしき事をいふ。

○いろふ　其の事に關係して、取り扱ふをいふ。

いつくしむ　愛の字にして、かはゆがることなり。

いしゆみ　石弓の字にして、昔用ひたる戰爭の道具なり。しかけありて、石を敵にはなきやることを得るやうに出來たり。

いひのゝしる　言ひ騷ぐことなり。

いはなし　岩梨の字にして、富士山、日光山等に生ずる小さき灌木なり。其の實は、南天に似、秋赤くなりて食用さすべし。

○いくそばく　いくそに同ト。ばくは、ばかりの轉ト たるなり。

いかなれば身はしもならぬ云々

どうした事であれば、和歌の大家たる爲定卿の御歌が、此度の撰にもれて、世の中の人に知られないだらう、といふ意なり。しもならぬは、下等ならぬに、霜なかれたり。

いたはり 勞の字にして病氣のことなり。○**いどむ** 挑の字にして、はりあふ、きそひあらそふ、けしかくる、などいふに同ト。

いかにいふ事にかあらむ 如何なることさかさして いつたんであらうか、どうしたわけであらうかと不審がるなり。

いみじくぞ侍りける 大層かんしんな事と思はるゝといふことなり。○**いざさせ給へ** さあ御出でなさいといふなり。

いつはあれど 時はいつと限つたものではないが、いつでも月を見る時はあるけれどもといふことなり。○**いづこはあれど** 場所はどこと限つたものではない、どこでも月を見る場所はあるけれどもといふことなり。

いろは波ににほひ、聲は空になむすみにける 衣服の色は、波にうつりて美しく、唱ふ聲は、空まですみ登りて、さやけしとなり。○**いだしぐるゝよ** 古、朝廷の儀式などある時、牛車を飾りて出すものといふ。○**いたみ** 痛の字にして形容詞に接詞の添はりて名詞となりたるものなり。甚しき故にといふ意なり。

いは見のや高角山の峰の月云々 萬葉集に、「人麿石見國より妻に別れて上りける時の長歌の短歌に、「石見のや高角山の木のまより、我が振る袖を妹見つらむか」とあり。これによりてよめることを知らば其の意明ならん。「道の光」は歌道の道しるべなり。○**いみがゝり** 忌籠の字にして、人の死亡せし時、その忌みのかゝるべきつゝきがらをいふ。

いはきをわかぬ心 岩石樹木は心なきものなり。乃ち、木石と區別なき程の無情なる心といふ譬なり。○**いまはしき** 忌むべくあるをいふ。いまゝしい、面白くない、きらはしい、などいふに同ト。○**いくものすがいふ。**

いるさ 入方の字にしているべき方をいふ。○**いたで** 痛手の字にして傷をいふ。○**いくさの庭** 戰爭の場所をいふ。

いでゐ 「出居」の所を見よ。○**いらたかずゞ** 高貴の人の平らたく製したるものをいふ。○**いしう** 美の字にして、いしくの音便なり。みごとである、巧みである、氣にかなふ、てぎはがよい、美はし、好ましなどいふに同ト。○**いかもの作り** 金物のかざり多く、いかめしく作りなして、腰にさげるやうにしたり。

いかで我身を我物とせむ どうして我が身だからとて、我が一身の私有としてよからうか、決してそれはよろしくないことなり。論語に「事二父母一能竭二其力一、事レ君能致二其身一」とありて、朱子の註に「致は猶委の如し、其の身を委ね致すとは、其の身を有せざるを謂ふ」とあり。乃ち、この意によりて書きしなり。

いますが如く いますは在の字にして、所謂如在の禮なり。論語に「事レ死如レ事レ生、事レ亡如レ存」とあり。○**いで湯** 温泉のことをいふ。

いとなみ しわざ、職分、などいふに同ト。

いにしへをしのぶなみだはみよし野の云々 皇威の盛にして、百官にかしづかれ、九重の雲深く坐しましたる時の事を懲ひしたふにつけても、涙が出て堪えられぬが、其の涙がやがて、このみよしの、花の下露となりて、かやうにしたゝるのであるとなり。「みよし野のよし野の山」と、「よし野」を重ねたるは、語調をとゝのへんがためなり。

いまはは忘れはつべきいにし

へを云々　今は、先帝の御漂泊遊ばされし御事などを、すつかり忘れて仕舞ふと思ひなるに、意地わるくも、月は、之を忘れさせ所か、おもひ出よと、かやうによく澄みわたりて、人に物思はするるよとなり。

○いつゝの色の雲　五色の雲なり。

いため皮　板目革、挑革の字にして、鎧、又は、つば、などを作るに用ひ、かためて練りたる革なり。

○いらゝげ　かどだつ、いかる、はりひろがる、などいふに同ト。

○いとなくて　いとまなくてなり。

いみじくこそ覺えしか　こゝは、慈悲心のあるをほめるにて、かの繩を引かれしは、實に、慈心のことであると覺えしとの意なり。

いさめなりけり　いさめは、制旨のことなり。拾葉集に、「たらちねのおやのいさめしうたゝねは物おもふ時のわざにぞありける」とあり。

いかになるみの浦なればなど　續古

今集に「さてもわれいかになるみの浦なればゝ思ふかたには遠ざかるらん」とあり。

いたづらにめかり塩やくすさびにも云々　今阿佛尼い、鎌倉の濱邊にありて、成すこともなく、海藻をかりたり、又鹽をやきなどして、月日を送り居る手業につけても、かれて、なれむつびたりし、京の尼上がこひしくなりきとの意なり。阿佛尼の、わざと、めかり鹽やくすさびなるにあらざれども、濱邊に居れば、かくは、自らなすやうにさりなしたるなり。

いたづらにあまのしほやく烟とも云々　今、このまゝに、病のために死に失せなば、誠に犬死といふものにして、あまの鹽やく烟とも、誰も見て來るゝものはないとの意なり。「烟」といふ緣にて、「きえ」といひたるなり

いづくより旅寢の夢にかよふらむ云々　如何なる所より、爲家の夢が、阿佛尼の旅寢の夢に通ひしならむ、兼て爲家が、存生中に、後年のことをおもひおきたる、書きおきをたよりに尋ね通ひたるであらうかとの意なり。「おく」といふ詞の緣より露といひ、又、旅寢を草枕ともいへば、尙ほこれにも、緣あるなり。

いまき　湯卷の字にして、女官の湯殿に侍する時、上着の上より、脚部にまきつくる布をいふ。

いにしへの三代の嵐　南朝の後醍醐、後村上、後龜山の三朝をいふ。○いらか　「甍」の所を見よ。

いざといはましをなどうちずんじらる　伊勢物語に、「くりばらのあれはの松の人ならば都のつとにいざといはましを」とあるによれり。「うちずんト」は打ち誦するなり。

○いなみの原　播磨國印南原に、辭むといふ詞をよせていへり。

いさめる事あれかし　戰爭でもあれかしなり。萬葉集に、「鳥がなく東おのこはいでむかひかへり見せずていさみたるたけき軍されきたまひ」云々」とあり。

いろくづ　鱗のことなれども、轉ては、魚をもいふ。

いたしともおもほゆず　故郷にかへりたき思進みてあれば、友人との別れも、左程心苦しくないとなり。

○いち早き　選早の字にして、甚しく速きをいふ。

○いでや　俗に、いやもうといふ意なり。

いろせ　兄のことなり。又敬愛すべき男子を親みてもいふ。

いそぎを見れど何事もえいはず　早く京に往かんと、急きはすれども、亡子の事に心引かれて、かれこれの、支度などせよともいはずとなり。

いはれほのめく　なさけ深き人々なりとやうに、噂せらるゝとなり。

いのりくるかざまとおもふを云々　風の絕間の、波のなきうちにと、神にいのりて來しものを、生憎に、かもめが立ちさわぎて、恰も波の立つが如くに見せて、人にいらぬ心配をさせるとて、波を恨む心を、かもめにうつしたるなり。

いたく住の江の忘草云々　物ほしきかやうに、爲に、人をひどく苦しむる神は、歌などに、やかましくいふ神とは異りてあるだらうとなり。

ろの部

ろくろ　轆轤の字なり。盤を旋るやうに作りて、其の中央に土を盛り、以て陶器を作臺とするなり。

はの部

はかゆかず　仕事のさきに進まぬことなり。

はかなし　ちちもない、かりそめ、ちよつとした、なんでもない、むだな、などいふに同ト。○はかなくなる　死ぬる事なり

はいり　道入の字にして、門より家に至るまでの庭をいふ。

はや　希求の關係詞にして、願ひの意を持つ。乃ち、「見せばや」は見せたいな、「行かばや」は行きたいなといふ。○はなち出　家の外に向ひたる所をいひ、又別棟に放ちて造り出したる家乃ち、はなれ座敷をもいふ。○はたる　霞の字にして、催促す、責めうながす、などいふに同ト。○はらあし　心だての惡しくねぢけたるこさなり。○はれやかなる顔　かぶりものをせずして、顔を丸出しにしたるなり。

はごくむ、はぐゝむ　孚の字にして、共に養育することなり。

はつ　果の字にして限りとなるをいふ。乃ち終りたるなり。「燒けはつ」はやげてしまふこと、「行きはつ」は行きてしまふをいふが如し。人の死ぬるをもはつといふ。○はつほ　初穂の字にして、稻の穗の、結び始めたるものをいふ。又何物にても初成を神又は朝廷に奉るをもいふ。又初穂の代りに神社佛閣に奉る錢をいふ。○はぢらふ　耻づるといふ詞を延ばしたるなり。○はふる　投の字にして、投げすつる、散らす、投げやる、散り亂るゝ、さまよふ、などいふに同ト。俗にいふ、ほふるは、この詞より出でたるなり。

はた　又より轉ト。又は、或ほ、などの意に同ト。

はるけし　遙なるをいふ。

はかせ、はかし　佩刀の字にして、貴人の太刀を敬ひていふ詞なり。

はかりて　だますことなり。

はためく、はたゝく　はたゝと音のするをいふ。

はしたなし　どちらつかずにあることにして取り付き所がない、淺ましい、なさけない、不都合などいふにも同ト。○はかゝし　しつかりとして居る、たしかにある、きつとしたる、などいふに同ト。○はゞき　すれにまさふものにして、脚絆の如きものなり。○はえゝし　甚だはえて花やかに見ゆることなり。○はかり　はかるといふ動詞の名詞となりたるものにして、かぎり、あてど、めあて、などいふに同ト。

はだれに見ゆる　まだらに見ゆることなり。

はしりで　突き出に同ト。○はじかみ　しやうがのことなり。

はやきつる道の草葉やかれぬら

む云々　一首の意は明なり。こがれた故に枯れむといひたる所面白し。

はらから　同胞の字にして、すべて同じき母の兄弟をいへども、轉じては、一般の兄弟姉妹をいふ。又、一邦内の住民をもいふ。「三千餘萬のはらからよ」の如し。

はるくるところあり　はるくるは、はらかすをいふ。

はかなしや旅ねの夢にまよひ來て云々　この歌は、句をおきかへて、一、二、三、四、五、一、と見れば其の意明なり。「まよひきて」は、爲家の靈の迷ひ來ると、なかれ、夢中には、逢ふと見しも、さむれば、あさかたなくきえはてければ、はかなきものかと悲しみしなり。

はと群りかゝり　はとは、俗にいふ「ぱつと」なり。

にの部

はつかに　僅になり。

はらまき　鍛の簡略なるものをいふ。

はな〳〵とうちゑむ　はなやかに笑ふをいふ。

はしきやし　はしきは可愛しといふに同じくやは感嘆詞、しは添へたるなり。

はこやの山　龍姑射山の字にして、仙洞御所といふに同じ。

はやさめ競ひ云々　はやさめは、早雨にして、いぶくは、息吹くなり。乃ち、急雨にきそひて、黒烟をはきたつる狀をいふ。

ばいんあつふる　風梨の字なり、印度語にて「あないい」といひ、食料に供ず。○ばな〳〵　香蕉に供ずる木なり。芭蕉の實をもいふ。

にほひ　匂の字にして、かをり、つや、威光、などに同じ。

にくさげ　にくむべきさまをいふ。○にや　關係詞のにさやさの重りたるものにて、この詞の下には、常に、「あらん」といふ詞を入れて見れば其の意明ならん。

ほの部

ほと〳〵　どうやら、わるうしたら、ほさんど、などいふに同じ。

ほど〳〵　よい位にといふことなり。

ほこらへり　ほてるといふ詞を延ばしていへるにて。自まんぶることなり。

ほのかに　仄の字にして、ほんのり、かすか、などいふに同じ。

ほころびし衣のたてはなか〳〵　義家、曾て安倍貞任を

にかへる都の錦なりけり　義家、曾て安倍貞任を陸奥に討ち貞任衣川の館によりて防ぎ戰ふ。義家搦手をいたゞきて胄にかされ、館に迫りて之をぬく。貞任城の後より落ちけるを、義家後追ひかけ、きたなくも敵に後を見せるかな、暫しひきかへし玉へ物言はんといひければ、貞任見かへりたるに「衣のたてはほころびにけり」といへり。貞任ふりかへり見て「年をへし糸のみだれのくるしさに」とつけたりければ。義家之をきゝて、はげたる矢をばさりはづし、さばかりの戰の中にてやさしかりける事かなとて、其のまゝ陣にかへりけりとか。「錦を着て故郷に歸る」といふ故事の意をとり、ほころびたる衣と、錦とをとりなしてかくは咏みたるなり。なか〳〵は、却りてなり。

にげなし　不相應、何にも似たことなし、似つかはしからず、などいふに同じ。

にぎび足へる　賑ひ足るといふ意なり。

ほろゝうつ雉子の聲　ほろゝは雉子の鳴聲を形容したるにて、雉子のほろ〳〵と聲を立ていなくなるいふ。○ほどろ　延びたるわらびなり。

ほくそゑみ　あざわらふことなり。○ほた　榾柴の字にして、木のきりはしないふ。○ほぐみ　穂組の字にて、稲の新しき穂を組合せ、門又は倉の戸などにかけて、神に奉るといふ。○ほうたん　牡丹の字にして、ぼたんのこと。○ほかゐ　行器の字にして、食物を持ち運ぶ器なり。形圓くして高く、蓋ありて脚三つあり。○ぽんど　磅の字にして二種あり。一は英國貨幣の名數にして、一ぽんどは我が金貨五圓許にあたり、一は英國量目の名稱にして、一ぽんどは、我が百二十目許にあたれり。○ほぎごと　祝詞の字にして、神に祝き申す詞なれども轉

へ の 部

ゝては、祝ぎ事をもいふ。○ほぐ　祝ふことなり。

ほがら〳〵　朗（ホガラ）を重れたるにて、はれ〳〵しくなるをいふ。

ほいなう　本意なくの音便なり。

ほでうちてこそ云々　「ほで」は帆手にして、帆の兩方に繩をつけ、左右に開かんとする時の便とす。乃ち、追風出で、帆を驚ぐることゝなりたるを悅びて、兩手をうちて、などるが如くせしを帆手にかけていひたるなり。

ほと〳〵しくうちはめつべし　殆ど、船を海中に、うち覆されんとするといふ意なり。

べう　べくの音便なり。「殺くべう」、「行くべう」などの如し。

べかめれど　べくあるめれどの約りたるなり。

へみに足をゑがく　史記に、「舍人數人一巵の酒を得んとして、地に蛇を畫く、早く畫けるもの、酒を得るなり。而して、一人疾く畫を了りたるに、猶ほ足を添へんとて畫く、後に畫き了りたるもの曰はく、蛇もと足なし、是が足を作るは、蛇にあらずといひて酒をされり云々」とあり。乃ち餘計の事をするを、蛇足を畫くといふはこれなり。

へあがりて　經上りにて、功勞を經てといふに同ト。

と の 部

とめて　尋ねてなり。「あとをばとめて」、「あとをとめて行く」などの如し。

とある家　不圖ある家なり。○どち　途の字にして、同じき類を示す。どうし、どし、などいふに同ト。「友どち」、「夫どち」、「女どち」、「若きどち」などの如し。

とり〴〵　取々の字にして、銘々に、思ひ〳〵に、などいふに同ト。

とがむ　咎、尤の字にして、人の非をせむること、又非難することなり。「見とがむ」などのものは、最も輕く用ひたり。○とき車　疾き車にして汽車のことなり。

としごとにおひそふ野べの小松原云々　小松は子供のことをいひ、うゑもかされむは、種ゑも重れむに、種痘をかけていへり。年々生れ出る子供が、天然痘にたふるゝことなく、幾久しく健かにて、人口の增殖せんことを計るために、かくは種痘を施すなりといふ意なり。○とこしなへに　長の字に

して、不易に、永久に、長久に、などいふに同ト。○どよみ　鳴りひゞくことなり。

ふ。○とうでゝ　取り出でゝの音便なり。

とくこそなどいふ　早く御出でなさいなどいふ也。

とことは　とこしなへといふに同ト。

とりこめて　とりまきてといふに同ト。

とほしろし　遠著の字にして遠くまでつきりとよく見ゆるなり。

とばり　帳の字にして、戸を張るべき所に張り、以て明りを取るために垂れたる布なり。

とし頃　數年この方、年來などいふに同ト。○とねり　舍人の字にして、天皇皇族の近侍雜役の官なり。攝政關白以下人臣にも賜はれば引き連る。大舍人、内舍人小舍人などあり、又牛車の牛飼、馬の口取りなどをも稱せり。

とのゐぎぬ　宿衣の字にして、直衣、衣冠のいでたちをいふ。束帶に對していへるなり。○とりばみ　鳥食の字にして、大饗に奉りしあがりものをいふ。

とゞろ　どろ〳〵と音のする狀をいふ。

とゞめ刺す　人を殺したる時、疑りに喉をさして、息の根をとむるをいふ。

とがり矢　形ふくれて、其の先きとがり、恰も烏賊の足を去りたる形したる矢なり。

ともしびのきえぬるやう　たよりに思ひし人のなくなりしを暗夜に燈火の消えたるにたとへたるなり。○とさも　さは、利の字にして、さは、狀の略せられたるなり。

とのもりのとものみやつこ心あらば云々　殿宇を番して居る、みやつこだちよ、もしも、幾分か、風流の心があるならば、今年の春ばかりは、どうゞ、朝の掃除をしないやうにしてくれよ、この庭にちりしきてある花を、はきすてらるゝのは、實に、殘念の次第であるとの意なり。「とものみやつこ」とは、主殿寮の下司にして、

禁中の掃除などする人なり。○とぢふみ　帳面のことなり。

とらふあるがる　紀元一千、百五年十月廿一日、なぼれをんと、英國の艦隊と、とらふあるがるに於いて、なしし海戰なり。

とくとおもふ舟なやますは云々　急いで京に歸りたいと思ふに、かく水の淺くして、船の進むことの出來ざるは、全く水が我れに對して、深切の淺いのである意なり。○とくやりてむ　疾く破りてむにて、この日記は、早く破り棄てんとなり。

ちの部

ちなみ　因の字にして、ゆかり、えん、などいふに同ト。

ちぎり　契の字にして、契約に同ト。又前世よりの緣をもいふ。「ちぎりをこむ」などいふ時は、深くいひかはすことなり。○ちゞにうつらふ　樣々にかはるをいふ。○ちはひ給ひて　神より幸ひを、下し給ひてなり。

ちりをいづるにあらず　世に道心を起して、出家したるにあらず。○ちりぼひ　ちらばるといふに同ト。

ちゝの實の父と　萬葉集に、「ちゝの實の父のみこと、おぼろかに心靈して思ふらん云々」とあり。

ちぶりの神　道路の神にして、道守の神といふに同ト。く、海路を守りなる神をいふ。

ぬの部

ぬれそぼつ　そぼつも濡の字にして、びしよぬれになることをいふ。

ぬさ　幣の字にして、神を祈る時奉る物なり。多くは紙、木綿、布、麻などにて作る。

ぬための鏑　鏑矢の一種にして、鹿の角にて作り三方に鏃を殘す。

鏃とは角のはだの鏃の如きものをいふ。○ぬかご　零餘子の字にして、山の芋の子なり。○ぬりごめ　塗籠の字にして、今の土蔵の如く、厚く土をぬりたる室をいふ。家の内にて奥の方にあり、其の用今のなんどの如く、器財などを藏めおく。古は寢室もぬりごめに成せしが如く見ゆ。○ぬひもの螺鈿　貝を編物にぬひ入れたるをいふ。○ぬすまれ出でさせ給ふ　窃に、忍び出でたるをいふ。

をの部

をさ〳〵　大抵、おほかた、などいふに同じ。

をり〳〵　折々の字にして時々なり。○をかし　笑ふべくあるをもいひ、面白きをもいふ。○をゝし　雄々の字にして、男らしきをいふ。

をめく　さけぶ、わめく、小聲にてうなる、などに同じ。

をしき　折敷の字にして、飯器かのするに用ふる、へぎの角盆なり、

をちこち　あっちこっちなり。○をこ　烏滸、痴などの字なり。烏滸は、南蠻の國名にして、其の人、をかしきことをなすより轉じて笑ふべきばかりにおろかなるをいふ。あはうらしき、ばかげたる、などいふに同じ。○をさ〳〵しさ　長々の字にして、かく〳〵し、かひく〳〵し、立ち優り居る、おとなびたる、などいふに同じ。

わの部

わりなし　區別なし、道理なし、せんかたなし、あまり甚し、無理むたい、しひて、などいふに同じ。○わざにのみ敬ふ　人みせにのみ敬ふことなり。○わたらふ　生計、世渡り、などいふに同じ。

をのこども　をとこども、男子ども、といふに同じ。又、郎黨をもをのこといふ。

をの〳〵　わな〳〵に同じ。○をり　檻の字にして獣を入るゝ所なり。

をりふしのうつりかはる　四時の變遷するをいふ。○をちつ年　をちの年にして、一昨年といふに同じ。

をらんぐうん　猛々のことなり。

わたり　あたり、ほとり、などいふに同じ。○わろびる　憶するをいふ。○わきだめ、わいだめ　辨別、分別の字にして、物の區別をいふ。○わた中　わたは海のことにして、海中をいふ。

わりご　破子の字にして、今の弁當箱のことなり。

わびしれたり　わぶは離騒することにして、しれは正体なきをいふ。乃ちあらぬ姿になりはてたるなり。

わらうづ、わらぐつ　藁のはきものにして、草履鞋などなり。

わなゝく　なのゝくに同じ。物に恐れて、ぶるゝく身をふるはすことなり。

わたらせ給ふ　わたり給ふに同じ。御出でになり給ふなり。

わたうたち　あなたゝちなり。

〇わたつみ　海の神をいふ。又單に海といふにも用ふ。

〇わざのよ　佛事のある夜をいふ。

わるびる　わろびるに同じ。

〇わたがみ　綿上、綿紙とも書き綿の胴をつゝりたる屑にあたる所なり。

わたらましやは關のふぢ川　このふぢ川をわたりて、遠く東のはてまで行くも、只一心に、鎌倉の政所を仰ぎ、我が子供をして、君に仕へしめん一徹心からである、左なくば如何して、この川を渡らんや、わたりはせぬとなり。古今集に、「みのゝ國藤のふぢ川たえずして君に仕へむ萬代までに」とあるによれり。

わらはやみ　おこり、瘧ごといふ病なり。

わろうだ　わらぶたの音便にして、藁蓋の義かといへり。

わらはごとにては何かはせむ云々　かやうに、結撰なる歌を、小供の歌とするはなしければ、嫗か、翁のよみたるものになすべしとの意なり。

わすれ貝ひろひしもせじしら玉を云々　私は濱に立ちて、忘貝を拾ふことは致すまい。如何となれば波にうち寄せらるゝ其の白玉の如き兒を、こふる心をのみ、せめてはかたみと思はんとの意なり。

わすれ草　萱草の字にして、毛詩に、「焉得二諼草一言樹二之背一」註云萱草今二人忘レ憂一とあり。

わすれてはゆめかとぞ思ふ思ひきや云々　この深雪なふみわけて、かく遠き山里にて、深雪なふみわけて、君に御目にかゝりませうとは、實に思はなかつたから、君のこの山里に、御引籠りになりて居ることを忘れては、これは、夢ではあるまいかと思はるゝとの意なり。

かの部

がて　雖の字にして、すべて難くあることをいふ。「憎えがて」、「行きがて」、「過きがて」、などの如し。

かつ〳〵　且且の字にして、殆ど、僅にからうじてなどいふに同じ。

かたほ　片秀、偏の字にして、不充分なることをいふ。

〇かたへ　片方の字にして、かたはし、かたわき、かたそば、かたつぱうなどいふに同じ。

かゝづらふ　物事に關係することをいふ。

かだましし　奸の字にして、心のねぢけたるをいふ。

から櫃　足のある櫃にして、長がらひつ、になひからひつの二種あり、脚は各六つありて笈の脚の如し。

〇かばかり　斯許の字にして、此の位、これ程、などいふに同じ。

〇かりや　假屋の字にして、かりに作りたる家かくばかりなつかしめたる詞なり。

〇かけはし　棧、掛橋の字なり、けはしき所に設置又は、板などにて渡したる橋をいふ。又梯子をいふこともあり。

〇かりの殿　督の殿、頭の殿、守の殿、などありて、かうはかみの音便なり。督の殿は、衛門府、又は兵衛府の長官、頭の殿は左馬の頭、

守の殿に國の守なり。○かしこき君位　もったいない君位なり。

かたみ　形見、互の字にして、形見はなき人又は遠く別れたる人の事を思ひ起さしむる記念なり。互は、あひたがひなり。○かけて　掛の字にして、掛て、かれて、などいふに同ト。○かたくな　頑の字にして、頑固、偏屈、片意地、などいふに同ト。

かたくなしき身　かたくなしは、かたくなより轉ト。○かしし　詞の意のきれたる所につよく關係詞にして、其の意を強め念を推していふなり。「見よかし」「行くかし」「是れがかし」などの如し。

○かたはらいたし　片腹痛、傍痛の字にして、かたはらにありて氣の毒らしく思はるゝをいふ。又片腹にいたみあるが如く聲を發して笑ふにも堪へられぬ意なりとか。氣の毒な、迷惑な、笑止千萬などいふにも同ト。○かりくら　狩蔭の字にして、狩場をいふ。又爭ひて狩りを行ふをもいふ。○かへるさ　かへり道、かへる時、などに同ト。○かざす　翳の字にして、頭にさすことなり。又おほふことなもいふ。○かしこまり　畏の字にして、さしひかへ、つゝしみ、おんれい、恐入る、わびごと、などいふに同ト。

かいつまみて　摘の字にして、かいはかきの音便なり。乃ち、さりいでゝ簡略にすること、などいふ。○かたくなしき身　かたくなしは、かたくなより轉ト。○かしづく　侍、傳の字にして、附詞にて愚なるをいふ。

かけまくも　掛巻毛の字なり。掛けんも、の詞を延ばしたるにて、掛けて口にかけていはんもといふ。○からうじて　辛くしての音便なり。やうやくのことで、からく、などいふに同ト。○かれいひ　乾飯の字にして、ほしいひ、乃ち、飯のほしたるものなり。

かうざまにつくれるも　かうはかくの音便にして、

かやうなる風に作れるもなり。○かりそめ　假初の字にして其の時限りなることゝ、確と定めぬこと、暫しのまにあはせ、などいふに同ト。

かりそめのおましどころ　おましどころは、主上の居給ふ所なり。乃ち、行在所をさしていふ。○かづく　被の字にして、頭の上にかぶるをいふ。○がうりき　合力の字にして、山に登るものゝ召しつるゝ人足をいふ。○かち　徒の字にして、徒歩などいふ。物に乘らずして歩行することなり。

かしこく侍らむ　ありがたく結構のことでございませうなり。

かしこき事なし　あぶなき事なきなり。

かたむるが例なれど　戸を閉ぢて仕舞ふがきまりなれども なり。○かしまし　喧、囂の字にして。かましいことなり。

かうく〜し　神々の字にして、ものさびしく何となく尊きやうに見ゆるをいふ。

かやうなる風に作れるもなり。○かりそめ　假初の字にして其の時限りなることゝ、確と定めぬこと、暫しのまにあはせ、などいふに同ト。

かりそめのおましどころ　おましどころは、主上の居給ふ所なり。乃ち、行在所をさしていふ。○かづく　被の字にして、頭の上にかぶるをいふ。○がうりき　合力の字にして、山に登るものゝ召しつるゝ人足をいふ。○かち　徒の字にして、徒歩などいふ。物に乘らずして歩行することなり。

かしこく侍らむ　ありがたく結構のことでございませうなり。

かしこき事なし　あぶなき事なきなり。

かたむるが例なれど　戸を閉ぢて仕舞ふがきまりなれども なり。○かしまし　喧、囂の字にして。かましいことなり。

かうく〜し　神々の字にして、ものさびしく何となく尊きやうに見ゆるをいふ。

神さぶるといふも同ト。

かそけし、かすけし　幽の字にして、かすかなるをいふ。

からめて　搦手の字にして、城の裏門をいふ。追手に對していひしなり。敵を或る口より追ひ入れて、裏にてからめさる義よりつけしなり。

かくろへて　かくれてといふ詞を延ばしたるなり。

かたゐ　傍居の字にして、道の傍に居り金錢飲食などを乞ひ求めて生活するもの、乃ち乞食なり。○かくさはぬ　かくさぬを延ばしたる詞なり。

かれふ、かりふ　枯生の字にして、枯れたる後に再び生ずる草の根をいふ。

かうやう　かうにうを添へたるなり。○かなづ　爽の字にして、音樂を奏すること。又舞などをまふをもいふ。○がり　許の字にして、の許にといふ意なり。「鍛がり行く」、「妹がり行く」、などの如し。○かまく　氣頁（カマグ）の義

にして、感心することなり。○かつみ　まこも草のことなり。

かこつ　託の字にして、思ひわびてなげくないふ。不足いふ、いひぐさ、いひわけ、かこつくるなどいふに同じ。○かけ鳥　空中をかけ行く鳥をいふ。

かはらけ　土器の字なり。うは薬をかけぬ盃をいふ。

かゝりの櫻　けまりの場所の櫻なり。

かしこまりもおきあへず　いつまでもつゝしみて禮儀を守りて居れぬなり。○かたさまの人　方様人の字にして、味方の人をいふ。○かごかなる所　四方ともにとりかこまれたる所なり。○かひ〳〵し　甲斐々々の字にして、かしこさうな、さも勇しく、りゝしき、などいふに同じ。○かよふ　ゆきゝすること、又よく相似たること をも いふ。○かけうけながら　飲穿の字にして、飲け落ちて後に笑のあきながらなり。

かたらふごとに死出の山路をちぎる　堀川の局の歌に「この世にて、語らひあかむ時鳥、死出の山路のしるべともなれ」とあり。其の心をとりて書けるなり。死出の山路とは、人の死にて行く道をいふ。

かせぎの近く馴れぬるにつけても世に遠ざかる程を知る　四行法師の歌に「山深み馴るいかせぎのけ近きに世に遠ざかる程ぞ知らるゝ」とあり。其の意をとりて書けるなり。かせぎとは鹿のことなり。○かゝりおるゝ　つかまっておるゝなり。

かねの提（ヒサゲ）　やかんの如きものにして、酒を入れて盃につぐものなり。

かこ　舵子、水主の字にして、船に乗るを業とする水夫をいふ。

かたうど　方人、荷擔人の字にして、仲間、助くる人、わがみかたの人、などの意なり。

からふね　唐船の字にして、朝鮮支那等より來る船をいふ。

かぴたん　船長のことなれども、單に長といふ意にも用ふ。

かんだちめ　上達部の字にして、古、位は三位以上、官は宰相以上の人をいひたり。乃ち公卿といふに同じ。○からぎぬ　唐衣の字にして、宰相とは參議のことなり。昔の婦人の禮服の上に着る羽織の如き着ものなり。○かや　反語の關係詞にして、やはに同じ。○かゞり　篝の字にして、鐵の籠の中に焚く火をいふ。

かけぢ　岩間の細き道をいふ。○かへで　もみぢのことなり。

かたびらき　半びらきといふに同じ。○かもと　徒士の字にして、かちざむらひのことなり。○かゞみ鞍　眞鍮或は銀などの如き金屬を以て、鞍の全體を包み、覆輪をも亦金屬を以てしたるものなり。

かたづをのむ　「堅唾」の所を見よ。○かごと　託の字にして、かこつくるをいふ。轉じては、いさゝかの冒ひわけに足る事實をいふ。新古今集に「あづまぢの道のはてなる常陸帶のかごとばかりもあはんとぞ思ふ」とあり。ほんのしるしさいばんが如し。

かたしろ　形代の字にして古、神をまつる時、その神靈の代りとして作りたるものにして、佛家にていふ位牌と同じ。「見し人のかたしろならば身にそへて云々の」所を參照せよ。

かたみに指のべかゞめ　指にてけんをうつをいふ。

かげともそとも　かげは、影の字にして、山の南の方乃ち山陽をいふ。そは、背の字にして、山の北の方乃ち山陰をいふ。

かへらじとかねて思へば梓弓云々　この度の戰には、生きてかへるまいと、決心して出陣するからに、死人の數に入るものゝ名を、かくは書き記しおくとの意なり。梓弓は、いるのいにかゝる枕詞なり。

かねにわたす　かねは、曲尺より轉じたるにて、眞直の意、乃ち、水流を

眞直に横ぎるなり。○かけず射通す　そこに矢留らずして全く射ぬくことなり。○かたかは破りの云々　一方に強くかゝる義にして、偏にいふ、無法ものなり。

かせがれて　支へられてなり。

かたなづけの駒　馬の物に驚く癖ありて、片側に寄りて走るをいふ。

かも、かもや　共に感歎詞なり。

かいやり捨つ　かき破りて捨つるをいふ。

かゝるをりにぞ人の心も云々　かゝるなる時にこそ、それ迄、よく仕へたる如く見えし人の心も。眞實に仕へたりしか、或は、へつらひの爲めに仕へたりしか、明に知らるゝことなり。

かひ〳〵しげなれば　身輕なる出で立ちをいふ。

かくこそはとぞ覺ゆ　かほどまで、烈しくは吹くまじきの意なり。

かしこき御代には憐をもて云々　仁德天皇の朝をさしていへり、

かきおくあとたしかなれども　爲家の書きのこされたる遺書は確なれどもなり、播磨國細川の莊の讓狀のことなり、

かもめゐる洲崎の岩もよそならず云々　かもめのむらがりとびかふ、かの岩を見るに、このけしきはよそごとゝは思はれず、親しくみなれて居るのである。如何となれば、渥の岩がけなかけこすが如くに、涙にひまなき袖を、朝夕見なれて居るからとの意なり。見なれてに、水馴れてをかれたり。

かたれば近きいにしへの夢　この頃京にて、

新中納言も、同樣の夢を見たることありしなるべし。故に、語り合はすれば近くこちらにも、同樣の夢を見たりとなり。

かりそめのくさの枕のよな〳〵を云々　母の旅寢を思ひよせてさへ、自分の袖には、かやうに涙のふりかゝることなれば、勿論、草の枕の露けさは、おしはからるゝさの意なり。

かしとかる世の云々　泰伯が「行路難、不レ在レ水、不レ在レ山、祇在二人情反覆間一云々」などあるによれり。○かれ飯　乾飯の字にして、古は、旅行するに飯を乾して携へたり。之より轉じて、辨當のことをいふ。

かしこさ思ひやらる　其の恐しさが、思ひやらるゝとなり。

かにかくに　かれにつけ、これにつけ、常さかはりてなり。

かゞやかし　まばゆきにて、はづかしきをいふ。

かけても　さてもといふに同じ。

かひ　映うにして、山さゝこの間なり。

かげろひて駒のあがきに　かげろひては、かげだちてといふに同じ。日の將に入らんとする時、一層まばゆく、かげのさすをいふ。駒のあがきは、馬の足をかくをいふ。

かひがねをさやにもみしが　古今集に、「かひがねをさやにも見しがけゝれなく横ぼりふせるさやの中山」とあるをいへり。

かど　角の義にして、才氣をいふ。

かちより乘うづ　馬、車に乘らず、徒歩にて參るをいふ。

○かけものとりて　かけものは賭物にして、連歌の景物をさりてなり。○かいもちひ　掻練の餅、乃ち、おはぎの如きものなり。

かたらひとりて　承知なさせてなり。

から人の山陰の友訪はむとて　王子　獻といへる人なり。千獻曾て、夜雪動てはれ、月色清明なる夜、忽ち山陰なる戴逵を憶ふ。便ち、剡溪に舟を泛べて、戴逵を訪ふ。やがて至りて、門前に舟を止め、さて入らずして反る。人其の戴逵を訪ひて、戴逵を見ざる故を問へるに、もと興に乘じて、來れるのみなれば、興盡きぬれば、則ち歸れるなり。何ぞ必ずしも、安道を見るべきと答へたり、安道は、戴逵の字なり

かひうたなどいふ　古今集に「かひがれをさやにも見しがけゝれなく欄ぼりふせりさやの中山」とある歌をうたへるなり。これも、四國の人にして、東國の歌をうたひたりとおどけたる筆づかひなり。

かずはたらでぞかへるべらなる

古今集に、「北へ行くかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる」とあり。之に對して、和歌をやまとうたといふ。

よの部

からうた　詩のことなり。

かたがたに別るゝ身云々　隆家は但馬に、伊周は播磨に別れゆくといふ。

かくさだかになむ云々　この宿は、これこの通り、昔のまゝに相變らず、しつかりとしてあるぞとの意なり。

からのふみ　史記といふ書物をいふ。始皇本紀に、「子嬰爲二秦王一四十六日、趙將沛公、破二秦軍一入二武關一、遂至二朝上一、使二人約降一子嬰一」とあるをいへり。

よみす　嘉、好の字にして、めで愛ずることをいふ。

よしさてもあれかし　よしそのまゝにうちすておけなり。

よしなし　よるべのなきこと、いちぬこと、因緣のなきこと、などいふに同じ。

よな　感嘆の詞にして、呼びかけを表す。「ぬ着きしよな」の如し。

よみもあへず　數へきれぬなり。

よな〳〵　夜々といふに同じ。

よろづのいたりも深し　萬事によく經驗のさきなることなり。

よりく〳〵に　時々になり。

よみかへる　蘇の字なり。黃泉よりかへるの義にして、死にたるものゝ再び生きかへることをいふ。

よっ引いて　よく引きての音便なり。弓を一ぱいに引くことをいふ。

よどむ　淀、澱の字にして、流水の滯りてたまり居ることなり。又辯舌のよからぬをもいふ。乃ち流水の滯るが如く、辯舌の滯るを以てなり。

よすが　因、緣、便の字にして、つて、ひき、ゆかり、よるべ、たより、などいふに同じ。

よさす　寄の字にして、よすを敬語として用ひたるなり。乃ち、まかすることをいふ。

よさしゝまにく　まかせたまゝになり。

よろぼひ盲　よろ〳〵たふれかゝりつゝあるく盲なり。

よまゝく　讀まんといふ詞を延ばしたるなり。

よろしき姿　相應の姿なり。

より來つる說　從來、自分のよしと信じて、賴り來る說なり。

よみぢの障　死にて行く路のさまたげなり。

よはひ　齡の字にして、年齡のことなり。

よき人はひとへに好けるさまに

も見えず　人品のよき郡人などは、一筋に、好む心は十分にあれど外見の樣は、左樣には見えぬ。○よごもる　世慮の字にして、年の若きかいふ。

よそめばかりや云々　月清集に「かもめうかぶ波路はるかに漕出でぬよそめばかりや沖のさも舟」とあり。

よこほりふせる　古今集に「かひがねをさやに見てしがけゝれなく横ほりふせるさやの中山」とあり。

よしや君むかしの玉のとことても云々　清涼殿や紫震殿の玉の床に、おきふし成し玉ひける御身が、見なれの音もきこえぬ遠土に、すぐさせ玉へる御心の程は、如何ばかりにおはしましけむ、されども一片の烟となり果てゝは、敢へてかはる所もなし。たとひ、むかしの通の玉の床も、世をへだてたる、今に至りては、何にもなるまいさの意なり。○よりはつともなく云々　寄り果つにして、七種の品評をしながら、どれに心をよすといふこともなく、かれもよし、これもよしさばかりいふは、餘に、ぼんやりしたる花定めなりといふ意なり。

よや〳〵とさけべは　助けよや〳〵と、顏にさけぶなり。

よせつゝ人をはかるべらなる　雪か花かと疑はるゝ程ふきよせて、人を欺くやうすだての意なり。「はかる」は欺くことにて、「べら」とは、可き樣だといふ意なり。

よする波うちもよせなむ我がこふる云々　この濱にうち寄する波よ、さてものことならば、この磯にありといふ、うるはしき忘貝を、うちよせて與れ玉へ、さすれば、我れの一日も忘れず、戀ひ慕へる亡き兒のことを、少しは忘るゝこともあらむとの意なり。

よるの鶴みやこのうちにこめられて云々　夜の鶴の如くに、子を思ふ親は、郡の中になかれ、遠なる我が子の身の上のみ案じられて、夜を泣きあかすとの意なり。「よるの鶴」は、蘆野の雄子夜の鶴とて、子を思ふ情の切なる例に常にひけり。「みやこ」は、郡に、身や籠をかれたり。白氏文集に、「冷花鶴憶子籠中鳴」とあり。

たの部

ためらふ　躊躇の字にして、みあはす、猶豫する、などいふに同じ。

たどる　迦の字にして、案内知らぬ路を迷ひ行くといふ。又、樣々にたづねゐることをもいふ。

たゞよふ　漂の字にして、浮びて動き廻ることをいふ。又ぶらつき廻ることをもいふ。

たしなむ　嗜の字にして、好むことなり。又、かれてより心がけ用意することなり。又、さしひかふることをもいふ。○たゞふ　稱の字にして、ほめていふことなり。

だに　接萃の關係詞にして、なりともせめて、でも、などの意なり。「受けてだに」、「京なる人だに」、などの如し。○たぐひ　比、類の字にして、同じき種類のものをいふ。

たぐひなし、たぐふべき物なし　比べる位のものはない、並べる位のものはない、などいふに同じ。

たゆたふ　躊躇の字にして、動きたゞよひて定まらぬをいふ。ためらふ、うち〳〵する、ゆらゝゝ、などいふに同じ。○たど〳〵し　たどり行くさまを形容していひたるにて、あぶない、とぼ〳〵する、おぼつかない、それかあらぬか、不案内、などいふに同じ。

たけし　健、猛の字にして、勇しくさかんなるをいふ。つよし、はげし、すぐるゝ、などいふに同じ。○たゆむ　怠、弛の字にして、心うむ、油斷す、などいふに同じ。

たゞに明す　成すこともなく空しく徒に夜を明すなり。

たへがたき夏も軒端のしのぶより云々　たへがたき程熱き夏の日をも、無理にたへしのんで居れば、何時か軒端のしのぶをつるしてあるあたりより、得も言はれぬ涼しき風が吹き来りて、これまでしのんで待ち居りし甲斐があるといふ表面の意にて、裏面には何事にても、忍耐もて之に従へば、後には必ず幸福の域に達するものだといふ意を含めり。しのぶに忍耐と忍草とをかけたり。○たゝへ置く　湛へ置くにて、水を一ぱいに充たしおくなり。○たをやか　女のしなやかなる姿容したる詞にして、たわむの義なり。しんなり、しどやかなどいふに同ト。

たゝずむ　立休、佇の字にして、暫く立ち止るといふ。

たゝずまひ　たゝずむより轉じたる詞にして、そこにある様子をいふ。ていたらく、といふが如し。○たゝうがみ　畳紙の字にして、たゝみたる紙をいふ。今いふはな紙なり。○たゝなはる　長きものゝちぢまりて重るをいふ。たゝまるといふ詞の延びたるなり。○たらひ　足るといふ詞を延ばしたるなり。

たふさぎ　ふんどしのことなり。○たづき　方便の字にして、たより、よるべ、などいふに同ト。○たぶ　賜ふことなり。

たちど　立處の字にして、立ち場のことなり。

たどしへなし　たとへやうもなしなり。

たうべよ　たべよなり。飲食共に用ふ。

たうでゝ　取り出でゝの音便なり。○たくみ　工の字にして、大工のことをいふ。○たちのきたるずさ　へだたりたる所に居る家来なり。○たゝなづく群山　たゝなはる群山をいふ。

たゞよくこゝろしづかなれば、すなはち身もすゞし　自樂天の詩に可居禪房無二熱到一但能心靜即真涼。とあり。○たへ　榜の字にして、古の布の類なり。多くかぢの木の皮にており、色白きを以てしろたへといふ。○たかひも　高紐の字にして、鎧の胴釣りの紐なり。金のこはきをいふ。○たかひも　妙の字にして、すぐれてめでたしといふ。

たれこめて春の行方知らぬも　簾をおろし、其の内にひき籠り居て、春の過ぎゆくをも知らず、何時のうちにか、櫻の花の散り失せて仕舞ふもなり。古今集に、「たれこめて春の行方もしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり」とあり。

たにぐく　谷蟆の字にして、今いふひきがへるの古名なり。

たまどこの前　靈前のことなり。

たきものをたく　薫物を、火にくべてたくをいふ。

たよりをかし　その位置の便利よく、おもしろくこしらへたるをいふ。

たまくしげ　櫛箱のことなるが轉じて、箱といふ詞にかゝる枕詞となれり。

たへなる法の花のちぎりは　妙法蓮華經といふ詞を詠み入れたるなり。○たらちね　母親のことなれども、轉じては、親をもいふ。○たち待ち居待ち　たち待月と、居待月とをいふ。たち待月とは、十七日の月をいひ、居待月とは、十八日の月をいふ。

たんなれ　たるなれの音便なり。

たゞもあらず　だまりてばかりも居られぬなり。

たもとほり　たは接詞にして、もとほりといふに同ト。

たむげ　峠なり。たうげと いふは音便なり。○たぎち　濱の字にして、たぎつといふ詞か、名詞として用ひたるなり。

たまの浦を横ぎり　たまの浦は、上總國一宮に、玉崎神社あれば、こゝらの海邊なるべしさ。○たんにん　單寧の字にして、誠き味する藥なり。

たうめ　老女のこさなり。

れの部

れいの神ぞかし云々　何時ものやうに、荒ぶる神だが、それは、何かほしがるものがありて、其の故ならむ、さても、當世の人の如く、慾心深き神かなと、能取のいひし詞なり。

その部

たてば立ちゐれば又ゐる云々　風が立てば波も立ち、風が靜まれば、波も靜るが、風と波さは、心の相あふたる友同士であらうかさの意なり。

たけども〳〵しりへしぞきに云々　こけどもこけども、船はさきに進まずして、後へ〳〵と次第に退くさいふ意なり。

そも　上をさし下を呼び起す接續詞にして、多くは意味なし。

そも〳〵　そもなかされて用ひたる接續詞にして、後ゝめ、といふ意に用ふることあり。

そゞろ　後の字にして、すゞろと同ト。何となく心の動くないふ。覺えず、そげなしに、めったに、何となう、などいふに同ト。○そゞろあるき　餘歩の字にして、何の目的もなくに散歩するないふ。すゞろあるきに同ト。

そなたざま　そっちの方といふことなり。

そびら　背の字にして、せなか、せ、などいふに同ト。

そげもの　前者の字にして。かたよったもの、乃ち、のけものなり。

ぞう　族の音便にして、やから、うから、などいふに同ト。乃ち血筋のつゞきたる親族なり。

ぞめき　騷の字にして、人の集りさわぐないふ。

そぼふり　ぞぼ〳〵ふるなり。○そぎへ　退邊の字にして、遠く離れた方ないふ。○そのかみ　その節、その時、そのむかし、などいふに同ト。○そゞろ神　後神の字にして、何とも知れぬ狐理の如き、人にたゝりをする神ないふ。

そむきても猶わすられぬ面かげは云々　一旦、世をそむきて佛道に入りたりとて、夫婦家郷の御事は、どうしても忘られぬが、この面かげさいふものは、浮世以外のものであらうかさなり。

そぼつ　ぬるゝないふ。

それ故にとびわかれてもあしたづの云々　前の歌をうけて、其の通りなれば云々さいひたるにて、かたに濕さ方さ々かれ、都の方は、矢張りこひしく、悲しく思ふさいふ意なり。○そとも　外面の字にして家の外の方ないふ。

そば〳〵に聞えしが　角々の字にして、疎遠さなりて角立つないふ。○そとは　「卒都婆も苦むし云々」の所を見よ。

そのかみもやがて嵐のふく原に云々　其の當時ですら、遷都の後は、忽に荒れて、嵐のふきたちけむ國原に來て見れば、目に見ぬ昔の事までも、思ひ出さるゝ事かなといふ意なり。

そこはかとなく　そこと、とりさめたることなきをいふ。

そは腹　臨腹のこさなり。

つの部

つはもの　兵士のこさなり。○つなぐ　繋の字なり。離れざるやう結び付くるこさにして、城をつなぐは、城々の連絡をつくるなり。

つどふ　集るこさなり。「うちつどひ」、などの、うちは、接詞にして意をつよむるまでなり。

つぶさに　具の字にして、くはしく、詳に、明細に、つばらに、などいふにおなじ。

つゞらをり　葛折の字にして、甚だしく曲りたる坂道をいふ。俗になゝまがりなどいふに同じ。○つきもなき事　叹つきもせぬ、尤もらしくない、不相應、などいふに同じ。○つくばひさま　樣といふ字を草書にかけるにて、其の形つくばひたるが如くればなり。○つゝ　乍の字にして、つの意なりたる關係詞なり。ながらの意にして、これをしながら、かれをなす義を示す。

つばら　つぶさと同じ。○つかへを致す　官職を退くこさなかいふ。○つと　苞苴の字なり。藁などにて包みに作りたるものをいふ。又、土地の產物を携へ行くに、つさに作るより轉じて、みやげものをつさといふ。「山づさ」、「家づさ」などの如し。

つと　動かぬ形を形容していふ時は、ぢっさいふ意になり、動く形を形容する時は、急にの意さなる。○つきたち　朔の字にして、月の立ちて翌月さなるをいふ。乃ち初旬のこさなり。又一日をもいふ。○ついたち　つきたちの音便にして、一日のこさなり。○つとめて　翌朝に早くさいふこさなり。又單に朝早くさいふにも用ふ。○ついひぢ、ついぢ　築墻の字なり。板を心さし泥土にて塗り固めたる垣にして扉根は瓦にてふく。

つきゝし　似つかはし、ふさはし、などいふに同じ。

つよらに　強くなるをいふ。又、絲などの弱るをもいふ。

つい　つきの音便にして、其の意味輕く、ちょっと、そのまゝ、てがる、などいふに同じ。「ついね」などの如し。○つかさ位　官位の字にして、つかさはつとめ、位は、天皇陛下より、臣下に賜り、其の身の高卑を分つわかちなり。

つかなみ　叢なあまた束れてつくりたる數物なり。

つぼをる　狹く小さくつぼむるこさにして、はしをるに同じ。

つらからはきしべの松のなみをいたみ云々　つらからはきしへの文字の中にから萩といふ詞を含み、れにあらはれてのれに、松の根さ、鳴く音の音をかれていひたり。大意は餘りつらからば濱邊にある松の水が波の甚しきため遂に、根をうち出された其の根即ち音になきてつらさをはらさんさ思ふさなり。いたみは甚しき故に、音になくは聲を立てゝなくこさなり。

つまはじき　爪彈の字にして、心に叶はぬこさなどあるさき、又は腹しむ時などに、指の爪をはじくをいふ。にくゝし、いかた、のけたい、などいふに同じ。

つれ〳〵　物さびしきをいふ。無聊といふに同じ。

つらゝ　連氷の字にして、こほりひさもいひ、田の面などに、はりつめたる氷をいふ。誤りては「たるひ」のことをもいふ。

つひによもあだにはならじ藻鹽草云々　かやうに、三代のかたみを跡にのこしおかれたれば、よもや、精道にふみ入りて、歌道をあだにするやうのこともあるまひにつき、決して、御あんじなさるなとなり。「みよ」は、俊成、定家、爲家の三代をいふ。

つゝましくする事どもを　この人何か、他人の聞くことを、憚り遠慮する事ありて、其の事を思ひつゞけたる文なるべし。

つるうゝつ　鳴弦といひ、弓弦をうちならす義にして、悪鬼おそれてにげさると云ひ傳へたれば。○つたかへでのは　蔦楓の葉にして、拙き詞といふをいはん爲の序なり。

つゝりの袖にして云々　古今集に、「たむけにはつゝりの袖もきるべきに、紅葉にあける神やかへさむ」とあり。又袖を尾花に見たるは、古今集に、「秋の野の草の袖と見るらん」とあり。○ついゐて　つくばひて居るをいふ。

つくは山端山しげ山しげゝれど云々　新古今集戀の部の歌なり。乃ち、筑波山がいかに繁く、障り多くとも、思ひ込みて、入るときは、屹度入りこなすといふ意なるを、それを學問の道もいかに、しげくとも、思ひ込みて勉強すれば、遂には、高れに達すべしとの意にとりなし、さてはしげ山と號かつけしなり。端山は端の山にして、しげ山は、繁き山なり。筑波山は、水立繁き山と古よりいひならはしたり。

ねの部

ねになく、ねにあらはしてなく　共に聲をたてゝなくことにして、ねは鳴き音なり。

ねもごろ、ねんごろ　懇の字にして、親切、ていねい、などいふに同じ。○ねたば　新刻の字にして、切れあぢの錦りたる刻をいふ。刻譲りては、よくきれる刀をいふ。○ねびれしぼむ　ねびるは老成の字にしてねぶに同じ。乃ちねぶしなるゝなり。○ねつたい　嫉しさいふなり、音便にいひたる當時の語なり。○ねべんちゃす　猫髭草のことなり。

ねたきいはざらましものをと云々　淡路のこの歌に劣るは、實に殘念でたまらぬが、かくと前より知らば、いはずしてある方よかりけんものをなど、悔しがる中に、奥に入りて腹たりさなり。

なの部

なめり　なゞめりと讀むべし。なるめりのるの省かれたるなり。

なだらか　おだやか、たいらかなどいふに同じ。

なだれ　崩壊の字にして、雪のくづれて落つるをいふ。

なだれ下り　土地の次第に低く斜に傾くをもいふ。

なむ　關係詞にして、想像に用ふると、希求に用ふると指示に用ふるとの三種あり。想像に用ふるは動詞の連用捨に連りて、であう、にあう、の意に當る。乃ち、「過ぎなむ」、「散りなむ」、の如し。希求に用ふるものは、動詞の將然格に連りて、てほしい、ておきたい、の意に同ト。乃ち、「食さなむ」、「行かなむ」、の如し。又指示に用ふるものは、多きものゝ中より一つを撰び出したる如き意にして、關係詞のぞと同ト。故に、二段の係りとなる。○**ならひなればにや**　ならひは習慣なり。ならはしてあればだらう。にやの下に、あらんといふ詞を入れて見れば其の意明なり。

なら柴の肩衝　肩衝は茶入の一種なり。

なめ　井の字にして、成ならぶるなり。○**なま**　生の字にして、成り調はぬ、未熟、又は世に馴れぬ、などいふに同ト。「なま好事」の如し。○**なま學匠**　年功なく充分に世に馴れぬ學生なり。○**なましし**　助動詞のなと關係詞のましと合して想像の意を表す。上に必ずいふ關係詞あり「明日は雪とぞふりなまし」の如し。であらう、てばよいに、などいふに同ト。○**ならし**　關係詞にしてなるらしのるの省れたるなり。

なかく　中中の字にして、却りてと其の意同ト。

なほざり　等閑の字にして、輕々しく見なす、普通として、心を付けず、などの意に同ト。

などて　何故に、何とて、などいふに同ト。

なまじひ　憨の字にして、生強の義なり。心に望まざるに、是非なくまげて、自身強ひて手をのばすとも善きに、などいふに同ト。○**なゝそ**　禁止の關係詞にして、なほ上に、そは下に詞を挾みて用ふ。なす勿れといふ意なり。「ないひそ」、「なぜそ」、「な行きそ」、などの如し。○**なでふ、なんでふ、なん條**　何程どうして、いかにして、いかでか、などいふに同ト。

なだいめん　宿直の侍の、夜の十時頃、内裏の札を奏し、後其の名を名乘り合ふなり。○**ならせ給ふ**　將軍の御出でになることなり。

なさけ　情の字にして、物のあはれを知る心をいふ。あはれみ、情愛、慈悲心、あいそ、恩愛、などいふに同ト。○**なごむ**　和の字にして、なぐ、やはらぐ、などいふに同ト。○**なごやかに**　和の字にして、おだやかに落ち着く樣をいふ。

なりはひ　生業の字にして、家業、渡世、活計等に同ト。世を過ごす業なり。

なべて　並の字にして、概して、一通りなどいふに同ト。

なよびか、なよよか、なよやか　共に其の意同ト。やんわり、しなやか、ぐんにやりさやはらか、などいふに同ト。なよ〳〵したる體なり。

なべに　並の字なり。につけて、と共に、につれて、などいふに同ト。

なづむ　滯又泥の字にして、一方にのみかゝはる、滯る、などいふに同ト。

なづさふ　なづむの義にして、馴れそふ、親しくなつむ、水につきしたる、などいふに同ト。○**なづさはる**　なづさふが延ばしたるにて、なづむ、親しむ、なるゝなどいふに同ト。○**なりひさご**　生瓢の字にして、へうたんなり。

なじかは　なにしかはの省かれたるなり。いかで、いかにして、などいふに同ト。

ならく　奈落の字にして地獄のことなり。○**なごり**　餘波、名殘の字にして、すべて何事にても過ぎ去りし後に、尙ほ其の氣の殘れるをいふ、跡の殘りといふほんの如し。

なかざし　えびらに盛りし矢をいふ。儀式の時には、えびらの左の方に二筋の矢をさす。之をうはざしといふ。多くは雁又、或は鏑箭の二種を用ひ、羽四枚をつくといふ。

なす　似たる義を示す詞にして、の如き、のやうにある、などいふに同ト。「川なす塞」「山なす功」の如し。○**なぎさ**　渚の字にして波のうち寄する所、乃ち浪うちぎはをいふ。

なめげ　無禮のこさなり。○**なげし**　長押の字にして、鴨居の上、又は敷居の下に横に亘す木をいふ。後世は主として、上なるものをいひ、下なるものは、下なげしといふ。

なこそ　勿來の字にして、來るなといふ意なり。「な○○そ」の所を參照せよ。

なき人のかたみの野べの草まくら云々　なきたのうせにし、この河倍野に旅寝をすれば、昔の夫のことのみ夢みられて、鞠に涙のふりかゝるとなり。草まくらにしちなみて、しちつゆさいへるなり。

なかばは泉に歸す　和漢朗詠集に「往事茫茫都似夢、舊遊零落半歸泉」さあり。○なまめかし　優美といふに同じく、あだめきたるをいふ。

なほざりにみるめばかりをかり枕云々　たゞ徒に見るばかりに枕をかりよせて拜借し、暫し、我が打ち臥したるのみなれば、かくも、わが枕にしたりさて、人に決して語ることは出來ぬゆゑ、枕に向ひていひたるなり。みるめに見るめと、水松藻とかけ、かり枕に刈と借とかけ、おきつに、所の興津と、沖津とかけたり。

なく〳〵出でしあとの月影　新古今集に、「ことゝへよ思ひおきつの濱千鳥なく〳〵出でしあとの月かげ」とあるによれり。

なげのとすんじたり　なげは無風の字にして、物ほのぼのなり。○なにおへる春花よりも　花の都といふより、名に負へるとばいへるなり。

なさかの海の玉藻　なさかの海は、霞ヶ浦の下流をいふ。

なまふがう　生不學なり。○ながむ　見目にて、ぼんやりと、見やるをいふ。○ながうたの座主　吉水僧正のことなり。吉水僧正、「さてもいかにわしの御山の云々」といふ歌をさして、かの長歌よみたる山の座主といへるなり。

なれ〳〵て見しは名殘の春ぞとも云々　數多の年月、花の下かげに立ち馴れて、殊に、過ぎに〳〵春に見し馬には、こゝが名殘の春ぞと、何さて知るべきか、又來春にも見ることを得べしと思ひしに、もはや、再び、見ることを得ぬやうになれりと、古水に、名殘なをしみしなり。

なほしゆえあらで云々　かやうの物を、持つて來る人々に、そのまゝ、だまつてもをられず、いさゝかの、持ち合せ物を以て、其の厚意を報いさせたりとなり。

らの部

らせいた　羅背板の字にして、古の四洋の毛布なり。こゝろに似て物厚く毛剛く織目見ゆ。

らうずる　らんとするなり。仕らうずるは、仕らんとするなり。

らし　類像の助詞にして、さうなの意なり。

むの部

むざと　むげにと同じ。惜しまずに讀一杯といふ意なり。

むげに　無下の字なり。ひたすらに同じ。どんと、一概に、全く、一向に、などいふに同じ。

たれども、舟中のことゝて、充分の報ゆべきものなかりしため、酒食も絶えず、眼はしきやうなれども、自然とあかぬ所ありて、まけ劣りする心ちがして、少しも眼はしく思はずとの意なり。

なき御かげにも　亡父遺墨の墓にもなり。

らうがはし　みだりがましきをいふ。○らち　塔の字にして、矢來といふものなり。○らっふれんや　拉弗來寫の誤なり。

むらい 無禮の字にしてぶれいのことなり。

むづかる 憤の字にして、小兒のぢれて鳴くことなり。

むづからせ むづかるを延ばしたる詞なり。

むづかし 煩しきことなり。

むなてにとなにおぼしけむ伊吹山云々 むなては空手にしてすでに同し。いぶきは口より息を送り出すことにて、こゝは、伊吹山にて妖神乃ち白き猪がいぶきより大氷雨をふらしたるをいふ。大意は妖神がかやうにいぶきより大氷雨をふらするものを、日本武尊は何故空手にて伊吹山に登りたゞちう、この事は更に御存じのなかつたのであらうかといふなり。

○むすぼる 結の字にして、自然になるをいふ。又氣がふさぐことをいふ。

○むすぼゝる むすぼるを延ばしたる詞にして、くつたくすることなり。

○むすぶ 掬の字にして、手にて水をすくふことなり。

○むねと 宗徒の字にして、おもだちたるものなり。乃ち、むねは主の意にして、さは綱係詞より借りたる字なり。

むかしのふり 昔の風、昔のすがたなどいふに同じ。

むしろ 簟、席の字にして、編みたる數物なり。又、酒宴の席などをもいふ。

むらさめ 村雨の字にして、時々強くふる雨をいふ。白雨に同じ。

むとく 無德の字にして、品位を失へることなり。又見たてのなさことなり。

むくつけし むくゝしくとして恐しきなり。又、きみがわるい、かぐるしい、などいふにも同じ。

○むかばき 專ら馬に乘る時脛に着くるものなり。獸の毛皮にて製し、長さ三尺六寸あり。

むく犬のあさましく云々 むく犬とは、毛の疎に長く生えて、垂れ下りたる犬をいふ。乃ち、むく犬の甚だしく老いて、骨ばかりにやせ衰へたるなり。

むかへ講 古事談に「迎講者惠心僧都始給事也、三寸小佛を、膝足の上に立て、膝足の足に結付けて、引き寄せ引き寄せて泣き給ひけり。寛印伊奉それを見て、知發して、丹後迎講なば始行云々」とあれば、佛を迎へて講を催すことならん。

○むつき うぶぎをいふ。おしめをいふは誤なり。

むかしたれ炭やく烟云々 大坂の高津は、古、仁德天皇の、三年間、租稅をゆるし給ひけるより、民のかまどもにぎはひて、烟も繁くたちそめしが、この片田舍なる高津は、誰か炭をやきはゞめて、かくは、烟のにぎはしく立ち上るやうになりしぞと、戲半分にいひしなり。

○むつかしげなる夜 氣味わるそうな夜なり。

○むかし覺えて 今樣のなかしきにあらず、古代めきて、上品なるをいふ。

○むかしの枕さへ 篤家さかはしい枕をいふ。

むすぶ手ににごる心をすゝぎなば云々 この水を手にすくひとれば、必ず濁るならんが、其の如く濁る心を、すゝぎ捨てゝ仕舞ふたならば、うき世の中の夢もさめ、誠の道をさとることが出來るならんと、醒が井の水にことよせて、よみかけしなり。

○むかしの人の歌 むかしの人といへば、篤家の如く聞ゆれども、この歌篤家の歌集に見えずして、阿佛尼のよめる歌なること明なり。されば、この所の文章は、何かの間違ひなるべし。

むなぎにみち、牛も云々 青鰻の多きを形容する詞なり。柳子厚の文に、「隨女通の書は、處れば則ち棟に充ち、出づれば則ち牛に汗す」とありたるより出づ。

むかひ奉りては 公に對し奉りてはなり。

むかしだにしづむうらみを云々 今まで隱岐國に、遷され給はれし御身も、今日、淀の立ちかへるが如くに、都に立ちかへるを見れば、實に

譯く有りかたきことであるさなり。おきの海は、隱岐物に、うちみなびきの置きなかれたり。

う の 部

うづみはつ 埋れて仕舞ふなり。**○うつくし** 愛の字なり。いつくしの轉ト。たるものにて、美しく愛すべくあるないふ。かはゆらしい、愛らしい、などいふに同ト。**○うつくし** 美、艶、麗の字なり。愛すべくあるものないふ。又心のたけくしていさぎよきなもいふ。**○うれたし** 慷慨の字なり。うれいたしの義にして、うれはしきないふ。むれんな、つらい、どうよくな、心配らしい、などいふに同ト。

うみづら 海面なり。**○うるはし** 麗の字にして、うるほはしの轉ト。うつくしい、親しい、中がよい、愛らしい、きっさしている、などいふに同ト。

うべ 宜の字にして、げにさもあるべきないふ。道理、もっとも、なるほど、などいふに同ト。

うつろふ 映の字にして、盛の過ぎて色のさむるをいひ、散るなもいふ。又影光などのうつるなもいふ。**○うちつけ** 打付の字にして、さつきやく、そつとに、にはかに、ふと、などいふに同ト。**○うるむ** 潤の字に直接にさしせまりたるないふ。**○うるむ** 潤の字にして、透明ならず盛りあるないふ。又うれひをふくむなもいふ。

うけかふ、うべなふ 諾の字にして、心に引き受け承知するないふ。うけあふ、承諾、うけひくなどいふに同ト。**○うたかた** 泡沫、泡飛の字にして、水の**○うらゝか** 麗の字にして、しづかに伸ったりしたるないふ。の**○うなづく** 點頭、又頷の字にして、承諾する時首を前にふるないふ。乃ち合點することなり。

うにこおる 英語の轉ト。て日本語となりたるものにして、一角の字なり。非海に產する海獸にして、二本の牙あり一本は長く一本は短く質堅くして象牙の如く藥用に供せらる

うたて 轉の字にして、うたゝより轉ト。たる詞なり。へんな、いやにむだやがならぬ、ふしぎに、いよ〳〵、ますます、などいふに同ト。又世の常ならでありやしくむだやがならぬなもいふ。

うちふるまふ うちは接詞にして其の意輕く、單にふるまふといふに同ト。

うづくまる 蹲の字にして、獸などの前足たてすわるないふ。又、人の足を折りてゐるなもいふ。**○うまご** 孫の字にして、まごのことなり。

うながす 促の字にして、さいそくに同ト。**○うとむ** 疎の字にして、おろそかにす、したしまず、いみきらふ、いやに思ふ、などいふに同ト。

うしろめたし 後目痛の字にして、うしろめいたしの意かれたるなり。後の事の心にかゝるないふ。ふあんしんな、うさんな、きがゆるせぬ、きにかゝる、などいふに同ト。

うちてしやまむ 征伐して後にやまふなり。

うきたることにおほす ふは〳〵して、そらごとのやうに思ふなり。**○うはべになづまず** うはべなかざるこさにのみかたむかずといふことなり。**○うとし** 疎の字にして、親しからぬ意なり。又、よく知らぬにも用ふ。**○うとくし** うとしなる所れたるものにて、きはめてうとしきなり。粗忽なるにもいふ。**○うちあはぬ** 不打合の字にして、雙方より相打ち合ふの反對なり。又、あきたらぬ、不滿足など、いふに同ト。

うつさる 撰遣するなり。**○うつくしみ** 愛、又寵の字にして、いつくしみに同ト。ものを愛することないふ。あはれむ、たいせつにする、などに同ト。

うごめく 蠢の字なり。動くの義にして。小虫の動くやうに見ゆる意なり。やゝうごく、

いさゝか動く、もぢ〳〵、などいふに同じ。○うへ　上の字にして、主上のおんこさをいふ。○うれへ、うれひ　憂、愁の字にして、心配するこさなり。なげき、○うちぎゝ　打聞の字にして、單にきくさいふにも同じ。○うちぎゝ　打聞の字にして、單にきくさいふに同じ。又きゝて書き○うまい　熟殿の字にしつけたる歌などをもいふ。○うつく　盧の字にて、こゝろよくれむるをいふ。ゆくすいさいふに同じ。

うつはぎ　空蟬の字にして、おしはぐなり。

うつりゆきて　うつろひゆくなり。

うそぶく　嘯の字にして、口をすぼめて音を出すをいふ。又、空を仰ぎて吹ゆるをもいふ。嘯ぶてば詩歌を吟するをもいふ。

うけず顔、うけぬ顔　不承知顔なり。

うすきりぶ　薄切斑の字にして、切斑は鷹の羽の斑の上下黑く、中間の白きものにして、矢には ぐ時の羽なり。○うつせみ　現身の字なり。この世に現存する身をいふ。○うつせみの世　現存の世なり。

うつせみ　空蟬の字にして、蟬のぬけがらなり。せみがらさいふに同じ、轉ぶては普通の蟬をさしてもいふ。○うとましからぬ程　うとくしからぬ程、あいさうがつくる程、などいふに同じ。

うたゝねの枕の上にきはまる　うたゝねして夢魂を世外に遊ばしむるをいふ。うたゝねさは、ころびねなれども、こゝは單にねるさいふに同じ。

うはざし　「なかざし」の所を見よ。○うづみ火　灰の中に埋めたる炭火をいふ。○うらうへ　表裏、反對の字にして、物事の互に相違

ちひて全く其の趣を異にするをいふ。乃ち、うらはらさいふに同じ。

うゐらうぐすり　外郎藥の字にして、相模國小田原より出づる有名の霊藥にして、透頂香（トウチンカウ）ともいひ、黑色方形の藥なり。能く痰を治し、昔より今に至るまで廣く世に歡迎せらる。の源は、元の醫部員外郎陳宗敬、應安年中歸化して、筑前國博多において人に傳へたりとて、其の官職外郎を支那音によみて、うゐらう藥さいふなり。この外郎藥行商人の口上を聞くに「拙者親方と申すは、御立ち合ひの中に御存じの方もござりませうが、お江戸を立つて廿里上方、相州小田原一しき町をおすぎなされて、宵物町を登りへむ出でふされば、欄干橋虎屋藤右工門、唯今は剃髪いたして圓齋と名のります。元朝より大晦日まで御手に入りまするこの藥は、昔、ちんの國の唐人、うゐらうさいふ人、我が朝へ來り給ひて、帝へ參内の折から、この藥を深くこめおき、用ふる時には、一粒づゝ冠のすきまより取り出し給ふを、帝より其の名を透頂香と給ひけり。乃ち文字には頂透く香と書きて、さうちんかうさ申す。唯今はこの藥殊の外、世上に弘まり、方々に似せ看板を出だし、いや小田原の、崖俵の、さん俵の、灰俵のと、色々に申せども、平假字を以てうゐらうさ致したは、親方圓齋ばかり、もしや御立合の内、熱海か塔の澤に湯治にお出でなさるゝか、又は伊勢參宮の折りからは、必ず、門邊ひなさるゝな。登りなれば右の方、お下りなれば左側、八方が八棟、表が三棟、玉屋造り、破風には葵に桐のたうの御紋を御紋免あつて、系圖正しき藥でござる云々」さあり。○うねめ　古、後宮にて膳部のことにあづかりし官女にして、郡の少領以上の人の或は姉妹或は子女なり、容貌の美るものを撰びて、諸國より采女司に參らせたる女房なり。日本紀に「凡采女者、貫部少領以上姉妹、及子女、形容端正者」さあり。

うねの野に啼く鶴　古今集に「近江より朝立ちくればうねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は」さあり。蓋しこの歌によるなるべし、うねのうに憂をかれたり。

うら吹く風云々　止む時なしさいふ意なり。後撰集に「あれもおもふ人もわするなありそ海のうら吹く風のやむ時もなく」さあるによれり。

うけばりたるさま　思ふまゝに、何事も身に引き受けて、專らに

するさま　ないふ。○うけひく　承知、承諾などいふに同じ。

うけら　求の字にして、ちゆつ、などいふ草の名なり。

うるまの島　琉球國ないふ。

うひまなびどもの云々　初學の者どもに、學問の導きをなすにて、生徒を集めて教授をすることなりいふ。○うち君　細君といふに同じく、妻のことなり。○うるはしくなりて　容儀正しくなりてなり。○うはぐみて　息をのみこみてなり。

うちしぐれふるさと思ふ　時雨の打ちしぐれふる、其の場の有り樣を序して、やがて故郷（フルサト）の枕詞としたるなり。

うき身こがるゝ藻かり舟　續後撰集に「にごり江にうき身こがるゝもかり舟はてはゆきゝのかげだにも見ず」とあるなりひけるならん。

うちまき　散米の字にして、米をうちまき、惡魔を退治する法なり。

うけ文　命を承りたる由をかける文ないふ。○うなゐ　幼少なる男女ないふ。その結びたる髮の、項居まで垂れたればなり。

うちわたすうら波とほく云々　うちわたすは、遙に望むないふ。乃ち、空の色も、島の色も、一面に綠なる樣ないへるなり。

うつのや村　駿河國有渡郡にあり。今は長田村といひて。其の大字となれり。

うれはしみ　慨はしみなり。

うまびと　貴人をいふ。

うつの山いとさかしけれど　伊勢物語に、「うつの山に入りてわれ入らんとする道はいとくらう細きに云々」とあるないへり。

うまやのをさ　驛長なり。

うみならずたゞよふ水のそこまでも云々　海ならずとも、いさゝかの水にても、清ければ、月は底までも照せり。されば、我れも、心は清ければ、清天白日の身となることもあるべしとの意なり。

うちつけめ　打付目の字にして、俗にいふ、一寸見などに同じ。

ゐの部

ゐなかぶ　田舍振の字にして、田舍めくなり。

のの部

のゝしる　罵の字にして、怒りてしかるないふ。又聲高くさわぐなもいふ。

のどか　長閑の字にして、のどかに、しづかに、おだやかに、ゆったり、などいふに同じ。

うたれ　下人のことなれども。又、人々といふ意にも用ふ。

うおーたーろー　紀元一千八百十五年六月十八日、なほれをん、白耳義のうおーたーろーにおいて、英兵と戰ひて敗走す。○うれ　宋の字にして、槍のことをいふ。○うつたへ　一向といふことなり。

ゐざりいづ　膝行出の字にしてすわりながら膝にてすべり出づるなり。

のりのともし火も云々　千載集に、「夢さめむろの曉なまつほどのやみをも照らせのりのともしび」とあるによれり。

のぞこり　除けてなくなるないふ。

おの部

おほうち　大内にして、内裏、乃ち宮城のことなり。

おほうち山　大内山の字にして、山は添へたるなり。大内に同ト。

おほつかなし　覺束無の字にして、物のはっきりさせざるないふ。又心もとなしの意にもいへり。待ちどほな、しつかりさせぬ、ぼんやり、などいふに同ト。

おごそか　嚴の字にして、威儀正しく厳重なるないふ。

おしなべて　押並の字にして、彼れも是れも異りたるものを取り合せて全體にいふ語なり。押し並べて、いったいで、おしくるめて、などいふに同ト。

おのづからのもの　天然自然に出來しものなり。

おいてをや　おいては猶更のことであるといふ意にして、上には、必ず、況んやの詞あり。「況んや人に」、などの如し。○おぼろげに　朧氣の字にして、十分にたしかならず不分明なるないふ。又おぼろげならずといふ詞を略してもおぼろげにといふことあり。ぼんやり、ひさゝほり、たいていでない、などいふにおなト。

おほんあと　後跡なり。

およびさして　およびは指のことにして。指をさしてなり。

おひとしおひたる　生ひさし生ひたるにて、生ひてある全体ないふ。

○おもはゆげ　面覩の字にして、顔を合はするに耻かしきなのろはせ奉る　のろふことは、まトなひなどして祈るないふ。

い。○おきて　掟の字にして、動かざるやう物を定めおくなり。

おもゝち　面地の字にして、内心の顔に表れたるやうすにつきていへり。顔付きといふが如し。○おもひで　思出の字にして、前ありたることを思ひ出して心を慰むることなり。○おとがひ　頤の字にして、下顎のことなり。

おどろくし　おそれ驚くべくあることなり。仰山なといふ意にも用ふ。

おこと　御事の字にして、おんみ、あなた、そなたなどいふに同ト。親みていふ時に用ふ。

おもむけ　趣の字にして、ことわけ、主意、やうす、などいふに同ト。又さしづといふにも用ふ。○おふゆなし、おほゆなし　頁氣無の字にして、身の分に過ぎて堪へがたきないふ。不相應などいふに同ト。

おもてかあらん　面目があらうかなり。

おこせて　遣はしてなり。○おどし　緒通の義にして、鎖の金と金とをくさり合はせたる糸ないふ。其の糸の赤きを緋おどし、黒きを黒糸おどし、などいふ。

おもなく　面目なくなり。○おまし　御坐の字にして、主上などのおはします所なり。○おのがさまくく　各々自らなす種々のことなり。○おふる　おるといふに同ト。

おとゞ、おほきおとゞ　大臣のことなり。

おほえ　上の御思召、世間のおもはく、評判、名譽などいふに同ト。

おほだから、おほみだから　國の寶といふ義にして、人民のことなり。○おほす　生の字にして、生長せしむる、はやす、などいふに同ト。○おもひあがる　思上の字にして、きを高くもつ、驕慢の心を生ず、などに同ト。○おばしま　欄杆のことなり。

おのがじゝ　己自身の字にして、めんくく、それぞれ、てんでに、めいくの心

まかせに、などいふに同じ。○おほみき　おみきに同じ。酒のことなり。

おそろしき山ならねど梟の聲をあはれむ　「山深みけぢかき島の音はせで物おそろしき梟の聲」といふ歌の意なるべし。

おれば　おれのなり。

おろし米　下米の字にして大饗の殘りものを下賜せられたるをいふ。

おほのか、おほどか　ゆるやか、おほやうな、さらりとしてなるおほざっぱなどいふに同じ。

おこなひ　行の字にして、佛の道を修むるをいふ。

おりゐの帝　上皇の字なり。古、天皇の位を皇太子に讓りたる後を上皇といひたり。上皇を詞やさしくおりゐのみかどといふ。又上皇の佛道を修め髮を削り玉ひしを法皇といふ。

おそろしといはむも世の常なり。むそろしいといふ詞は、世の普通の詞にして、他に何とかいひたいけれども、どう言つてよいか實にいふに言はれぬ程恐しといふことなり。○おくる　後の字にして人の後になるをいふ。

おもひには道の草葉のよも枯れじ云々　一首の意明なり。おもひのひに火をかけていひ、其の火を以てよし草葉をやくにしろ、涙が雨の如くにそゝぐを以てかれはせぬといふ所、いと面白し。

おほみことともちのつかさ　「太密の帥」の所に出づ。

おいさらぼふ　老い衰ふるをいふ。

おもてぶせ　不面目、不外聞、つらよごし、などいふに同じ。

おもへ世は何の暇かあら小田に云々　荒小田に、すきかへし〳〵して居る、農夫の苦勞を思へば、安閑として、居る暇があらうか、

かへすがへすも百姓の安からぬ身を思へとなり。あら小田のあらは、暇があらむ荒小田と係りたるにて、田といへるよりかへすがへすつゞけたるなり。

おもひつきて　有りがたく思ひてなり。

おきな、おうな　老人の男と、老人の女となり。

おもだかおどし　澤瀉藏の字にして、二色の糸を以ておどすをいふ。一色は地色にして一色は澤瀉の形の如く上狹く、下廣く三岐の形を、鎧、草鞋などにおどす。其の色は一定せずして隨意なり。○おなじつら　同列の字にして、連中などいふに同じ。

おめる　かしこまって居るなり。○おちゐぬ心　落ちつかぬ心をいふ。

おほやけときこゆとも云々　たとひ院の兵を動しゝと申せばとてそは表面の事にして、決して御心づからの義にあらず、他に之を企てたるものありてならむとの意なり。○おひ風　女房の後より追ひて吹く風にして、自然と、たき込みしかほり物を吹き來るをいふ。

おしなべてこのめもはるると見えしより云々　世間一般の春となりし故に、片ほとりの吉野の里までも、世の成り行きにもれず、花が一やうにさき出でしとなり。このめもはるのはるに春をかれたり。

おなじ道　同じき死出の旅路をいふ。

おしかげうつして　紙におしつけて、その形をうつしとるをいふ。○おとたりふみ　意狀のことにして、わが意りの過を、わびて、人に遣す文をいふ。○おふして　生えさしてゐる。

おやのまもりは　古今集に、「たちちれのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ」とあるによれり。

おとゞひ　兄弟、又は、姉妹をいふ。

おぼろなる月はみやこの空ながら云々　朧なる月夜のけしきは、都の空に、少しもかはりはなけれども、かく波のよせ來る夜のけしきは、まだ、一度もきゝしことなかりしが又、このけしきは格別のものなりとの意なり。

おきくち　今いふ、ふくりんなり。

おもひの外の事　山城國綴喜郡有王山の麓まで落ち給ひけるに、藤原季房も三日まで食を絶ちければ、疲れて暫やすらひ給へるを、見出されて捕はれぬるをいふ。

おしすゑたるやうなり　むさへつけて、勢をもたせぬやうにしたりとの意なり。○おほらか　大量の字にして、さつぱり、さらり、などいふに同じ。○おほとなぶら　大殿油の字にして、御殿にともす燈火をいふ。

おほきおほいまうちぎみ　太政大臣をいふ。

おむがしの殿　面白き殿なり。

おほんをよみ見擧ぐれば　おん歌をよみ見上ぐれば なり。○およづけにたるぞ　およづけは、およすけの誤りなり。年たけて、大きくなるをいふ。○おとなひ　響なり。音のたつをいふ。○おくればせ　後れの字にして、他にむくれて、かけつくる意なり。

おのれし酒をくらひつれば云々　おのれは、船頭舟子等をさす詞にて、人をいやしめていふ詞なり。いなむ、ば去んにて、早く船こぎゆかんさいふが如し。

およびもそこなはれぬべし　およびは指なり。あまり日數の多くたちぬれば、之を數ふるに指もためにくたびれぬべしとなり。

おぼろけの願によりて云々　一通りならぬ願によりて、かくは、むだやかの天氣となりしならむとの意なり。おぼろけの下に、ならぬといふ詞を省きたるなり。

くの部

くまする　汲の字にして、くむと言ふ詞を延べたるなり。水を手にてすくひとるをいふ。又人の心を思ひやりて推量するにも用ふ。○くさはひ　すべて物の種となるべきものをいふ。間のあいきう、話のつがまひのいひぐさ、などいふに同じ。

くすし　藥師の字にして醫師のことなり。

くせごと　曲事にして、正理にそむきたることをいふ。

おぼつかなけふは子の日か云々　さても今日は、正月の子の日であるか、松の海にあるべきよしもなければ、せめて、御士であるならば、松の代りに、海松をでも引きたいけれども海士なられば、それもかなはぬとの意なり。

くま　曲、隈、阿の字にして、内部曲りて入り込みたる部分をいふ。「川のくま」「山のくま」などの如し。又「月のくま」などいふくまは、光と影との接しあひたる所をいひ、「人の心のくま」などのくまは、内にかくれて明に知り得られぬをいふ。○くりや　厨の字にして、廚所のことなり。

くづをれ　崩折の字にして、くづれたるいの義なり。ひるむ、氣おちがする、臆するなどいふに同じ。○くりびき　操引の字にして、軍勢を次第に引きあぐることなり。

さないふ。○くろがねのくさり　鐵のくさりなりといふ。

くすしき事　不思議にしてあやしむべきことないふ。また、究屈に思ふことにも用ふ。○くもりみはれみ　曇りて見たり、晴れて見たりなり。○くらづかさ　藏司の字にして、內藏寮の一名なり。官中の金銀、珠玉等、すべての寶器をつかさどる役なり。○くさ〳〵　種々なり。

ぐし　髮のこさなり。○くちきがき　やき筆にてかきし禮をいふ、そのやき筆を作る材料は、檜の朽ちんかゝりたるをよしとすれば、かくいふなり。

くまさね　くみ給へといふ意なり。○くゞつ　藏にて袋のやうに作り、漁の得物を入るゝものなり。○くらげ　海月、水母などと書き、形平く丸くして、上は稍ふくれ、下は平なり。○くらべ馬　競馬のことなり。

くちあみも、もろもちにて云々

くちあみは、くちたる網にて、もろもちは、踏持にて、物を二人して持ち運ぶをいふ。意は、大切ならぬものを、大切らしうするといふ、この邊の方言ふるを、この方言をかりて、かの人は定めてよき歌を、よみ出つるならむと思ひたりしに、さもなくて、歌のわろかりし事を、例のおどけごとにて、書きつけたるなり。

くみれのかみなどをも　くみれは、昔ありしものなれども、今は、實物不詳なり、合天井の如きものならんといふ。

や の 部

やがて　軈の字にして、即ち、程なく、其のまゝ、直に、などいふに同ト。

やどり　宿の字にして、家、やど、などいふに同ト。○や　種々に用ひやうあれども、多くは疑ひの時と、反語の時とに用ふ。疑のやは「家來筋のものにてやあると問へば」、「ありや」、「なしや」、などの如く、反語は「月やあらむ」、「人やあらむ」、「鳥やなく」、などの如し。

やは　反語にして、或る事がらを其の裏面よりいふに用ふる關係詞なり、「淵やはさわぐ」は淵がさわぐか、決してさわぎはせぬ。「待つ人やはある」は、待つ人があるかな決してありはせぬなり。

やつす　俏の字にして、物をやつさしむるをいふ。又、風俗醜度をふくも、あしくも變ずるをいふ。○やつる　窶の字にして、さま形の痩せ衰へたるをいふ。

やつがれ　僕の字にして、謙遜して、自分で自分の身をさしていふ代名詞なり。

やごとなし、やんごとなし　無止事の字にして、おもく〳〵しい、よん所なし、各別な、もだしがたい、貴い、普通ならぬ、などいふに同ト。

やう替りて　樣子ちがひで、風がはりで、などいふに同ト。

やう　樣の字にして樣子なり。○やをら　そつと、靜になどいふに同ト。

やつ〳〵し　樣をいふ。

やなぐひ　胡籙、箙簿の字にして、矢を盛りて背に負ふものなり。平たきを平胡籙といひ、筒の如きを靈胡籙といふ。後の世にえびらといへる矢を盛る具は、やなぐひより進化したるなり。

やすらふ　休の字にして、やすむといふ詞を延ばしたるなり。

やはらぐ　物をやはらかになすことなり。「中やはらぐ」とは中よくするをいふ。

やまと心　我が國の學問に精通せるをいふ。又、時としては、我が國民の特異なる節操をいふ。乃ち、日本魂なり。○やまと文　日本書紀のことなり。

やつをふみ　やつをは、八岑の字にして、數多重れる山々をふみ越えて行くことなり。八は、彌の意なり。○やすらかにゆひて　安々とこしらへてなり。

まの部

またゝき　目ばたきすること、又ひらめくことも いひ、消えかゝりつゝながらふる火をもいふ。

○まち〳〵　區々の字にして、樣々なるをいふ。

まに〳〵　隨の字にして、まゝにの義なり。勝手次第、お心まかせ、したがつて、などいふに同じく、物事の成り行きにまかせおくなり。

まのあたり　目前、當坐、さしあたり。などいふに同じ。

ます　坐の字にして、居る、有り、などいふ敬語なり。

まします　坐の字にして、ますの一層敬意を表したるなり。おはしますと同じ。

まどし　まづしに同じ。

○まし　推量の關係詞にして、むの轉じたるものなり。やう、ませう、などいふに同じ。

○まじ　働きを推測して打消す關係詞なり。まい、い、などいふに同じ。

○ましら　猿のことにして、梵語より來れり。ましこ、ましら、などいふ。

○まさねば　在らねば、居ねばの敬語なり。

まさなき心　正無の字にして、むほふな、正体ない、わるさうな、むちうな、などいふに同じ。

○まつろふ　服順の字にして、順なる方にしたがふなり。

まかづ　罷出の字にして、朝廷より退出するをいふ。又、先方よりこちらに來るをもいふ。

ますらを、ますらたけを　丈夫、益荒猛男の字にして勇士のこなり。

○まめやか　忠實の字にして、まことめに、ほんきに、眞實に思ひこんだ体で、などに同じ。

○まだきに　夙の字にして、早くから、といふことなり。曉め、夙に、期よりも急ぎて、早くより、などいふに同じ。

まとゐ、まとゐのむしろ　まさゐは圍居の字にして、一坐に集りて圍く居並ぶをいふ。まさゐのむしろとは親しきものどもの集會せる席をもいふ。

まみる　塗の字にして、まぶるゝことなり。

○まろ　麿の字にして、古、清麿の如く人の名の下に付けし詞なり。後に、寶子の名の下に牛若まろの如く付けたり。

まろ　麿の字にして、おのれ、われ、などいふに同じ。

まうと　眞人の字にして、きさま、そこもと、あなたなどいふに同じ。

またし　全の字にして、眞足の義なり。欠げたる所なきをいふ。又またしとせずとつゞきて、不足に思はぬと解する所あり。

○まほし　「聞かまほし」、「見まほし」、「行かまほし」の如く連りて求むる心をあらはす。欲すの意なり。

○ますみの鏡　澄眞鏡の字にして、くもりなく、すみわたりたる鏡をいふ。

○まがごと　禍事、曲事、凶事、惡事、枉言などの字にして、其の意は、各漢字の如し。

まゝこだて　白と黑との碁石を、黑二つ、白一つ、黑三つ、白五つ、黑二つ、白一二つ、黑四つ、白一つ、黑一つ、白三つ、黑一つ、白一つと、各十五づゝ、三十を並べ、始め並べし黑二つの最初の分より、數へて十に當る石をとり除く一つの遊びなり。

まさならも　正無の字にして、まさなくもの音便なり。宜しくなしといふ意なり。

まぢかく榮えし云々　近來榮えし云々なり。

まうづ　詣の字にして、來るといふを敬ひていへるなり。轉じては、參詣することをもいふ。

まかりあがりて　罷り揚りての字なり。罷は助勢にて、添へたるまでなり。揚るは、馬のいたく嘶りて、飛ぶさまをいへり。

○まめ人　忠實なる人をいふ。

まどほになりて　間遠になりてにて、疎遠になるをいふ。

まかせられむとて　水をひかせられんとしてなり。

ますほの薄、まそほの簿　同一の薄なれども轉じて、

かく二樣の名にわかれたり。赤き糧の糟をいふ。

まなく時雨のもる山にしも　まなくは、絶えまなくなり。もる山は、古今集に、「白露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色付きにけり」とあるによれり。

○まくらの障子　臥したる枕元にある障子をいふ。

まひらに罷預らむ　まひらは眞平の字にして、ひたすらといふに同ト。

○まけじ心　まけまいとの心なり

まよはましをしへざりせば濱千鳥云々　御教訓がおかりしならば、たとひ、一方なちゐ跡なりとも、横道にふみ入るか計りがたかりしかども、かく、御教訓にあづかりし上は、決して、左樣の御心配は、御無用でありますとの意なり。

けの部

まて言問はむ　新古今集に、「筏士よまてことさはむ水上はいかばかりふくるにより」とあり。

○まつばらに見ゆ　つぶさに見ゆるといふ。

○まことしき文の道　誠實なる學問なりといふ。乃ち身を修め家を齊へ、國を經營する實用の學問なり

○ませ　垣のことなり。

まゆずみ　黛の字にして、眉をそり落し、其のあとに墨にて小さく書いたる眉をいふ。

○まが〳〵しく　禍々の字にして、いまはしき事をいふ。

まにらたこの木　桄榔の字にして、幹より枝を出して地中に入る。其の形狀、恰も、館の足を垂れたるが如くなればいふ。

けたる　けさるに同ト。

○けおさる　壓の字なり。けは接詞に

して意なく、氣押さるゝに同ト。其の勢に押されて、まくるをいふ。

けなげに　健氣の字にして、かひ〳〵しくあるなり。神妙に殊勝に、などいふに同ト。

け　氣、褻、食、故などの字にして其の他にも種々の義あり。氣の字は、ものゝいきほひをいひ、けしきをいひ、食物の味又は物の香氣をいふ。褻の字は、つれの衣服なり。轉ト ては、晴がましからず、公ならぬをいふ。「けの衣」といふは乃ち晴衣の反對なり。食の字は、食物にして、「朝け」、「夕け」の如し。故の字は、故の約せられたるものにてゆゑといふに同ト。

○けむ　過去推量の助動詞にして、たであらうの意なり。形容詞に添ふ「善けむ」、「惡しけむ」の如きものは、善くあらむ、惡しくあらむの省約せられたるものにて、未來を想像す。

○けはひ　氣色の字にして、表れたる樣子なり。やうす、ものおと、そぶり、けしき、みえ、などいふに同ト。

○けぢめ　別目の字にして、わかち、區別、などいふに同ト。わいだめに等し。

けやけし　貴の字にして、きはだつ、尤もらしい、甚しい、異樣などいふに同ト。

けふみればきのふの淵はあさか瀉云々　昨日まで淵で深かった所も、今日來て見れば淺くなって瀉となりはてたが、この淵なかたとなしたる原因は沙のみちひで、其の沙のみちたり又退きたりして、日々變化する有樣は、實に世の中のすべての變化の有樣を代表して居るといふ事なり。

けしう、けしく　怪異の字にして、平凡ならず、異樣なるをいふ。樣子のちがったことなり。

○けぢかし　氣近の字にして、ごく近かさうだといふに同ト。

○けさやか　けは接詞にして、さやかに同ト。

けしき　氣色の字にして、樣子、みえ、きざし、有樣などいふに同ト。

けしきづきて　樣子が見えてなり。

○けう　希有の字にして、まれに有ることをいふ。又珍しく不思議な、きみやうな、などいふに同ト。

けいめい　經營の字にして、けいえいより轉じたり。つくり設けて營むをいふ。乃ちしたくすることなり。○けをさめのさうそく　けは褻おさめは納にして晴着、さうぞくは裝束なり。乃ち、うちくにて常着にする裝束と、常には仕舞つて居ぬて、公に着る晴着の裝束となり。○けちえん　揭焉の字にして、佛經の語なり。あらたかに著しくあるをいふ。○けうとく　氣疎の字にして、疎んずべき狀なるをいふ。○けいし　家司の字にして、一家の雜務を掌るものをいふ。

けしからぬ物の所得て　異しかるの打消にて、怪しからぬをいふ詞なるが、轉下ては、異しき樣に用ひらるゝやうになれり。

けんじやう　「勳賞」の字なり。同所を見よ。

けいめいしてあなとだに云々　いけめいは警衛なり。警固して、あたりより、あゝといふ嘆聲さへたてさせぬなり。

けふなれど若菜もつまず云々　今日は丁度、正月の十五日にして、子の日遊びの當日なれど、若菜の名所たる春日野が、わがこぎ渡る湖になければ、つみに行くこともの出來ぬなり。

ふの部

ふりしよ　古世の字にして、昔、古、過ぎし方、などいふに同じ。

ふくつけし　食の字にして、食る心のあるをいふ。ふくどうしいといふに同じ。

ふみわけよやまとにはあらぬ云々　我が日本の書物をも開きでおよみなさい、支那の書物即ち漢籍をよむのみが人の道であるかな決してさやうの物ではない、日本の固有の學問でも隨分人の道もわかれば智識を開くことも出來るとなり。ふみわけよのふみに踏みと書とをかねたり。跡は文字のことなり。昔支那にて、鳥の足跡を見て文字を作りたればなり。○ふくる　眼の字にして、内より外にはれ上がるをいふ。又腹をたつることをもいふ。○ふさはし　釣りあふ、似合ふ、相應なる、などいふに同じ。

ふねとめし湊は川の名のみにて云々　ふねをとむるのは湊であるが其の湊といふ名を持ちし湊川は、今は其の名のみ殘りをりて、川原の小石の上を流れ行く水もなく干上りて昔のさまは少しもないとなり。ふねとめしは湊をいはんための枕詞にして、さゞれは小石なり。湊川は、今は平生水の流るゝことなく、單に川筋のみを存して雨降りたる時にのみ流水を見る。而してこの川は神戸と兵庫との間なる、土手の如き小高き所を流れ、兩市街より川の方高し。故に東海道線道は、この下を通りて山陽鐵道に連絡す。

ふつゝか　不束の字にして、太く丈夫といふことなり。又太く下品といふにも用ひ、無骨、ぶしつけ、などいふにも用ふ。○ふれめく　ばたつく、立ちさわぐ、などいふに同じ。○ふすま　衾の字にして、寢る時身の上にかくるものをいふ。今のふとんのこなり。○ふせや　伏屋の字にして、伏したるが如き貧民の家をいふ。

ぶんたち　おまへたちといふに同じ。○ふしど　臥所の字にして、ねどこをいふ。○ふるほぐどもを　泳歌の草稿や、打聞の類をさしていふ。○ふりみふらずみ　降りて見たり、降らぬで見たりなり。後撰集に「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬のはつめなりける」とあり。

ふゝめるさまに　含めるさまになり。

ふるゝ所の益　書籍を見たるために、多年の非かも改めたるなればなり。「ふるゝ」は、書籍にふるゝかいふ。

ふる川のべの杉の下蔭云々　新古集に「涼し

さは秋やかへりて初瀬川ふる川のべの杉の下陰」さあり。一首の意は、初瀬川の古川野邊は、誠に涼しいことである、この涼しさでは、秋は却りて夏の爲にふるさる、程であらうさなり。水邊は、秋より却りて涼しさの意なり。

こ　の　部

こよなし　無此上の字にして、この上もなき最上ないふ。各別な、かけへだゝりて、此さ彼さたがふ、などに同ト。○**こをもて**　こゝを以てなり。

ことむけ　言向の字にして、從はしむ、服從せしむ、此方に向かす、などいふに同ト。

このわたり　この邊なり。○**ことわり**　理の字にして、道理、理非をわくる、すぢ道、などいふに同ト。

こゝろづかひ　心遣の字にして、心配、氣づかひ、などいふに同ト。

ふなやかたのちりもちり云々　杜氏通典に、「漢有樓公善歌、花令二梁上塵起一」さあり。又、列子に「桑青擁レ節悲歌聲振林下響遏レ雲」さあり。「ふなやかた」さは、船のやれないふ。

こゝろゆく　愉快に思ふこさなり。

こしらへいふ　辭言の字にして、さりなしてなだむるないふ。又すかす、作りかまへてうそないふなどにも同ト。○**こけず**　細くならぬないふ。

こりずまに　以前にこりず猶ほ引きつゞきて改めざるないふ。しやうごりもないさいふに同ト。○**こなた**　此方の字にして、このかたの約ぜられたるなり。身に最も近き所の代名詞なれども、轉ドては汝さいふに用ひ、又轉ドては、自分のこさにもいふ。

こちたし　言痛の字にして、多く煩はしきないふ。甚し、ことゝし、うるさし、仰山な、くだ〳〵し、やかましい、などいふに同ト。○**こゞし**　凝の字にして、物のこりかたまりたるないふ。又けはしき、險阻などさいふにも同ト。

ことそぐ　事殺の字にして、はぶく、省略す、ざっさする、しまつする、儉約する、などいふに同ト。○**こゝら**　許多の字にして、多く、澤山、甚だ、數多、などいふに同ト。

ことゝし　事々の字にして、仰山な、大層な、などいふに同ト。

こともの　異物の字にして、別物などいふに同ト。

ことほぐ　言祝の字にして、言にて祝することなり、ことぶく、賀する、などいふに同ト。

ことわざしげし　事繁繁の字にして、成すべきことの多きないふ。

こしをれ　腰折の字にして、腰折歌の略せられたるなり、腰折歌さは、上句と下句さの意のうちあはぬにて、まづき歌ないふ。又自分の歌を卑下していふにも用ふ。

ことぶき　壽の字にして、祝ひ、賀、などいふに同ト。

ことほし　こひしさいふに同ト。○**ことはゞし**　惡々の字にして、强張りたるものゝ形容にいふ。あらゝかしい、さいふに同ト。

これらの人　日本の人をさしていふ。

こゝにして　幸福にしてなり。

こわづくり　製作の字にして、せさばらひするないふ。

こめらる　被籠の字にして、おしこめらるゝなり。

このたびはかきながすともし　この度の撰にはたさびもれたりさも、それは、腰折なるからだらうさ、益ゝはげみて、爾後をつさむれば、却りて、和歌の上よりいへば幸福にて、決して、うらみさは思はないさいふ意なり。もしほ草は、物を書き集むることにいへば、上のかきながすにかゝりたり。わかのうらみは、和歌

の浦に、和歌の恨をかね、もしほ草の縁によりて、かく物瀬の名所なとり出したるなり。

こゝろの鬼 自分の考より、すべて、おそろしく思ふことなどにいふ。

こゝろに添ふ 心と身と相一致することなり。

こゝろをおく 遠慮すること、又、心をへだつ、不審に思ふ、けむたく思ふ、疑ひ思ふ、などいふに同じ。

○こゝろづきなし 氣にくはぬことをいふ。

○こゝろしらひ 用意、きがついた、氣轉をきかする、などいふに同じ。

○ござんなれ 御坐あるなれの轉化したる詞なり。

こがね花さく云々 萬葉集に、家持が賀陸奥國出金歌さて「すめろぎの御代榮えんと東なるみちのく山にこがね花さく」とあり。

これは三位殿に云々 これはゝ、自分はなり。

こもりづの下にのみ云々 「こもりづ」は、下さい

ふ詞にかゝる枕詞なり。乃ち、皇學は、下におしかくされて、誰一人、知るものなきやうになりきとなり。

このかみ 子の上の義にして兄のことなり。

ことふりたれど、おなじ事云々 源氏物語や、枕草紙などにも、四時變迭のことを、書き記しあれば、今こと新しく、書き立てたりとも、其の事既に、古くなりてあればなり。

○この頃ある人 只今、生きながらへて居る人をいふ。

○ことなる故なくて 非常の事あるに非ざれば、都を遷すが如きことなきを以て、かくはいふなり。

こひしのぶ心やたぐふあさゆふに云々 朝夕に、京都の方のみこひしく思ふわが心は、京都の方に行きもし、又鎌倉の方にかへり來もする白雲に、常につき從ひなりて、絶えず往來してなるとの意なり。

これをみばいかばかりかと思ひ

つる云々 もし爲家が存在して居て、この歌をみたならば、如何ばかりうれしからむ。われは、今、子供の行末を案じくらして死なれたる爲家になり代りて、かくは、うれしなきになき居るとの意なり。

○こちくの調べ 胡竹にて竹の笛、乃ち笛の調なり。

こゝよりは今の道云々 こゝは和歌山なり。

こゝだ貴し こゝだは、幾許、そこばく、などいふに同じく、多くといふ意なり。

ことさめて 興がさめてなり。

○こだま 木靈の字にして、天狗などいふ。

こゝのことば傳へたる人 我が國の詞を傳へたる人にて、通辯のことをいふ。

このあるじの又あるじのよき云々 上のあるじは主人にして、下のあるじは饗應なり。うたておもほゆは、あやしく世の常ならず思ほゆるとなり。

○こゝろにくし 奥ゆかしきをいふ。

え の 部

えせもの 似非者の字なり。すべて似て非なるものをいへり。ふらちものといふに同じ。

えうなき 要無の字にして、無用のことなり

えもいはれぬ いふにいはれぬなり。

えみしの人 蝦夷人の字にして、北海道の土人をいふ。

えせうた 似非歌の字にして、わるい歌をいふ。

えこそ申し出だされ侍らぬ どうしても言

ひ出されませんなり。○えいでえ　曳聲の字にして、物をひく時、一同そろひて、えいと力を入れて發する聲なりふ。

えびら　箙の字にして、やなぐひに同ト。く、箭を入れて背に負ふ器なり。

えならぬ　なみ〳〵ならずなり。

ての部

てうずる　調の字にして、物を新に造ることなり。

てぶり　手風の字にして、風儀といふに同ト。

あの部

あはれ　哀、天晴の字にして。最もいたはしくあはれむべきことなり。不びんな、いとしい、かなしい、などいふに同ト。又、あっぱれといふ所に用ひ又感激することをもいふ。

えもんのかきやう　衣紋、乃ち、衣服の着樣といふことなり。

えぼしのためやう　烏帽子の折り具合をいふ。

えしもこそ　誣ひねとて　種々辛苦してひねり出したる歌を、よしこそ、そんなに、惡るくいふことよといふ意なり。

てーる　箏兒の字にして油なり。

てけ、ていけ　共に、天氣のことなり。

あはれなること　天晴な事、乃ち面白きことなり。

あやめもわかず　あやめは女目の字にして、物の発則、模樣などをいふ。あやめもわかずは、むちやくちやにしてすこしも樣子のわからぬことなり。

あな、あら　感嘆詞にして、嘆息恐怖などの時突然出す詞なり。やれ〳〵、まあ、などいふに同ト。○あはや　感嘆詞にして甚しく驚きたる時に不圖出づる詞なり。あれといふに同ト。○あーち形　綠門の形なり。

あだ　仇の字にして、すべて我れに手向ひする心むけのわるきものをいふ。

あだ　徒の字にして、無益の事をいふ。むだ、といふに同ト。又已れに緣故なきあかの他人をさして、あだ人ともいふ。○ありく　歩の字にして、あるくといふに同ト。

あさぎぬ　麻衣の字にして、幾内より東を仕りていた衣服としたるものなり。

あづま　東の字にして、幾内より東にあたる國々の總稱をいふ。

あだし子　他子の字にして、しは休め詞なり。ほかの子といふに同ト。

あはれまし　憐の字にして、あはれむを形容詞としてはたらかせたるなり。なさけさう、かあいさう、などいふに同ト。○あす　浸の字にして、海川の浸くなるをいふ。又色のさめて薄くなるをもいふ。○あたら、あったら　可惜の字にして、をしいといふに同ト。○あらまし　荒の字にしてあら〳〵しきをいふ。○あらまし　課の字にして、心あて、心たのみ、課算、もくろみ、さきあんト、さきあて、などいふに同ト。○あらましごと　課言の字にして行末の心あてなり。

あだなみにあとは消えても濱千鳥云々　濱千鳥よあだ波のために其の足あとは、はかなくけされて仕舞ふけれども、〃のさやけさへつりは何時までも人の耳にのこりてお前のこさを思はしむるうたの表面の意にて其の裏面には、林

氏よ、多年辛酸を嘗め盡くして、上梓の運に逢へる、御國兵談、三國通覽は、幕府の忌避を蒙りて、鏤版をまで覆たれたりと雖も、其の天下に絶叫せし、海防の意見は、痛く、世人の睡を覺して、今に、其の偉大なる先見なりしことは、世人にすてられはせぬぞとなり。あだ涙は、よせてはかへる定めなき波をいひ、なきさは渚の字にして波のうちよする所、乃ち涙うちぎはなり。さやけさは、さっぱりとして快きことなり。

あやし　怪の字にして世の常ならず珍しきをいふ。異風　下品、いやし、などいふに同じ。

あやしの家　賤しき民の見苦しきへんな家をいふ。

あづまうど　東人の字にしてあづまびとの音便なり。

あしもりの殿人　あしもりは娘名にて蘆守、又足守と書く殿は水下候なり。○あかず　不飽の字にして滿足せぬことなり。

あづまぢの道のはてなる常陸とよめる歌　新古今集に「あづまぢの道のはてなる常陸帶のかごさばかりも逢はんとぞ思ふ」とあり。○あふれもの　大酒のみなり。

あげてそだつ　引きとりて育つるなり。

あとまくらをつくろひ　足あと枕もとをよくさりつくろふなり。○あさる　尋れさがすことにして、望むものを得んとするなり。鳥獸の食物をさがすかもいふ。○あまつさへ　剰の字にして、餘分なるをいふ。其の上、あまりさへ、などいふに同じ。

あさまだき　未明の字にして、朝未の義なり。早朝、夜のあけ方、朝早くなどいふに同じ。○あさまし　淺の字にして、あさはかといふことなり。又あきる、けしからぬ、きようがさむる、おどろいた、などいふに同じ。○ありふ　有經の字にして、世に在りて年月を過すなり。存命、生ながらふ、などいふに同じ。

あさかりけり　あさはかであるといふことにて、けりは過去の意なく「命なりけり」のけりの如し。○あご　吾子の字にして、人又は人の子を親みていふ詞なり。

あや　文の字にして、物の表面にあらはれたる模樣をいふ。はで、工夫、趣向などいふに用ふることなり。○あかり障子　明障子の字にして、今の障子のことなり。昔は襖なも障子といひたり。故に襖障子とあかり障子との區別ありたり。

あつもの　羹の字にして熱物の義なり。汁、吸物などいふに同じ。

あはひ　間の字にして、物と物との間をいふ。又人と我れとの交りの間をもいふ。

あれ出づ　生れ出づるなり。○あえて　肯の字にして、あやかりて、似て、などいふに同じ。又、運命を同じうするものをもいふ。

あきもの　商品の字にして、あきなひすべき品物をいふ。

あらぬこと　非なる事、間違って居る事、などいふに同じ。

あらぬもの　非なるもの、別な物などいふに同じ。

あからめ　他見の字にして、目的ならぬものを見ることなり。目ばなし、わき見、よそ見、などいふに同じ。○あなかしこ　あゝ恐れ多い、あいつゝしめ、あいゆだんするなどいふに同じ。○あこめ　袖の字にして、中古婦人の着たりし衣服の名なり。裾なるも、縮入なるもありきさぞ。

あつらにつよらに　意味の深厚なるをいふ。

あるじまうけ　饗設の字にして、馳走の仕度なり。

あからさま　倏忽の字にして、忽ち、又はにはか、などいふに同じ。又ちよっと、かりそめ、などの意にも用ふ。○あやかる　肯の字にして、おえてに同じ。○あけぼの　曙の字にして、夜のあけ方より朝までの間の少しくなぐらき程をいふ。○あぢきなし　無味氣の字にして、面白くない、興がない、つらい、なさけない、何のかひもない、仕方がない、などいふに同じ。

あくがる、あこがる　在離の字にして、心そゞろにぼんやりとするをいふ。うかるゝ、はなるゝなどいふに同じ。

あかねさし出づる　日の出るをいふ。日の出る時は、あかれ色をして出るなり。

○あそび、あそぶ　遊の字にして、心に愉快な慢ゆることをするわざをいふ。笛をふき三味線をひきなどしてさわざちらすことをもいふ。

あまりの興あれば　まだ心に面白みの殘りがあればなり。

あをにび　青鈍の字にして、青ずみたるはなだいろなり。

あまたくだり　數領の字にして、數そろひなり。領さは一そろひのことをいふ。

あし荻をわけつる國にやあらむ　孝標といふ人の女の書かれし更科日記といふ書物に、「今は武藏の國になりぬ（中略）紫生ふと聞く野もあし荻のみ高く生ひて云々」とあり。これによりて書けるなり。乃ち、これがかの孝標の女のあし荻をわけて通つたといふ武藏の國であらうといふ意なり。

○あげつらふ　論の字にして、すべて物の道理を論辨することをいふ。

あまのがはほしあひのそらはかはらねど云々　天の川にて、牽牛、織女、兩星の會合の空合は、毎年、かはりなければ、左程、戀しきことはなけれども、主上、御在世のなり、毎年なしゝ、星合の遊びを考へ合はすれば、實に、主上の御事のみ思ばれて、かなしみに堪えずとなり。星合とは、七月七日の夜、牽牛、織女の兩星、天の川の傍にて、會合すとて、この夜、兩星を祭るの遊びなり。

あめつちのまことの中にあれ出でゝ云々　春夏秋冬、其の序を好らざるは、天地の誠の道であるが、今、この誠の道を、て滿されたる、天地間に生れ出でたる以上は、人の人なる、誠の道をふみ行はで、外の邪道を、ふみ行くこと

があらうか、決して、そんな事はない、必ず、誠道をふみ行ふといふ意なり。

あまた摘まるゝ　種々昔の事を忍ばるゝものがあるといふ意なり。上に忍草といひたる枕下に摘むといふ草に縁ある詞を用ひたり。

あがまふ　祟の字にして、あがむを延ばしたるなり。たつさぶ、うやまふ、などいふに同じ。

○あさぼらけ　夜のあけがたの時をいふ。

あさぢ　淺茅の字にして、かやのまばらに生えたるをいふ。

あさぎよめ　朝の掃除をいふ。

あすか川のふち瀨云々　飛鳥川（アスカ）の淵瀨の如く、常に一定せずして、代り易き世の中であればなり。飛鳥川は、大和國高市郡にあり。古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる」また、「飛鳥川淵にもあらぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける」などあり。

○あまつひつぎ　天孫、天津日嗣など書きて、天皇の御位をいふ。

○あいなだのみ　あてにならぬ頼み事をいふ。

あまぜ　尼前の字にして、尼御前といふに同じ。

あへなむとおぼす　敢へて爲んと思ぼすにて、強いて其の事をせんとするなり。

○あがき死にぞ死ぬ　もがきくるしんで死ぬるをいふ。

○ありぬべき所ならば　住居の出來る所ならばなり。

○あふなく　ねんごろなることをいふ。

あざみたり　あさはかなりと、あざけり笑ふなり。

あやめふく頃　陰曆五月五日に、あやめを葺りて、軒端にふくことの故事あり。乃ち、五月五日頃をいふ。

○あぢきなきすさび　面白くもなき、つまらぬ遊び半分の事をいふ。

あなかしこよこなみかくな濱千

鳥云々　あゝ慨しめよ、我が家に久しく傳はり來れる歌道の一方ならぬことを思はゞ、決して外の道にふみまよひてはならぬぞとの意なり。よこなみがくなに、精波なかきわくるなと、横道にふみ入るなとの二つをかれ、濱千鳥に歌道をかれたり。

あだにのみ涙はかけじたびごろも云々　身こそ分るゝと見ゆれ、常に、心は添ひ行きて立ちかへる程なれば、無益になきかなしみて、旅衣に涙はかけまいとの意なり。ほどは、道の程の意なり。心のゆきてに、常にわが心は、母の旅路の空に行きてに、母の心願の成就して、心のはれゆくをかれ、たちかへるにも、わが心と、母の身の立ちかへるとをかれたり。

○あざり　阿闍梨の字にして、僧の師となるべき人の稱なり。

あふ坂とたのめてぞ行く　又逢ばんと約束して行くといふ意に、あふ坂の關をかれたるなり。

○あり明　月はまだ有りながら、夜のあくるといふ。

○あらがね　鑛物のことにして、地中にあるものなれば、地の枕詞として用ふ。

○あしたづ　蒹鶴の字にして、葦に鶴といふに同じ。

あつしれて　危篤になりてなり。

あしつゞよりもうすく　あしつゞは葭の字にして、葭のよの中に、うすやうのやうにてある薄きものなり。

あられふり鹿島崎　次のかしこまりの序にしてあられふりは、鹿島の枕詞なり。

○あぐら居　安坐の義にして、胡床によりて居ながらなり。

あしの浦をめぐり　あしの浦は、安房國朝夷郡の海邊なるべしと。

あしなくして千里を走る　事文類聚に、房玄齡在二秦府一、典二管記室一、晝衣、桑硯駐レ鳥、立成、初無二草草一、未嘗二靜坐一、曰、此人深識機宜、足レ堪二委任一、每爲二我見一陳レ事、必會二人心一、千里外猶二對面語一、とあるより出でたり。

ありしながらの國ぶり　神ながらありしまゝのすぐれたる國風といふ意なり。

○あふちの木　楝の字にして、夏の頃、五瓣なる、小さき紫色の花を開く。

あへなむとおほやけも云々　堪へなむにて、幼きものどもは、つれて行くことをこらへて、許してやらむとなり。

あめのしたかわけるほどのなければや云々　雨ふりくだる天の下には、かわける時がないから、それで、着たる濡衣のかわきやうもなしとの意なり。ぬれぎぬとは、無實の罪をいふ。

あやなし　すぢみちのたいぬをいふ。

あいりす、ぐりー、ほーんど　「くりー、ほーんど」は敏捷なる、犬の種族にして、「あいりす」は「あいるらんど」なり。

あさりあるく　求食行の字にして、鳥獸などの食物をさがしまはるをいふ。

ありそなみ　荒磯涙の字にして、あらいそなみの、はぶかれたるなり。

あめの下おほへる雲のひまとめて云々　天が下は、黑雲におほはれて、皇室の光りを見さむることも、かたき世の中なるに、早くその尊奉すべきを辨へて、皇室に心をむけし光圀卿よとの意なり。花あふひは、唐葵とも、日まはり草ともいひ、其の花、日に向ひて、常に廻れり。且つ、德川氏の紋章、葵なるを以て、かくは花あふひかなといひて、光圀公をきかせ、公は、皇室を思ふ情最厚なりければ、花葵の日に向ふにいひかけて、日かげに向ふといひたるなり。

あがたの四とせ五とせ　あがたは、國司の任國をいひたるにて、其のあがたの下に、任務といふ詞をふくめたるを省きたるなり。國司の任は、四年なれども足け、五年めにかへれば、四とせ五とせとはいへるなり。

あざれあへり　戯れあへりなり。あざれは、魚肉などの腐るをもいひて、そのあざれを防ぐには、海水の功あるものなるに、海のはたにてあざれたりと、兩義ともたせておどけたるなり。

あを馬を思へどかひなし云々　陰暦正月七日、禁中にて、青馬節會とて、天皇豊楽殿に出御し玉ひて、馬を見玉ふ儀あり。これ、青馬は、青陽の氣を導くなどいへる說よりおこれり。後には、白馬を引くことゝなれども、猶ほ、アヲウマとよむは、古の詞の殘れるなり。さて、さるめでたき節會にも、逢ひ申すことを得ず、せんかたなければ、たゞ、波の白きをのみ見て、思ひやるとの意なり。

あさぢふの野べにしあれば云々　我が住む所は、淺茅の生たひる野邊にてあれば、池といへども、水もなき所にて、つみたる若菜なりとの意な

さの部

り。○あざらかなるもの　新鮮なる魚なり。

あがれのところ　今の道分といふに同じく、道の數多に分れて旅人の四方に散ずる所をいふ。

あはれてふことをあまたにやらじとや云々　最早春は過ぎ去りて、今ははや四月になつて仕まふたのに、ひとり櫻の花のさくといふは、實に珍らしい事であるが、これは、あゝ、あはれ見事に咲きたりなどいふ評判を、他の花にやらじと思ひて、かくは、わざと、四月になりて咲いたのであらうといふ意なり。咲くらむにさくらかくしたり。

さるものにて　然者而の字にして、言はずとも勿論のことなりといふことなり。又、のけてといては、それはそれにしてなどの意にも用ふ。○さやか　分明の字にして、はれやかに、さだかに、などいふに同じ。○さるは　然者の字にして、さあるは、しかるはなどいふに同じ。○さばかり　然許の字にして、それほど、それぎり、その位、などいふに同じ。○さはいへ　然者言の字にして、さはいへなり。○さめ〳〵　潸々の字にして、涙をばら〳〵とおとすかたちなり。○さゝやかなる藝能　ちよつとした つまらない藝能なり。○さも　其の通りに、さても、どうなりとも、實に、眞底などいふに同じ。

さらぬだに、さらでだに　しかあらでだにの省約せられたるなり。たゞさへ、さうなうでさへ、さなきだに、などいふに同じ。

さながら　のこらず、そのまゝ、みんな、さりながら、などいふに同じ。

さまよふ　彷徨の字にして、行き迷ふことなり。又うめき、なげき、などいふにも用ふ。

さすらふ　流離の字にして、寄り所なくおちぶるゝことをいふ。さゝろを離れて困る、身のよるべがない、などいふにも用ふ。○さへ　拔萃の關係詞にして、一物ある上に又一物を加ふるの意なり。「雨ふり風さへ吹き添ふ」などの如し。○さだか　定の字にして、はつきりと、たしかに、分明に、しつかりと、などいふに同じ。

さいつころ　先頃の字にして、さきつごろの音便なり。さきだつて、先日、などいふに同じ。○さ　然の字にして、しかの略せられたるなり。前の語を受けて然りといふ意をあらはす。○さるさま　然るさまの約せられたるものにて、よきやうにといふに同じ。○さかし　賢の字にして、かしこきなり。利功なといふに同じ。

さうなし　左右なし、又變なしにて、躊躇せずたゆたふことなきをいふ。又二つとなきさまをいふ。

ことなもいふ。○さもありなむ　しかもありなむにして、さやうにあるだらうなり。○さかし　喰嗔の字にして、けはしきをいふ。

さゝ蟹の糸の振舞いと殊勝に見ゆ　古事記に「我がせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のおこなひ今宵しるしも」とあり。この歌の意をとりて、我が來べき前兆を示したるは神妙のことだといつたるなり。さゝ蟹とはくものことにして、又くもの枕詞にも用ふ。○さかまく　逆巻の字にして、流れにさからひて波のまきあがるをいふ。○さらぬ樣　然らぬ樣にて、何事もなきそぶりなり。

さと　颯の字にして、物のひびきを立てゝ起り來る体のさまをいふ。さっと、さいふに同ト。

さが　性の字にして、本分、性質、氣質、もちまへ、ならはし、習慣などいふに同ト。

さち　幸の字にして、さいはひのことなり。○さゆり　小百合の字にして、單に百合といふに同ト。

さゝげもつみけしの袖にかゝれとは云々　菅原道眞公の筑紫に貶せられて、九月九日に菊の花を見て去年の今夜、京都に在りし時、内裏の菊の宴にて、詩を作り給ひしに、御感に入らせられて、御衣賜はりしを、筑紫まで持ち下りてあるを御覽するにつけて「去年今夜侍二清涼一秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在レ此、捧持每日拜二餘香一」と作り給ひけり。乃ちさゝげもつみけしとは捧持する御衣にして、かゝれには月がけのかゝれと、貶せられてかくあれとの兩意をかねたり。ちぎるとは約束するなり。これにて大意は明なり。

さしつぎ　差繼の字にして、次ぎにつゞくなり。第二に、つぎに、などいふに同ト。

さみす　輕蔑する、侮る、いやしむる、などいふに同ト。

さりともとかきやる浦の藻鹽草云々　王政復古してより、既に十五年を經ぬれども、諸政未だ緒につかず、身は、病にまさはれて、到底、萬眼の衢に立つこと能はざれば、仕を辭して、閑日月を送らんかと思へども、誰が、後任を快く引受けて、諸政を料理して、奏るゝものがあらうず、迚も、其の任に、當るものあらざれば、暨方なくも、病をつとめて、身のたふるゝまでは、其の職をつくさんとの、決心を示したるなり。さりともは、よもやといふに同ト。よもやと思へども云々と、下につゞくなるが、このよもやの一語にて、言外に、大なる意味を存せり。かきやるは、かきすつるをいふ。藻汐草は、海草をいひ、かきさいふ詞には、必ず、藻鹽さいふ詞の、添はるを常とせり。かつぐは通り藻鹽草にちなみていへり。○さりあへず　こなさないなり。○さうび　薔薇の字にして、しやうびの約せられたるなり。ばら、いげぼたん、などいふ植物なり。○さかくし　賢々の字にして、さかしを重れていひたるなり。○さうくし　騷々の字にして、物さわがしきをいふ、又もものさびしきをもいふ。○さはくと　さっぱりさな。○さして　殘の字にして中途にて止むるをいふ。乃ちしのこすなり。いひさして」「腹立ちさして」などの如し。○ざうしずみ　曹司住の字にして、曹子に在るをいふ。曹子とは、昔、禁中官省などにて官吏女官などの用部屋をいひ、之を久つぼねともいふ。

さくくと　喷々の字にして、音の形容にいふ。

さが　祥の字にして、しるし、前兆などいふに同ト。

さかつきのわれてぞいづる雲の上云々　雲がはれて、間より月が出ましたが、ほしのひかりまでか、この月は、そへて居るからであらうか、實に、さやけく光る月であるといふ、表面の意なり。さかつきに、月を、かはらけ、乃ち杯をかれ、われてに、杯のこわれたると、雲のはれたるをかね、雲の上は、皇居、殊に天皇の御前をさしていひ、ほしの位は、天皇のまします御場所をさしていひ、添へばやの「ばや」は、希求辭の「ばや」にあらずして、「ばにやあらん」の約せられたるものなり。

さゝえをたすくるたすけ　さゝえは、竹筒のことにして、酒を入るゝ器なり。

さがなき執殘して　不詳の執念なのこして なり。執念とは、思ひつめし一念をいふ。○**さすが**　流石、道の字なり。しかすがの約せられたる詞にして、本分にはぢぬといふ意なり。しかしながら、されども、さうはいふものゝ、などいふに同じ。

さゆる夜　さゆは、冴、冴の字にして、冷ゆ、寒くなる、などいふに同じ。又月の澄むこと、心の澄むこと、色のあざやかなること、などにもいふ。

さしなは　馬をつなぐ綱をいふ。○**さかもぎ**　逆茂木の字にして藤の枝の角の如く逆立ちてとがりたるを、垣に結び付けて敵兵の攻寄するを防ぐものなり。

さやめく　さわ〳〵と音のするをいふ。

さまあしくもおよびかゝらず　有樣あしく、人の眉などに、及びごしにして、無理に見んとする人は、なしといふ意なり。

さゞ波や志賀の都は荒れにしを云々　近江の滋賀の都は、昔と樣かはりて、荒れて仕舞ふたけれども、長良山の小櫻は、昔のまゝに、美しく咲きてあるとなり。さゝ波とは、小波をいへども、こゝは地名なり。志賀の都は、天智天皇の都なり。昔ながらの「ながら」に、長良山をかけたり。

さきだてしこゝろもよしやなか〳〵に云々　子に先きに死なれたるは、實に心苦しく悲しいものであるが、併し、これは、却りて、世の中の憂き事を忘れてよいだらうとなり。

さがなもの　不善者の字にして、よからぬものをいふ。

さてもやながらへ住むべき　左樣したりとて、永く住みはつべき物にあらずとの意なり。

さるべきものゝさとしかなとぞ　何事か、然るべきことの起るべき、前兆なるべしと、嘆息したるなり。

さそふ水にもあらず云々　古今集に、文屋康秀が、三河のぐうになりて、あがた見には、えいでたゝとやといひやりける返事によめる小野小町とありて、「わびぬれば、身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」とあり。又伊勢物語に、「むかし男ありけり、京やすみうかりけむ、あづまのかたに行きて、住所もとむとて、友とする人、ひとり、ふたりして行けり」とあるによれり。

さる人の子にてあやしき歌よみて　定家卿の子なれば、雅調の歌をよみて、人にきかるゝことはなさゝとの意なり。

さしもしのび給へりし折りからさしも忍び給へりしは、爲家の靈が、かやうに、阿佛尼の夢に通ふが如く、墓ひ行き給ひしといふ意にて、折りからは、訴訟の爲に、阿佛尼が、鎌倉まで下り給ひし折りからといふ意なり。

さきまゐらず　さきは前驅にして、乃ち、前驅を用ひざるをいふ。

さるべきことのをりの御坐と云々　平生の御有樣は、少しも、大臣らしく見えれども、天子の御前などにて、座次の正しく定りたる時と、御はんどころに御出でになりし時とのみ、大臣の如くに見ゆるとなり。御はんどころは、今の内閣の如きものなり。○**さうじ口**　曹子口の字にして、部屋の口なり。

さゝめかして金に渡し　ざわ〳〵と水音さして眞直に渡るなり。○**さかのみかたち**　釋迦の御形なり。

さもそこひなく　さながら深さのかぎりも知れぬやうになり。

さきの盛り　盛にさきたるをいふ。○**さほ姫**　春を司る神にして、花をさかするも、この神のしはざといふ。師兼千首に、「さほ姫のはつるゝ袖の糸櫻風にみだれてちらぬ日ぞなき」とあり。○**さばれ**　さもあらばあれといふなつゞめたるなり。

さにぬり　さは接辭にして、丹塗、乃ち、赤くぬりたるなり。

さつ人　獵人なり。

さとき御まなじり　すばやき御目になり。

さくなりぬらし　狹くなりしやうさいふことなり。

さいをとればだうたむ事云々　賽は、双六の時用ふる賽をいふ。だは博の字にして、錢打ちといふ遊び事なれども、こゝは、双六か打たむと思はるるとの意なり。

さりともと世をおぼし云々　今は、かくありたりとて、やがて、又、都に歸ることもあらむと、いさゝかは、世をたのみにおもひしなるべしとの意なり。

さべう　さるべくの音便なり。

きの部

さんちめーとる　一めーとるの百分の一にして、殆ど、我が三分三厘に當る。

さほは穿つ波の上の月を云々　唐の賈島といふ人の詩にして、流麗義話に、「掉穿波底月、船壓水中天」とあり。けさのけしきに、古の唐の詩句を思ひ出したるなり。

さゝれ波よする紋をば云々　小波の寄せ來る水のあやを見るときは、恰も、川岸に生ひ立ちたる柳のかげが、糸を以て織るかのやうに思はるゝとなり。さゝ波は、小き波にして、紋ば、波のあやを、織物の綾に見なしたるなり。

さくりもよゝなり　息すゝり、涙すゝりして泣くといふ。

きりもの　權臣の字なり。主君などに愛せられて威權の強き人をいふ。

きこえ　聞の字にして、まゝ傳へらるゝ風聞、傳說、とりさた、などいふに同じ。

きこゆ　聞、聽の字にして、耳の感覺により覺り知ることをいふ。又他の動詞を受けて「許し」きこゆ」「待ちきこゆ」「頼みきこゆ」などあるは、敬語として用ひたるにて、申し上ぐる、申受く、申す、などの意に同じ。○きりあふ　鬪合の字にして、一面にきりのかゝりたるをいふ。○きらびやか　きら〳〵ときらめきてうるはしきをいふ。

きはゞし　際々、隨著の字にして、極めてきはだつて居るなり。目だつてきつとして居る、はきゞとはきつく、きはきゞとして、麗しき服をいふ。又みえ、よそほひ、などいふに同じ。○きさら　綺羅の字にして、きほふなり。乃ちはりあふことなり。○きさう者　いやしきものをいふ。

きぬたの音の雁がねに通ふにやあらむ　きぬたの音が能く雁がねの聲に似て居て一緒に思はるゝのであらうかなり。きぬたとは、砧の字にして衣板の音かれたるなり。衣をうつ木の音をいふ。

きりにきりて　きりといふ詞を重ねたるは、其の意をつよからしめんがためなり。きり〳〵とひどくさしこみて痛むをいふ。○きりぶ　「うすきりぶ」の所に出づ。○きまゝ　わがまゝ、きずねなどいふに同じ。又きまゝづきんの略に用ふ。きまゝづきんとは、鼻と口との所に、別にきれなあて、目ばかりを出すやうに縫ひたるなり。

きらゝか　きら〳〵として、美麗なるをいふ。

きえをあらそふ年月を經て　のりの燈火と、母子の命と、どちらが先に消ゆるかさきを爭ふなり。

きぬ笠　蓋の字にして、後よりさしかざす、長柄の傘にて、紐をめぐりにたれたり。故にかくいふ。○きぬの紐をときさけ　羽織の紐なぬきは

なちたるさいふ。○きちかう　結髮のこと。

きそくし　氣色の字にして、知りたるふりをすることなり。

きみおやの惠知らずば人ながら

ゆの部

ゆゝし　由々、畏畏の字にして、いみて慎るべくあるさまをいふ。けしからぬ、ひどい、えらい、いまゝしい、だいそれた、などいふに同ト。

ゆくべかりけり　行くべくありけりの約せられたるなり。

ゆかし　髓の字にして、何となくしたはしきをいふ。見たい、きゝたい、おくゆかしい、などに同ト。○ゆるかせ　忽の字にして、おろそか、粗忽などいふに同ト。

ゆるぐ　搖の字にして、ふるひうごくことなり。○ゆ　關係詞のよりの古言なり。「木の間ゆ」「田子の浦ゆ」などの如し。○ゆばり　尿の字にして、小便のことなり。○ゆくりなく　不意、思ひがけなく、などいふに同ト。

ゆほひか　ゆるやかに廣さをいふ。ゆっくりといふに同ト。

ゆめ　努力の字にして、決してといふ意なり。人を戒むる時に用ふ。

ゆふつけ鳥　鶏のことなり。昔、鶏に木綿をつけて、四方の關に之をはなちて祭事を行ひしことあるよりいふに至れり。

云々　禮記に、「離鶏能言不レ離二飛鳥一、猩々能言不レ離二禽獸一、今人而無レ禮雖二能言一不二亦禽獸之心一乎」云々」とある意によれり。

ゆゑづきたるさまにて　常人とは異りて、何か故の有りさうな樣にてなり。○ゆはだ　「顯織」のことなり。全所を見よ。

めの部

めでたし　愛甚の字にして、けっこうな、うつくしい、などいふに同ト。

めや　めは助動詞むの變化にして、やは反語の關係詞なり。故に、「したがはざらめや」は、從はぬことがあらうか、決してそんな事はない、從ふよとなり。

めではやす　愛嬢の字にして、ほめたつるなり。○めり　想像の關係詞にして、見えありの約りたるにて物事の狀態の其の樣に見ゆるを想像して言へるなり。樣子ぢや、と見えるなどいふに同ト。○めぢのかぎり　眼路の限りにして、目に見やる限り、目のとどく限り、などいふに同ト。

めぐみの露　君のめぐみを露にたとへて言へるなり。

めやすし　目易の字にして、離なきをいふ。乃ち、見よい、好ましい、見にくからぬ、などいふに同ト。○めかれせぬ　目離せぬにて、見やすみせぬ、目ばなしせぬなどに同ト。○めいろ　迷廬の字にして、蘇命露山なるべし。蘇命露山とは、乃ち須彌山のことにして、其の高さ八萬四千由旬ありといふ。一由旬は一説には十六里、一説には三十里なりといふ。○めだう　馬道の字にして、母屋に通ふ縁つゞきの廊下なり。

めでのさかり　盛にめではやす時をいふ。

めづらか　珍しやかにあるなり。○めーとる　尺にして、殆ど、我が三尺三寸に當れり。

めもうつら〳〵鏡に神の云々　鏡にて、神の如何なる心かを始めて見たりとなり。「うつら〳〵」は、熟々なりともいひ、又、彷彿の字義にとく力、おだやかなりともいふ。

みの部

みやゐ　宮居の字にして、神の宮のある所をいふ。

みすゞかる　信濃の枕詞なり。○みさけ　見放の字にして、遠く見やるなり。又人を見くだすをいふ。○みちもせ　路狹の字にして、道に狹くなる程にといふ意なり。○みそなはす　見行、看行の字にして、見るの敬語なり。御覽するといふに同じ。

みづ〳〵し久米の子等が云々　づみ〳〵しは若々しく光澤あるをいふ。久米の子等の冠詞なり。久米の子等は久米部の部下の軍人をいふ。粟生は粟を植ゑたる畠をいひ、菰蓮はにらのことをいふ。それがもとは其の根の本にして、馬髓彦をさしていふ。それめつなぎては、其の根と芽とをつなぎての意にて、馬髓彦と其の部下の兵共とをさせり。一首の意は、奥草憎むべき菰を凶賊全體に、而して其の根を馬髓彦、其の芽を部下の兵共にたとへ、一人も殘さず討伐してやまんと誓ひしなり。

みながら　皆の字にして、殘らず、すべて、などいふに同じ。

みやすどころ　御息所の字にして、古は、皇子、皇女を生みし女御、更衣などをいひたりしが、今は、親王がたの御妃をいふ。

みやびやか　雅の字なり、みやこびたるにて乃ち品がよいなり。

みつはぐむ　齧の字にして稚齒萌の義なり。老人の齒の一旦ぬけ落ちて更に小さく柔かなる齒の出づるをいふ。又甚だ老いたるをもいふ。

みな月の望も近かれど　陰曆六月十五日も近けれどなり。山邊赤人の歌に「ふゝのれにふりおける雪はみなづきの望にけぬればうの夜ふりけり」とあり。この歌によりて書けり。○みぐし　御首の字にして、頭のことをいふ。又毛髮をもいふ。みは接詞なり。○みおや　御先祖のことをいふ。みは接詞なり。

みさゝぎ　陵、山陵の字にして、天皇、皇后、の御墓所なり。

みかど　帝、御門の字にして、天皇を申し奉り、又國家をも言ふ。故に、「わかみかど」とある。は我が日本帝國をいへるなり。○みちゆきぶり　道行觸の字にして旅日記の類をいひ、又道にて行きあふことをもいふ。

みちのくの軍　みちのくとは奥州のことにして、乃ち、奥州の軍兵なり。

みづぐき　水埜の字なり。「水ぐき」の所を見よ。

みやび人　風流人をいふ。

みづぐきの岡のくず葉　みづぐきは、岡の枕詞にして、筆をよせたり。

みし人なみにむかしをぞとふ　みし人なみは、みし人なければの意にして、なみに無みと混さをかれたり。

みくしげどの　御匣殿の字にして、禁中、貞觀殿の后町の北にありて、御裝束を作る所なり。大臣家にてもいふ。

みちのく山のものゝ　黄金をいへり。永に、こがれの花とある即ちこれなり。○みなの川　常陸國筑波郡にあり。

みつのはまべに同く云々　三つに、難波の三津をいひかけたり。○みと　水門の字にして、海水の流るゝ瀬戸をいふ。

みをづくし　船路の浅深を知らする爲に設けし標木なり。

みな人ははなの衣になりにけり　世間一般の人は、皆、喪服をぬぎすてゝ、花やかなる衣服を着替へたるに、我は、そんな所ではなく、今に、涙をこぼして泣いて居て、袖の乾く暇がない、せめては、このこけの袖よ、乾くだけでも、乾きてくれいといふ意なり。花の衣は、喪服ならぬ花やかなる衣服をいひ、こけのたもとは、麤薩の衣にして世捨人の服なり。

しの部

したゞみ　今いふきさごの介なり。

しとのみたて　醜御楯の字にして、しこは醜悪なるものを罵る詞なり。又身を卑下してもいふ。乃ち我が身を以て國家のふせぎとせんといふ意なり。

しのびがへし　忍返の字にして、塀などの上に設くる竹、釘などの柵をいふ。「しのびがへしの塀のもと」のしのびにはしのび行くのしのぶをかねたり。

しがらむ　かちみつくをいふ。○しをり　枝折、栞の字にして、山路などにて、木の枝を折りて道しるべとするをいふ。道の目ぢるし、しるしなどいふに同ト。

しき島のやまと心を人とはゞ云々　若しも人ありて、我が大日本帝國人民の持ちて居るといふなる、日本魂は如何なるものだと問ふことがあらば、我れは之に答へて、朝日のきら〳〵と光り輝きて出でたる時、今を盛りとさきそろへる山櫻の花の、うつりはえて立派に見事なるが如きであると、言はんといふ意なり。しき島はやまとの枕詞にして、やまとは日本國をいへるなり。○しをらし　憐むべき樣なるをいふ。

しつらふ　さゝのふる、飾る、こしらふるなどいふに同ト。

しのぶ、しぬぶ　思の字にして、戀ふ、慕ふ、思ひだす、推しはかるなどいふに同ト。○しおち　爲落の字にして、なすべきことをなさゞりし落度なり。

しるく　著の字にして、明白にあらはるゝことをいふ。はっきりとして、さとしふに同ト。

しばなく　繁鳴の字にして、しげくなくをいふ。

しもと　楮の字にして、枝多き若き木立ちをいふ。わかばえ、むち、なども同ト。

したゝか　健の字にして、甚しく、數多、淨山、などいふに同ト。

しるし　標、印の字にして、證據、他にまぎれぬためのめ目ぢるし、紋所、効驗、前兆、經驗などに同ト。○しばぶき　咳の字にして、せきをするをいふ。

しどけなし、しどけなう　取り亂れてゐるをいふ。取りしまりがない、ぬけめがある、ぢだらくな、などいふに同ト。

しるべ　導、知邊の字にして、相しれる人、めあて、道あんない、などに同ト。

しろしめす、しらす　知食の字にして、土地を保つこと、國を治むることなどをいふ。○したがまへ　下課の字にして、前以て用意することをいふ。○しゃっ首、しゃ首　しゃっ、しゃは憎みて罵る意味の詞なり。

しらつゆのおきふすひまもなでしこ云々　幾てもおきても、子の一身の外に、何も思ひやることのなきのは、親の慈愛心であるといふ意なり。しら露は、おきの枕詞として用ひたるなり。なでしこは、子供を、撫子の花にいひかけ、散らぬといふ詞は、撫子の花の緑よりいひたり。○しほたる　涙な

どにて、軸のねるゝをいふ。○しぞく　退くなり。

しのゝめ　東雲の字にして、夜のあけ方のことなり。

したり顔　己れし出でたりと自慢するほこり顔をいふ。ものしり顔、物をわきまへ顔、などいふも同じ。○しづませ給ふ　しづむは沈の字にして、身分を卑くしておくをいふ。乃ち御位におつき遊ばすことのかなはぬをいへるなり。

しゝむら　肉叢の叢にして、きりたる肉のかたまりなり。

したむ　曬の字にして、水液をたまらするをいふ。

したの袴　上の袴の下にきる袴にして、すゞしのひらぎぬを以て作り、色は緋を用ひ、すべて儀式の時などに用ふ。あかおほくちと同じものなり。

じんどうをはげて　じんどうは矢じりの一種にして、神頭又鏃頭と書く。はぐとは矢を作ることにて、刷の字なり。こゝは矢の根にじんどうを用ひてといふ程の意なり。

しほぎぬの襖　しほぎぬにて作りたる襖なり。襖とは、若き女の着る羽衣なり。○しろかねをのべて　銀をのべてなり。銀ののべがねをいふ。

しきるもたゆみたゆむもまたしきる　きぬたうつ音のしげくに聞ゆるかと思へば、ゆったりとなり、ゆったりとなったかと思へば又しげしげと聞ゆるとなり。○しらせむ　領地としてやらんなり。

しのびごと　誄の字にして、死人を悼み、其の平生の德などを述べたつるをいふ。

したしといひしばかりの人々など　ふるき友だちをいふ。こゝは前文に、「この山までは、むかし見し心地するに」とあるに同じく、曾て、父に伴はれて、この國まで下りたる時の友だちなるべし。

しのびねはひきのやつなる　古歌に「おの

が五月」といふことあれば、四月になくを、忍び音とはいふなり。ひきは、忍び音の低さ、所の名の比企さなかれなり。○したゝかなり　いかめしきをいふ。

しる所も無ければ　しるところは、領地をいふ。

しとゞにぬれて　びしよびしよにぬれてなり。

しか羽を　其の羽なり。

しゝ猿の中に立ちまじりて　猪猿の如きあらくれ武士の中に居てなり。○しだのうき島　霞浦にある一島なり。○しづくの田井　筑波山の麓にありて、雫村といひしが、今は、志筑村といへり。○しふく　繁吹の字にして、風の強く吹くをいふ。

しれ心　痴れたる心をいふ。○しきよそひ　座を設けて、茵をしきたるなり。

ひの部

ひるまず　屈せずといふに同じ。後にひかぬなり。

ひじりの道　ひじりは聖の字にして、人にすぐれて能く物をしり居る人なり。乃ち聖人の道なり。○ひた白、ひたのほり　ひたは、頓、直の字にして、ひたすらと同じ。「ひた白」はまっ白にして「ひた鎧」は鎧ばかり、「ひた登り」はむやみやたらに登ることなり。○ひそ〳〵笑ふ　密々笑ふことにて、人知れずこっそりと笑ふなり。○ひしと丼ぶ　ぴったと丼ぶことなり。

ひが事　僻事の字にして、道ならぬこと曲れることなどいふに同じ。

ひそむ　潛の字にして、忍ばす、かくすなどなり。「心なひそめて」は心をおちつかせてなり。

ひれ　領巾の字にして、古、婦人の頸につけし飾りのきれなり。

ひねもす　終日の字にして、日のつくるまでなり。

ひたすら　只管の字にして、ひたむき、いちづなどいふに同じ。

ひきけり　引きて物をしてくれたるなり。

ひきでもの　引出物の字にして、饗應のありし時其の終りぎはに、贈物をして、招がれたる人にやる品物をいふ。上古は、多く馬を用ひたり。故にこの名起れり。

ひがもの　僻者の字にして、奸者に同じ。心のねぢけたるものをいふ。

ひれふす　平伏の字にして平伏することなり。

ひが心え　僻心得の字にして、考へちがひなり。

ひがくし　僻々の字にして、すなほならぬことをいふ。

ひやかに　ひやゝかに同じ。

○ひら　片、葉の字にして、枚に同じ。乃ち「一ひら」は一枚「二ひら」は二枚なり。

○ひがむ　僻の字にして、正しくなく心のそれたるをいふ。

○ひさげ　提子の字にして、酒をもりて杯につぐ道具なり又柄杓をいふ。

○ひきめ　蟇目の字にして、矢ドりの穴が蟇の目に似たるを以てこの名あり。この鏃は木にて製し、長さ四寸周圍五寸ばかりにして、穴は五六個を設けたり。射る物に傷をつけぬためなりと。又、其の穴にて空氣をきり一種の音を發し、能く妖魔を降伏せさすといふ。

ひゞく　疼の字にして、ひりくと痛むをいふ。

ひとしほ　一入の字にして、ひときは、一層などいふに同じ。

ひぢ　泥の字にしてどろのことなり。

ひたよろひ、ひたかぶと　其の隙全體のものゝ、甲冑

をつけたるをいふ。

○ひさかた　久方、久堅の字にして、日並方の義なり。或はいふ、天は圓くひさごがたなる故、瓠形の意かと、すべて、天に緣あるものゝ枕詞として用ふ。乃ち、「久方の光り」「久方の天」「久方の月」などの如し。

ひとつゆゑづきて　何か一藝を覺えてなり。

ひきはだ　ひきはだ皮にて作りたる、刀の尻鞘をいふ。

ひすまし　樋洗の字にして、古、禁中にて、大便所の掃除を司る下司の女をいふ。

ひたぎりに切りおとす　具覺坊を、滅多ぎりにきりおとす。

○ひじり目　所謂せい目なり。

ひはぎ　追ひはぎ、ひきはぎおどいふに同じ。

ひゞきことにて　響殊の字にして、四方にひゞきわたること、乃ち、評判の高きこと。

○ひたきや　火燒屋の字にして、火たきをする小屋をいふ。

ひとかたに香をやゆづりて云々　古今集に「いまもかもさきにほふらむ橘の小島が先きの山吹の花」とあるを本歌としたり。橘は、山吹に香をやゆづりたであらうか、橘の小島がさきといへるに、橘はなくて、山吹のみ咲き亂れて今をさかりに匂ひぬるがさてもあやしとの意なり。

○ひもを解く　帶の破れて、花の開くをいふ。

○ひゞらぐ　鳴るといふに同じく、しやべることなり。

ひときざみ　一段なり。

ひだり右を供へ給ふ　文武兩道を供へ給ふなり。

ひきはへ　引延の字にして、ひきのべたるをいふ。

ひじりの御代　聖天子の御代をいふ。

○ひこ　孫の子、乃ち曾孫なり。

○ひしめく　犇々とすることにて、騷き合ふをいふ。

ひとめ見し君もや來るとさくら花云々　先頃、一寸來て見た人が、又來るかも知れぬから、今日一日だけ待つて見たがよろしからう。もしも來なかつたならば、それは仕方がないから、其の時こそ勝手に散るならお散りなさいさいふ意なり。

もの部

もたらす　齎の字にして、持ち至るなり。○ものふり　物古の字にして、ふるめかしくなりたるなり。○もうる　印度產の織物緞子に似て浮織なり。其のたて糸を絹糸にし、横に金糸を用ひたるものを金もうるといひ、銀糸を用ひたるものを銀もうるといふ。○ものうき　物憂の字にして、氣のすゝまぬなりいふ。

ものす　物の字にして、すべて事をなすなりいふ。「かいつまんでものせんとす」は、其の大略を書きしるさんとするなり。○もだす　默の字にして、もの言はずだまりなるなり。

もてなす　持成の字にして、取りなすこと、又、修飾すること、人を馳走すること、親切にもてなす、○もずそ　裳の字にして、ものすそなり、單に着物のすそといふ程なり。○も　裳の字にして、女の着る袴なり。白羅裳、地摺裳、下濃裳等種々あり。○もがさ　痘瘡の字にして、天然痘のことなり。

もどく　抵梧の字にして、批離することなりいふ。又、これに似ることをもいふ。

もとゞりとりあぐ　髻取揚の字にして、髮をとりあげて結ぶことなり。之を元服といひ年少の者の大人となる時の儀式なり。古は冠を加へ幼名を去り、近世は男子は前髮を去り女子は眉を剃り歯を染め髮の風を變ふるを言ひたりき。然れども、今の世は絶えて此の儀なし。

もとだち　草木などの莖の生ひたちをいふ。

ものゝふ　武士、武夫の字にして、ぶし、さむらひ、武者、などいふに同じ。

ものぐるほし　狂人めきて居るをいふ。

ものから　ものながらの略せられたるにて、けれども、ではあるが、などいふ意なり。

もの心　世情、乃ち、世の有樣をいふ。

もたひのほとりの竹葉　もたひは、酒を入るゝかめをいふ。和漢朗詠集に「甕頭竹葉經春熟、階底蓂莢入夏開」とあり。

もちひかゞみ　古、陰曆正月元旦に、餅をこて、小兒を祝ふ儀式なり。

ものにもがなやとおぼさるゝもの　古歌に、「さりがへす物にもがなや世の中をありしながらのわが身と思ばむ」とあるによれり。

もちひ　糯飯の字にして、餅のことなり。

ものゝふの宇治の早瀬の云々　高綱が宇治川の早瀬の波を、花の如くにげ散して、われこそさきがけたりと呼ばゝれたる有樣も、げに勇しき事よと、當時の心になりてよみたるなり。ものゝふは、物部にて武人をいふ。又、宇治さいふ詞の枕詞なれば、こゝは、枕詞として用ひたる方重し。○もざ等　猛者等なり。

もゝしきや　大宮の枕詞なり。○もとほり　「いはひもとほる」の所を見よ。○もろ矢　はじめの矢を早矢、次の矢を乙矢といひ、この二つを稱して諸矢といふ。○もりそん　新高山と御命名あらせられたる臺灣の高山なり。

もてくるものよりは歌は云々　持ち來る破子の中の物にくらべては、この歌はいかゝあらん、歌の方が、よほど劣りて見ゆるなり。

もがな　希求の調係詞にして、俗に、したいといふ意なり。「都へもがな」は、都に行きたい

なり。

せの部

せちに 切の字にして、ひたすら、しきりに、などいふに同じ。

せがひ 背櫂の字なれば、せがいの方よろしきか。ふなだなにして、水夫のあがりて船なこぐ所なり。

○せうと 兄人の音便にして、兄のことなり。

すの部

ずさ 從者の字なり。ずゆうしやの約せられて、なだらかによまれたるにて、さも人のことなり。

すさまじ 荒涼の字にして、興さめて面白くなきといふ。ときすぎてつきなきもの、ふきげんな、不興な、きにくはぬ、物すごい、荒るべくあるもの、などいふに同じ。

せいばいにも云々 成敗の字にして、さばきといふ意なり。

せめて 強いてなり。

○せざなり せずあるなりの、約せられたり畧せられたりしたるなり。

すぐやか、すごやか 健の字にして、丈夫、逞者、などいふに同じ。

○すら 拔萃の關係詞にして、なほ、できへ、やはり、などいふ意に似たり。

すさむ、すさぶ 進、荒の字にして、愈々進む、甚しく成り行く、盛んなりしもの

いふ。衰へ行く、などいふことなり。

○すなどり 漁の字にして、魚なとることなり。

○すゞろ 漫の字にして、「ろゞろ」に同じ。

○ずさ 「すさの約せられたるなり。「行かんず」は行かんとす「うたんず」はうたんとすなり。

○ずるす 「行かんずる」は行かんとする、「保たむずる」は保たんとするといふに同じ。

すはや 感嘆詞にして、甚しく驚きたる時、突然に發する詞なり。

すべ 術の字にして、手だて、手段、などいふに同じ。

○すびつ 炭櫃の字にして、ねろりなり。

○すがら 始終の字にして、ばかり、より終りまでの意なり。ざほし、といふに同じ。「夜もすがら」「道すがら」の如し。

○すく〳〵 宿々の字にして、しゆく〳〵なる約したるなり。宿はやどや、又街道に宿屋のある所、乃ち、しゆくば、うまや、などいふに同じ。

○すだく 集の字にして、多くよりむらがるなり。又鳥虫などの鳴くなもいふ。

○すさび 遊の字にして、心なぐさむべき遊びなり。

すのこ 簀子の字にして、竹をあみたるものをいふ。床などに作りたる簀、又轉下ては板縁をもいふ。

○すそわの田井 すそわは裙曲の字にして山の麓の四邊をいふ。田井は田さいふに同じ。

○すべからく 須の字にして、前々より當すべき方策を示す義なり。而して、すべからくの下は「べし」といふ詞にて受くるを法とす。「すべからく讀むべし」の如し。

○すはま 洲濱の字にして、洲のある濱邊の、水中に出入したる所なり。これより轉下て、蓋の上に洲濱の形を作りたる島蓋をすはまといふに至れり。

すゞろあるさ 「そゞろあるさ」に同じ。

すがく〳〵し 心のはれやかにさはく〳〵するをいふ。

すげなう通る 手持ちぶさたに通るをいふ。

すゞし 生絹の字にして、れうぬき糸の織物なり。

すみぞめの色をもかへつつき草

の云々　墨染の僧衣をぬぎすてゝ、花やかなる衣服をめすやうになり得たのも、全く、時運の變轉によりてゞあるとの意なり。花のころもは俗人の着る種々の美麗なる衣服をいひ、つき草はつゆ草のことにして、古、布などに、摺色をつけたる草なるを以て、うつればの枕草としておかれ、うつればは墨染の色の花のころもに移ると、時運の移りかはるとにかけていひたり。

すざまじく思されながら　まわるく思はれて

な。○すゞしき國　靈魂中字にまよひて、淨土にも行きなさでとの意

り。○すゞろはしう　はしたなく、みだりなるをいふ。俗にいふ、そゝつかしいといふに同じ。○すかしおろす　欺きて天位を讓らしむるをいふ。○すなこ　砂子の字にして、まきちらしたる砂をいふ。

すらんがすてーん　吸塵石にして、塵埃の腦中にある石なり。塵腦など吸取る効あり。

すみの江の松を秋風ふくからに

云々　住の江の松を、秋風が、さつ〳〵と吹くや否や直に沖より涙が、どつ〳〵と打ち寄せて來て、風の音に、涙の音を打ち添ふるとなり。

國文通釋　假字の部終

附錄

御歷代帝號一覽

一	神武	二	綏靖	三	安寧	廿二	清寧	廿三	顯宗	廿四	仁賢	四	懿德	五	孝昭	六	孝安	廿五	武烈	廿六	繼體	廿七	安閑	七	孝靈	八	孝元	九	開化	廿八	宣化
廿九	欽明	三十	敏達	十	崇神	十一	垂仁	十二	景行	廿一	用明	廿二	崇峻	廿三	推古	十三	成務	十四	仲哀	十五	應神	廿四	舒明	廿五	皇極	廿六	孝德	十六	仁德	十七	履中
十八	反正	十九	允恭	二十	安康	廿一	雄略	廿七	齊明	廿八	天智	廿九	弘文	四十	天武	四十一	持統	四十二	文武												

四十三 元明　四十四 元正　四十五 聖武
四十六 孝謙　四十七 淳仁　四十八 稱德
四十九 光仁　五十 桓武　五十一 平城
五十二 嵯峨　五十三 淳和　五十四 仁明
五十五 文德　五十六 清和　五十七 陽成
五十八 光孝　五十九 宇多　六十 醍醐
六十一 朱雀　六十二 村上　六十三 冷泉
六十四 圓融　六十五 華山　六十六 一條
六十七 三條　六十八 後一條　六十九 後朱雀

七十 後冷泉　七十一 後三條　七十二 白河
七十三 堀川　七十四 鳥羽　七十五 崇德
七十六 近衛　七十七 後白河　七十八 二條
七十九 六條　八十 高倉　八十一 安德
八十二 後鳥羽　八十三 土御門　八十四 順德
八十五 仲恭　八十六 後堀川　八十七 四條
八十八 後嵯峨　八十九 後深草　九十 龜山
九十一 後宇多　九十二 伏見　九十三 後伏見
九十四 後二條　九十五 花園　九十六 後醍醐

九十七 後村上　九十八 長慶　九十九 後龜山
百 後小松　百一 稱光　百二 後花園
百三 後土御門　百四 後柏原　百五 後奈良
百六 正親町　百七 後陽成　百八 後水尾
百九 明正　百十 後光明　百十一 後西院
百十二 靈元　百十三 東山　百十四 中御門
百十五 櫻町　百十六 桃園　百十七 後櫻町
百十八 後桃園　百十九 光格　百廿 仁孝
百廿一 孝明　百廿二 今上

御諡號の後の字について

前に掲げたる御歷代の御諡號を拜せば、後の字を加へ奉れるもの多きことを知るべし。然るに、前に三條天皇のあられしを以て後三條天皇と申し奉り、前に宇多天皇あられしを以て後宇多天皇と稱し奉るは、誰しも訝るものはあらざるべけれど、前に深草天皇とか四院天皇とかたゞへ奉れる御諡號のあらずして、後深草天皇とか後四院天皇とか稱し奉る御諡號のあらるゝには、聊か疑を存するもの多かるべし。これ全く、深草とか四院とか申し奉る御諡號は、普通の御諡號にはあらざるも、その實は別號にかく申し奉る御名稱の存するを以て、これに對してかくは稱へ奉るものなることを知るべきなり。今その後の字を添ふべき所以を述べんに、

後深草天皇　仁明天皇の崩御し給ひし時、之を紀伊國深草の山陵に埋葬し奉りしかば、世に深草の天皇と申し奉りしを以て、かくは後深草天皇と申し奉るなり。

後小松天皇 光孝天皇の崩御し給ひし時、山城國小松の陵に葬り奉りしを以て、世稱して小松の帝と申したり。依てこれに對して後小松天皇と申し奉るなり。

後柏原天皇 桓武天皇の崩御し給ひし時、大和の柏原の山陵に葬り奉りしを以て、世稱して柏原の帝と申し奉りき。よりて之に對して後柏原天皇と稱へ奉りしなり。

後奈良天皇 平城天皇の御所の宮地の御名によりて、奈良帝と申し奉るによりてかくは申し奉るなり。

年號一覽

大化五　白雉五　白鳳一四　朱鳥一
大寶三　慶雲四　和銅七　靈龜二
養老七　神龜五　天平二〇　天平感寶三ケ月
天平勝寶八　天平寶字八　天平神護二
神護景雲三　寶龜一一　天應一　延曆二四
大同四　弘仁一四　天長一〇　承和一四

後水尾天皇 清和天皇の崩御し給ひし時、火葬して之を水尾山に藏め奉りしを以て、世の人水尾の帝と申し奉りき。これに對して後水尾天皇と申し奉るなり。

後西院天皇 淳和院を西院とも申し奉りしを以て、自然に淳和天皇を西院の帝と申し奉る樣になられたり。これに對して後西院天皇とは申し奉るなり。

御諡號の後の字は、ゴとよむを通例とすれども、後深草天皇に限りて、ノチとよむ例となれり。その故はゴフカクサと稱へ奉るときは、御不幸さまがひまつるを以て之をさけ給ひしなり。

嘉祥三　仁壽三　齊衡三　天安二
貞觀一八　元慶八　仁和三　寬平九
昌泰三　延喜二二　延長八　承平七
天慶九　天曆一〇　天德四　應和三
康保四　安和二　天祿三　天延三
貞元五　天元五　永觀二　寬和二
永延二　永祚一　正曆五　長德四
長保五　寬弘八　長和五　寬仁四
治安三　萬壽四　長元九　長曆三
長久四　寬德二　永承七　天喜五
康平七　治曆四　延久五　承保三
承曆四　永保三　應德三　寬治七
嘉保二　永長一　承德二　康和五
長治二　永承二　天仁二　天永三
永久五　元永二　保安四　天治二
大治五　天承一　長承三　保延六
永治一　康治二　天養一　久安六
仁平三　久壽二　保元三　平治一

永曆一　應保二　長寛二　永萬一
仁安三　嘉應二　承安四　安元二
治承四　養和一　壽永四　元曆九
文治五　建久九　正治二　建仁三
元久二　建永一　承元四　建曆三
建保六　承久三　貞德二　元仁一
嘉祿二　安貞二　寛喜三　貞永一
天福一　文曆一　嘉禎三　曆仁一
延應一　仁治三　寛元四　寶治二
建長七　康元一　正嘉二　正元一
文應一　弘長三　文永一一　建治三
弘安一〇　正應五　永仁六　正安三
乾元一　嘉元三　德治二　延慶三
應長一　正和五　文保二　元應二
元亨三　正中二　嘉曆三　元德二
元弘三　建武二　延元三　興國七
正平二四　建德二　文中三　天授六
弘和三　元中九　明德四　應永二四

正長一　永享一二　嘉吉三　文安五
寶德三　享德三　康正二　長祿三
寛正六　文正一　應仁二　文明一八
長享二　延德三　明應九　文龜三
永正一七　大永七　享祿四　天文二三
弘治三　元祿一二　元龜三　天正一九
文祿四　慶長一九　元和九　寛永二〇
正保四　慶安四　承應三　明曆三
萬治三　寛文一二　延寶八　天和三
貞享四　元祿一六　寶永七　正德五
享保二〇　元文五　寛保三　延享四
寛延三　寶曆一三　明和八　安永九
天明八　寛政一二　享和三　文化一四
文政一二　天保一四　弘化四　嘉永六
安政六　萬延一　文久三　元治一
慶應三　明治

年號について

年號は、或る年期間の紀念として名づけたる名稱にして、上古はその稱呼なかりしを、孝德天皇の元年に始め

て大化といふ年號を建て、その後齊明天智弘文の三朝には之を建てず、天武を經て持統の朝に又之を缺き、文武の朝に大寶を建てゝこれより歴朝絶ゆることなく明治に及びたり。其の間實に二百二十九の年號あり。もし北朝を算入せば、その數二百三十八の多きに上る。これ一朝にして二度以上の改元あることあればなり。後醍醐後花園の朝の如きに至りては、御一代にして八度改元せしことありしを以ても、その年號數の當れるを知るに足らん。明治に至りて、一代一年號の制となられしも、古は、吉兆凶變によりて改元せられたり。即ち孝德の朝に大化の年號を建つるや、仝六年に長門より白雉を獻ずたりとて白雉と改め、文武の朝には對馬より黄金を獻ずたりとて大寶と改元せり。孝謙帝の朝には、仲成の亂平ぎし吉祥なりとて天平神護と改めたり。降て桓武天皇の朝に至りて、即位毎に改むることゝなられしも、尚ほ吉瑞の文字を選びて之にあてたり。仁明帝は之を嘉祥毎に改むることにしたれども、清和の朝に至りて亦桓武の古に復り、醍醐の朝の三善清行、村上の朝の安倍晴明等の革命、革命の議を採用して、辛酉甲子の年には必ず改元する樣になられたり。その後又夢想に依りて改元するの例をも開きたり。安鶴の朝の養和は乃ち法皇の夢想によりて改元せられたるものなり。即位に改元するは爾來大式典なりと雖も、即位後改元せざりし朝少からざりき。これ萬止むを得ざる事情に束縛せられたる結果にして、朝廷の力その大典を擧行すること能はざりしものなり。改元の時に當りて年號を選定するには、先づ多くの學者を集めて文字の吉凶を選擇せしめ、故事出典などを討論せしめたり。之を雜陳といひて、その討議確定すれば、奏上して御裁許を受く、天皇先づ其の號を震筆し給ひて後敕を下し、茲に始めて新年號は建られしなり。この制近時に至るまで改ることなかりき。その勅裁にかなふ號を出せし學者はその子孫永久に盛ゆとて、必死となりて之を選

擇して提出せられき。もしその各學者より提出せし雜名の中に勅裁にかなふものなかりし時は、天皇自ら御震定遊ばされきといふ。この雜陳につきて面白き笑話あり。明和の號を定められし時に、九年に至りて困るならんと難下たるものあり。その理由をきけば、メイワクと國音相通ずる故なりとか。然る故にや明和は八年にして安永と改りたり。又洪德は不祥なしと難下たる理由をきけば、洪德の洪は洪水の洪なりとの批難なり。又嘉政は苛政と同音なりとか、正實は憶亡と同音なりとか、正は一止の結合したる文字なれば、一年にして長く續かざらんとか、保は分解すれば人の口をホスになる故凶年の兆なりとか難ずるものあれば、之を辨解するものは正しく保つといふ文字にして吉兆の年號なりといふ。世人、天保の年號を批難して、之を分解すれば『一大人の口をほす』といつたるが如きも、雜陳より來る妄說なりと知るべし。

名數

一の部に屬する詞は多く本文一畫の部にあり。

一の部

二尊　釋迦牟尼佛と彌勒菩薩とをいふ。○二所宗廟　伊勢大神宮と石清水八幡とをいふ。○二劍　吳王の所藏する干將莫邪の二劍をいふ。

二童子　制多迦童子と矜迦羅童子とをいふ。

二十一代集　八代集と十三代集とを合せたるをいふ。

二十四孝 支那における古代有名の孝子にして、大舜、漢の文帝、曾子、閔子、仲由、董永、剡子、江革、陸績、唐夫人、吳猛、王祥、郭巨、楊香、朱壽昌、庾黔婁、老萊子、蔡順、黃香、姜詩、王裒、丁蘭、孟宗、山谷の二十四人をいふ。

○二十寮 古代諸省中におきたる殿舍の寮數にして、大舍人、圖書、內藏、縫殿、內匠、大學、雅樂、玄蕃、諸寮、主計、主稅、木工、左右馬、兵庫、陰陽、主殿、典藥、大炊、掃部、齋宮の二十寮をいふ。

二十二社 昔、京都鳥居の守護の神として祀られたる伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴船、三輪、の二十二大

○二十八宿 支那古代の天文學の詞にして、東方は角、亢、氐、房、心、尾、箕、北方は斗、牛、女、虛、危、室、壁、西方は奎、婁、胃、昴、畢、觜、參、南方は井、鬼、柳、星、張、軫、翼の二十二恒星をふ。

二十一回猛士 吉田松陰先生の別號なり。

二十八將 德川氏の功臣にして、日光廟へ合祀せられたる松平康忠、酒井忠次、伊井直政、榊原康政、大須賀康高、大久保忠敎、伊奈忠俊、伊那忠政、大久保忠世、大久保忠佐、內藤信成、酒井正親、內藤家長、米津淨忠、菅沼正忠、平岩親吉、奥平信昌、本多忠勝、鳥居元益、渡邊守綱、岡部長成、高木正順、蜂屋貞次、服部正綱、安藤直次、本多康高、松平伊忠、水野勝成の二十八將をいふ。

二島 壹岐と對馬とをいふ。

○二都 大和の平城と山城の平安とをいふ。

二道 文藝と武藝との二道をいふ。

二十四氣、二十四節 曆道の詞にして一年を二十四分したる季節なり即ち立春（二月三日）、雨水（二月十八日）、啓蟄（三月五日）、春分（三月廿日）、清明（四月五日）、穀雨（四月二十日）、の春季と立夏（五月五日）、小滿（五月二十一日）、芒種（六月五日）、夏至（六月二十一日）、小暑（七月七日）、大暑（七月廿三日）の夏季と立秋（八月七日）、處暑（八月二十三日）、白露（九月九日）、秋分（九月廿三日）、寒露（十月八日）、霜降（十月廿三日）の秋季と立冬（十一月七日、小雪（十一月廿二日）、大雪（十二月七日）、冬至（十二月廿二日）、小寒（一月五日）、大寒（一月廿日）の冬季とをいふ。

三の部

三十六歌仙 一條天皇の朝に、藤原公任が選ぶ和歌に長けたる人麿、赤人、家持、伊勢、貫之、小町、躬恒、業平、遍昭、素性、友則、儀丸、兼輔、朝忠、敦忠、高光、公忠、忠岑、齋宮、輔基、敏行、重之、字干、信明、清正、順、興風、元輔、是則、元眞、左近、仲文、能宣、忠見、兼盛、中務の三十六人をいふ。

○三世 過去、現在、未來をいふ。

三十六峰外史 賴山陽の別號なり。

○三親 父子、夫婦、兄弟をいふ。

○三津 薩摩の坊津、筑前の博多津、伊勢の安濃津をいふ。或は安濃津を省きて藤津の堺津を加へていふものもあり。

○三神 天御中主神と高皇産靈神と神皇産靈神とをいふ。

○三春 春の季節にあたる三ケ月をいふ。

○三冬 冬の季節にあたる三ケ月をいふ。

○三鏡 大鏡と水鏡と增鏡とをいふ。

三衣 僧の着る上着と中着と下着とをいふ。

○三綱 君臣と父子と夫婦との間柄をいふ。

○三家和歌集 水戸、長嘯、下河邊長流、僧契冲の三人の歌集をいふ。

○三騎射 笠懸、藪懸、犬追物をいふ。

三極、三才 天と地と人とをいふ。

○三光 日と月と星とをいふ。

三宮、三后 大皇太后宮と皇太后宮と皇后宮の三宮を申し奉る。

三蹟 小野道風と藤原佐理と藤原行成との筆蹟をいふ。

○三筆 嵯峨天皇と僧空海と橘逸勢との筆蹟をいふ。

○三姓 古昔祭主となるべき資格ある三人の姓に人麿と山邊赤人とを和歌の二聖といふ。

○二聖 柿本

○二神 住吉、玉津島を和歌の二神といふ。

して、大中臣、ト部、齋部といふ。○三十三所　日本國内における佛者の靈地にして、那智の如意輪寺、紀の三井寺、粉河寺、槇の尾の施福寺、藤井寺、壺坂の南法華寺、龍蓋寺、長谷寺、南圓堂、宇治堂、上の醍醐の淮胝、岩間の正法寺、石山寺、三井寺、新熊野、清水寺、六波羅密寺、六角堂、都堂の行願寺、西山の善峯寺、穴穂の菩提寺、總善寺、勝尾寺、中山寺、播广の清水寺、法華山、書寫山如意輪寺、成相寺、松尾寺、竹生寺、長命寺、蘆浦の觀音寺、谷波の醍醐寺の三十三ヶ寺といふ。

三時　農事に大切なる三度の時にして春は耕し夏はくさぎり、秋は收むるの三時なり。

三十三間堂　京の四大谷にありて得長壽院といひたり。その本尊は一千眼の觀世音菩薩なり。○三忠臣　小松重盛と、藤原藤房と楠正成とをいふ。

三朔日　正月の元日と、六月の朔日と、八月の朔日とをいふ。

三大橋　古、山城の山崎橋、宇治橋、近江の勢多橋をいふ。

三道　藤原道長、藤原道隆、藤原道兼をいふ。○三太守　昔、上總國と、常陸國と、上野國とにおきたる太守をいふ。○三代集　勅を奉ぜて集めたる歌書にして、即ち古今集、後撰集、拾遺集これなり。○三德　智仁勇をいふ。

三平　藤原時平と、仝忠平と、仝仲平をいふ。○三平二滿　額と鼻と頤とは平にして、兩頰の突き出て高き即ちおたふくをいふ。○三役　角力の大關と關脇とを小結といふ。○三門　中央と左右兩方との三つ連りたる門をいふ。

三十家　戰國の三十家とは、北畠、今川、武田、小笠原、村上、兩上杉、千葉、宇都宮、里見、佐竹、大崎、蘆那、伊達、南部、最上、小野寺、佐々木、土岐、若狹の武田、能登の畠山、攝津の細川、赤松、山名、一色、大内、阿波の細川、大友、菊池、島津、龍造寺の三十氏をいふ。

三天　弓矢三天とは、大黒天と、辨才天と、摩利支天とをいふ。○三教　儒教と、佛教と、道教とをいふ。○三如來　善光寺の阿彌陀如來と、嵯峨の釋迦如來と、因幡堂の藥師如來とをいふ。○三山　熊野三山とは那智と、本宮と、新宮とをいふ。

三關　相阪關と、鈴鹿關と、不破關とをいふ。○三社　伊勢大神宮と、石清水八幡と、春日大明神をいふ。○三管領　室町三管領は武蔵、畠山、細川なり。

三老　北條三老とは松田賴秀、遠山景政、大道寺重宗をいひ、大友の三老とは吉弘鑑理、臼杵鑑速、戸次鑑連をいひ、鎌倉の三老とは北條時政、和田義盛、畠山重忠をいひ、信井順慶の三者とは、島友之、松倉勝重、森好之をいひ、千葉の三老とは原、水内、鄭木をいひ、武衛の三老とは甲斐、朝倉、織田をいふ。

三國司　奥州の畠山と、伊勢の北畠と、飛彈の姉小路とをいふ。

三兄弟　佐藤、鈴木、曾我をいふ。○三鳥　呼子鳥と、稻負鳥と、郡鳥とを古今集の三鳥といひて秘訣としたりき。○三士　三河三士とは渡邊守綱、鎗牛藏、部正成、をいひ、淺井の三士とは赤服尾清綱、海北綱親、兩森氏をいふ。

三本槍　吉川の三本鎗とは今田、朝枝、森脇をいふ。○三介　關東三介とは千葉、上總、三浦をいふ。○三中老　豐臣の三中老とは畑尾吉晴、生駒正成、中村一氏をいふ。○三奉行　三河三奉行とは本多重次と、高力清長と、天野康景とをいふ。○三法師武者　土佐坊昌俊と、義勝坊成尋と、意法坊昌寛とをいふ。○三振刀　豐太閤の臣にして賤が岳の戰の時に七本槍と共にその名著る。乃ち石川平助、櫻井佐吉、伊木牛七の三人なり。

四の部

四六判　四洋紙の廣さの名前にして竪三尺六寸横二尺六寸なり。之を二つにきりたるものが普通の新聞なり。○四親王家　伏見宮、有栖川宮、桂宮、閑院宮をいふ。

四十八手 相撲の手にして、そり、ひねり、なげ、かけの四種の手に、各十二の變体あるを以て、都合四十八手となるなり。**○四十八鷹** 鷹の種類に四十八種ありといふ。**○四姓** 源、平、藤原、橘の四姓をいふ。

四道將軍 武停川別命、丹波道主命、吉備津彦命、大彦命の四人をいふ。

四天王 義經の四天王は鎌田盛政、同光政、佐藤嗣信、仝忠信をいひ、義仲の四天王は今井兼平、樋口兼光、楯親忠、根野井行親をいひ、武將四天王は平維衡、源頼信、平致頼、藤原保昌をいひ、義貞の四天王は栗生、篠塚、畑、巨理をいひ、蘆名の四天王は平田、松本、佐瀬、富田をいひ、織田の四天王は柴田、瀧川、丹羽、明智をいひ、武田の四天王は坂垣、飯富、小山田、甘利をいひ、結城の四天王は多賀谷、木谷、山川、岩上をいひ、上杉の四天王は、直江、甘糟、宇佐神、柿崎をいひ、二階堂の四天王は箭部、濱田、遠藤、守屋をいひ、和歌の四天王は頓阿、兼行、淨辨、慶運をいふ。

五の部

五節句 正月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日をいふ。

四大師 傳教大師、弘法大師、慈覺大師、智證大師をいふ。**○四門** 藤原氏は分れて南家、北家、式家、京家の四門となる。南家は淡海公の嫡子武智丸の後にして、北家は次子房前式家は宇合、京家は麻丸の後あり。**○四苦** 生、死、病、老をいふ。

四本槍 龍造寺の四本槍とは成松遠江守、百武志摩守、圓成寺美濃守、江里口藤七郎をいふ。

○五將 清盛、頼朝、尊氏、信長、秀吉をいふ。**○五雄** 毛利元就、北條氏康、武田晴信、上杉輝虎、織田信長をいふ。**○五藏** 伊藤仁齋の五子にして長を源藏、次を重藏、次を正藏、次を平藏、次を才藏といふ、共に碩學を以て著れたり。

五先生 木下順庵の高弟五人の稱にして、新井白石、室鳩巣、兩森芳洲、祇園南海、榊原篁洲をいふ。**○五本槍** 島津の五本槍は川上左京、同四郎兵衛、同久兵衛、久保七兵衛、押川六兵衛をいふ。**○五色** 赤と、白と、黑と、青と、黃とをいふ。

五十三次 東海道にある五十三の宿場をひふ。**○五攝家** 近衛、九條、二條、一條。**○五體** 頭、兩手、兩足をいふ。

五畜 鶏、羊、牛、馬、豕をいふ。**○五筆和尚** 弘法大師をいふ。大師は、口と兩手と、兩足とに筆をもちて、よく文字を書き得たりといふ。

五木 桑、楮、桃、柳、槐をいふ。**○五大老** 德川、前田、毛利、浮田、上杉をいふ。**○五奉行** 前田、淺野、增田、石田、長束をいふ。

六の部

六合 天地と東西南北とをいふ。**○六歌仙** 和歌の名人六名を選びたる稱にして、喜撰法師、小野小町、在原業平、大伴黑主、文屋康秀をいふ。

六國史 日本紀、續日本紀、日本後紀、文德實錄、三代實錄をいふ。

六黨 千葉の六黨とは、千葉、相馬、武石、大須賀、國分、東をいふ。

六花士 浮田の六花士とは、花房志摩、花木主膳、花田權兵衛、花岡傳兵衛、花津與左衛門、花村三右衛門をいふ。**○六齋日** 八日、十四日、十五日、廿三、廿九日、晦日をいふ。

ふ。○六骸　首と體と兩手と兩足とをいふ。○六具　六つの戰具にして、胴、小手、袖、脇楯、脛楯、脛當をいふ。○六時　念佛を唱ふるに一晝夜を六つに分ちたり。即ち早朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜なり。○六獸　麋、鹿、兎、野猪をいふ。○六傳染病　麻疹、天然痘、虎列刺、腸チブス、ジフテリヤ、赤痢をいふ。○六衛府　左右近衛府、左右衛門府、左右兵衛府をいふ。

七の部

七雄　支那の古の七大國にして、趙、楚、燕、齊、秦、魏、韓をいひ、我國戰國の七雄とは織田信長、今川義元、武田信玄、毛利元就、上杉謙信、北條氏康、豐臣秀吉をいふ。

七本槍　加藤清正、福島正則、平野長康、加藤嘉明、糟谷武則、脇坂安治、片桐且元を賤岳七本槍といひ、小豆坂の七本槍とは織田信光、全信房、佐々政次、全勝豐、下匡範、岡田重能、中野忠則をいひ、蟹江の七本槍とは阿部忠政、大久保忠利、全忠世、全忠佐、全忠員、杉浦鑑貞、全鎮榮をいひ、植田の七本槍とは戸田、太田、辻、小野、中山、朝倉、齊藤をいふ。○七國將棊　朝鮮より渡來の將棊にして、晉の七雄將に取合せたるものなり。その盤の太さは三間四方にして、駒の數も隨つて多く、その周圍に七人腰をかけ、杖の如きものを以て駒を遣退せしむといふ。

七珍、七寶　般若經には金、銀、瑠璃、虎珀、瑪瑙、珊瑚、硨磲をいひ、阿彌陀經には金、銀、瑠璃、硨磲、玻璃、赤珠、瑪瑙をいひ、恒水經には、金、銀、瑠璃、眞珠、硨磲、明月珠、摩尼珠をいふ。○七寶山　富士山の別名なり。

七堂伽藍　山門、佛殿、法堂、廚、僧堂、浴室、東司の七室そろへる伽藍をさしていふ。

七種粥　白米、大豆、小豆、粟、稗、栗、柿を入れて煮たる粥をいふ。

七清華　久我、花山院、德大寺、四園寺、大炊御門、轉法輪、西園寺の七家をいふ。

七騎　松山の七騎とは、源頼朝、土肥實平、全遠平、足立啓長、新開忠氏、土屋宗遠、岡崎義實をいひ、東奥の七騎とは、源頼義、全義家、加藤景廉、大宅光任、清原貞廣、藤範季、坂戸明明をいふ。

七歌仙　梨園の七歌仙とは赤染右衛門、和泉式部、清少納言、紫式部、伊勢大輔、馬内侍、小式部をいふ。○七黨　島津の七黨とは新納、北郷、伊集院、町田、川上、阿多、梶木をいひ、武藏の七黨とは、丹治、私市、兒玉、猪俣、四野、横山、村山をいふ。

七馬士　馬木彦右衛門、馬川渡之助、馬飼舍人、馬塚昇助、馬井汲助、馬路走助、馬山翔右衛門をいふ。○七福神　布袋和尚、福祿壽、惠比壽、大黑天、辯才天、毘沙門天、壽老人をいふ。

八の部

八代集　八部の勅選歌集にして、古今集、後選集、拾遺集、後拾遺集、詞花集、金葉集、千載集、新古今集をいふ。○八平民　關東にて平家を名乘る八家をいふ。乃ち千葉、上總、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾をいふ。○八木　八木の二字を合すれば米といふ字になるを以て、米の別名をいへども、松、柏、桑、棗、櫨、柘、榆、竹をいふ。

八介　八人の介にして出羽の秋田城介、相模の三浦介、下總の千葉介、上總の上總介、伊豆の狩野介、加賀の富樫介、周防の大内介、遠江の井伊介これなり。○八臣　楠の八臣は和田、恩地、矢尾、湯淺、志貴、橘本、安藤、早瀬をいひ、畠山の八臣とは神保、温井、三宅、平、遊佐、譽田、伊丹、甲斐莊をいふ。○八將　大友の八將とは田原、田北、鶴崎、吉岡、伊美、吉弘、

川窪、城井。

○八谷黨　吉見の八谷黨とは谷村伊豆、谷尾大學、谷井美作、谷川彌五郎、谷戸甚三郎、谷月景藏、谷野助五郎、谷橋彌四郎をいふ。

八犬士　里見の八犬士とは犬山道節、犬塚信乃、犬田小文吾、犬坂毛野、犬飼現八、犬川莊助、犬江親兵衛、犬村大學をいふ。

○八音　金、石、絲、竹、匏、土、革、木より發する音をいふ。

○八代史　支那の八部の歷史にして、晉書、宋書、齊書、梁書、周書、隋書、唐書をいふ。

九の部

九僧　大法會の時の九人の役僧をいふ。乃ち導師、呪願、唄師、散花、引頭、堂達、鞨鼓、梵音、錫をいふ。

○九代　北條九代とは時政、義時、泰時、經時、時賴、時宗、貞時、師時、高時をいふ。

○九黨　鎭西の九黨とは小貳、大友、惟任、惟住、秋月、島津、菊池、原田、松浦をいふ。

○九牛士　尼子の九牛士とは牛尾遠江、牛田源五兵衛、牛岡草之助、牛川飛右衛門、牛井呑衛門、牛屎踏右衛門、牛田鋤右衛門、牛引夫兵衛、牛飼糠右衛門をいふ。

九拜　周禮に稽首、頓首、空首、振動、吉拜、凶拜、奇拜、褒拜、肅拜をいふ。

十の部

唐書をいふ。

○八領鎧　八種の鎧にして、乃ち月數、日數、八龍、澤瀉、薄金、無櫛、膝丸、源太が產衣なり。これ皆源家重代の珍寶なり。

○八宗　佛教の八の宗派にして律、倶舍、成實、法相、三論、天臺、花嚴、眞言をいふ。

○八卦　八種の易の卦にして、乃ち乾、坤、巽、震、離、兌、艮、坎をいふ。

○八陣　兵法家の天、地、風、雲、龍、虎、鳥、蛇の八つに象れる陣法なり。

十八將　甲陽の十八將とは武田義信、仝信繁、仝信運、穴山信君、飯富虎昌、原虎胤、小畑日意、山本道鬼、高坂昌信、馬場信房、山縣昌景、小山田昌行、甘利晴吉、諸角昌清、內藤昌豐、小山田信有、小幡信貞、眞田幸隆をいふ。

○十六將　三州の十六將とは酒井忠次、石川數正、大須賀康高、井伊直政、本多忠勝、平岩親吉、榊原康政、石川家成、松平信一、松平家忠、仝康親、大久保鳥井元忠、本多康孝、本多忠次、本多忠世、植村家政をいふ。

○十六騎　源太の十六騎とは鎌田政家、後藤眞基、佐々木秀義、波多野義通、三浦義澄、猪股則綱、熊谷直實、平山季重、金子家忠、足立遠元、上總廣常、關時員、片切景重をいふ。

○十三代集　十三部の勅選和歌集にして、乃ち新勅選、續後選、續古今、續拾遺、新後選、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の十三部なり。

○十二宮　太陽の周圍を想像したる十二帶の名目にして、白羊宮、金牛宮、雙女宮、巨蟹宮、獅子宮、天秤宮、天蠍宮、人馬宮、磨羯宮、寶瓶宮、雙魚宮をいふ。

○十二門　舊內裏の御門にして、乃ち陽明門、侍賢門、郁芳門、美福門、朱雀門、皇嘉門、談天門、藻壁門、殿富門、安嘉門、偉鑒門、達智門これなり。

十陵　山階、後田原、柏原、長岡、八島、楊梅、深草、田邑、後山階、鳥戸の十の陵をいふ。

十六藤　苗字に藤の字のつきたる十六家にして、近藤、加藤、內藤、安藤、春藤、後藤、伊藤、遙藤、武藤、齊藤、佐藤、工藤、遠藤、尾藤、須藤、神藤をいふ。

十七個條憲法　聖德太子の選み給へる憲法をいふ。

十七史　支那の十七部の歷史にして、史記、前漢書、後漢書、三國史、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、後魏書、北齊書、周書、隋書、南史、南史、唐書、五代史をいふ。

相似字

丁はテイにして、丁はカ下の古字なり。

匕はヒにしてさじのことなれども、匕は古の化の字にしてクワなり。
刃はジンにてはものなれども、刃はサウにして創の古字なり。
个はカにして數なれども、个はテイにして古の丁丁の字なり。
儿はクワンにしてはじきだまなれども、凡はハンにしておよそなり。
叉はサにして手をこまぬくことなれども、叉はサウにして古の爪の字なり。
厶はトツにしてさかふなれども、云はウンにしていふことなり。
毛はモウにて髪の毛なれども、毛はサンにして碑の名なり。
爪はソウにしてつめなれども、爪はシャウにして古の掌の字なり。
市はフツにしてまゝだれなれども、市はシにして町のことなり。
丙はベンにしてかくすなれども、丙はカイにして乞ふ意なり。
曰はハウにしておほふなれども、曰はエツにしていふ意なり。
壬はテイにして長と仝じなれども、壬はジンにして十干の名なり。

玉はギョクにしてたまなれども、王はキウにしたまをする人なり。
仝は全と同じく、仝は同と同じ。
叱はクワにして、叱は呵と同じくセツなり。
刋はセンにしてきるなれども、刊はカンにしてけづるなり。
氾はハンにして泛と同じく、氾はシなり。
四はシにして皿はマウにして網なり。
穴はシャウにして穴はケツなり。
耒はライにしてすきなれども、耒はレツにしてとがさなり。
回はクワイにして、回はメン面の古字なり。
束はシいばらにして束はソクなり。
糸はベキにして細きいと糸はクイなり。
忍はギいかることにて、忍はニンしのぶなり。

圮はヒにして圯はイなり。
劦はリにして割るなり、劦はケウにして力を合することなり。
沐はモクにして沭はジュツなり。
改はイにして改はカイなり。
豕はシにていのこ豕はチクなり。
辛はシンにて辛はケンなり。
沂はキンにて泝はソさかのぼるなり。
皂はサウにて黒のこと皂はキャウにて玄米なり。
戻はタイにて戻はレイなり。
夾はケウにて夾はセンなり。
底はシにて底はテイなり。
汨はコツにて汨はイツなり。

事はシにて事はサウ爭の字なり。
届はテンにて届はカイなり。
易はイにて易はヤウ陽と同じ。
刺はシにて刺はラツなり。
妹はマイにて妹はバツなり。
劵はクワンにて劵はケンなり。
佳はタイにて佳はカなり。
盂はカンにて盂はウなり。
幸はカウにて幸はタツ小羊なり。
姬はシンにて姬はキひめなり。
苗はベウなへにて苗はテキなり。
味はマイにて昧はバツなり。

段はタンにて叚はカなり。
冠はクワンにて寇はコウなり。
速はセキにして速はソクなり。
奘はサウにて奘はナウ強き犬なり。
栗はリツくりにて栗はゾク粟はショクもみごめなり。
羨はイにて羨はセンうらやむなり。
閏はテイにて閏はジュンうるふなり。
壺はコにてさかつぼ壺はコンなり。
欹はイにてなげくこと敧はキにてそばだつなり。
傳はフにてもりやく傳はデンにてつたふなり。
掾はエンにて椽はテンなり。
棟はトウにて棟はレンなり。

袷はカフにして袷はカフあはせなり。
商はシヤウにして商はテキなり。
場はテキにして場はヂヤウなり。
訢はキン欣と同じく訴はッうつたへなり。
冕はベンかんむりにて冕はヘンなり。
塚はチヤウにて塚はハウなり。
登はトウにて登はトウのぼるなり。
祼はクワンにて祼はラはだかなり。
搏はハクうつにて搏はタンなり。
盡はシンつくすにて盡はシンうるほひなり。
禊はケイにてはらひ禊はケツなり。
頤はシンにて頤はイおとがひなり。

彊はキャウ強にて疆はキャウ境なり。
錬はトウにて錬はレンなり。
聽はトクにて聽はテイきくなり。
鍛はタンきたふにて鍛はカなり。
藉はセキむしろにて籍はセキ書きものなり。
已はキおのれにて已はイすでに已はシ十干の名なり。
卯はケイ卿卯はエン卯はバウなり。
本はホン本はシ本はタウなり。
臼はキウうすにて臼はキクなり。
臺はダイ臺はオクなり。
戌はモ戌はエッ戌はシュッ戌はシュなり。
延はセイ廷はテイ延はエンなり。

芋はカン芋はセン芋はウなり。

十二ヶ月の異名

正月	睦月（ムツキ）	初空月	初見月
二月	衣更月（キサラギ）	如月（キサラギ）	梅見月
三月	彌生月（ヤヨヒ）	櫻月	花見月
四月	卯月	卯の花月	花殘月
五月	皐月（サツキ）	立花月	月見ず月
六月	水無月（ミナヅキ）	風待月	鳴神月
七月	文月（フミヅキ）	七夕月（タナバタヅキ）	涼月
八月	葉月	秋風月	月見月
九月	長月	菊月	紅葉月
十月	神無月（カンナヅキ）	時雨月（シグレヅキ）	初霜月
十一月	霜月	神樂月（カグラヅキ）	雪見月
			小草生月（ワカクサオヒヅキ）
			常夏月（トコナツヅキ）
			女郎花月（オミナヘシヅキ）
			月覺月

十二月　四極（シハス）　師走（シハス）　深冬月（トフユヅキ）　年惜月

方位

乾（ケン）　戌亥の方角にして、西北なり。
坤（コン）　未申の方角にして、西南なり。
巽（ソン）　辰巳の方角にして、東南なり。
艮（ゴン）　丑寅の方角にして、東北なり。

子　正北の方角なり。
丑　東北より少し北にかたよりたる方角なり。
寅　東北より少し東にかたよりたる方角なり。
卯　正東の方角なり。
辰　東南より少しく東にかたよりたる方角なり。
巳　東南より少しく南にかたよりたる方角なり。

午　正南の方角なり。
未　西南より少しく南にかたよりたる方角なり。
申　西南より少しく西にかたよりたる方角なり。
酉　正西の方角なり。
戌　西北より少しく西にかたよりたる方角なり。
亥　西北より少しく北にかたよりたる方角なり。

干支

甲子　きのえねといふ。
乙丑　きのとうしといふ。
丙寅　ひのえとらといふ。
丁卯　ひのとうといふ。
戊辰　つちのえたつといふ。
己巳　つちのとみといふ。

庚午　かのえうまといふ。
辛未　かのとひつじといふ。
壬申　みづのえさるといふ。
癸酉　みづのととりといふ。
甲戌　きのえいぬといふ。
乙亥　きのとゐといふ。

以下かくの如く接續して、六十一年目に甲子に還る。

時刻

子の刻	午後十二時	子の半刻	午前一時
丑の刻	仝二時	丑の半刻	仝三時
寅の刻	仝四時	寅の半刻	仝五時
卯の刻	仝六時	卯の半刻	仝七時
辰の刻	仝八時	辰の半刻	仝九時
巳の刻	仝十時	巳の半刻	仝十一時
午の刻	正午十二時	午の半刻	午后一時
未の刻	仝二時	未の半刻	仝三時
申の刻	仝四時	申の半刻	仝五時
酉の刻	仝六時	酉の半刻	仝七時
戌の刻	仝八時	戌の半刻	仝九時
亥の刻	仝十時	亥の半刻	仝十一時
九つ時	十二時	九つ半時	一時
八つ時	二時	八つ半時	三時
七つ時	四時	七つ半時	五時
六つ時	六時	六つ半時	七時
五つ時	八時	五つ半時	九時
四つ時	十時	四つ半時	十一時

右は晝の九つ夜の九つと、かく晝夜二樣に計へたりき。

初更　午后八時　二更　仝十時
三更　仝十二時　四更　午前二時
五更　仝四時

附錄終

明治三十五年一月十九日印刷
明治三十五年一月廿三日發行
明治三十六年二月廿八日訂正印刷
明治三十六年三月四日訂正再版發行

國文通釋
定價金五十錢

編者　國語研究組合
代表者　中野虎三
發行者　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　杉山辰之助
印刷者　東京市麹町區内幸町一丁目五番地　多田三彌
印刷所　東京市麹町區内幸町一丁目五番地　惠愛堂

不許複製

發兌　東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地　金昌堂
電話　本局九百五十八番

佐久間文太郎氏校閲
田中延氏著
◉算術問題解法教科錄　全二冊　定價各金四十錢　郵稅各金六錢

高橋清一氏著
◉實驗ローンテニス術　全一冊　定價金廿五錢　郵稅金四錢

東京高等師範學校訓導富永岩太郎氏著
◉各科實驗教授法講義　全一冊　定價金七十八錢　郵稅金十錢

東京高等師範學校訓導富永岩太郎氏著
◉教育の實際に應用したる心理學　全一冊　定價金四十五錢　郵稅金六錢

女子高等師範學校助教授東基吉氏著
◉新編小學教授法　全一冊　定價金五十錢　郵稅金八錢

佐藤卓爾氏增訂
◉增訂歷史年表　國學院　定價金二十錢　郵稅金四錢

終